







滋賀県災害誌

滋賀県

従復原失善証正誤表

頁	行	誤	正
1	下段より7行目	21mys	北.北面 21mys
78	図面.地上天候図内	低	高
164	下段 区分表		
"	"		
"	"		
182	下段より9行目	船舶流米半環 2991戸	2991 隻
185	下段より7行目	(彦根) 丸	丸 削除
204	中段	※の記号が初めてある	9月4日 240 SSE の標に ※と入札を 産の前には

発刊にあたって



過去幾世紀の間、天変・地変によって、貴い生命、あるいは辛苦して築き上げた財産を、一瞬の中に奪い去られるような災害が繰返されてきました。このような災害は、多分に自然によって起こされる避け得られないもの、いわゆる宿命的な天災として受けとられてきました。

しかし、社会の進展に伴い、科学的な治山・治水等の拡充によって、天災としてあきらめられていた災害も、次第に防止できるものと考えられるように変わりつつあります。

県では、災害から県民の生命財産を守るため、先に、滋賀県地域防災計画を樹て、防災体制の確立を図っておりますが、その基礎として、先づ過去の災害状況を認識することが必要であります。

今回、彦根地方气象台から長期にわたる資料の提供と、積極的な編集の協力を得て、災害史料の集成ができ、滋賀県災害誌として刊行することになりました。

今ここに、過去の幾多の災害を振り返り、祖先の労苦を考えながら、このような災害の繰返しを断ち切れるよう、なお一層防災に力を尽したいと考える次第であります。

昭和 41 年 3 月

滋賀県知事 谷口 久次郎

はじめに

1. 本誌は、古代から昭和40年までの約1,400年間の資料を、次の項目別に、年月日順に収録した。

- 風 水 害 編
- 雪 害 編
- 干 ば つ 編
- 雷 電 編
- 地 震 編
- 資 料 編

2. 資料は、県立彦根測候所が創設された明治26年（1893）以降と、それ以前とに大別される。

(1) 明治26年以前の古書・古記録の採録は、主として「日本気象史料」「日本干魃・霖雨史料」「日本地震史料」から本県に関する記述のある部分を採ったものと、県下の各郡志から引用したものが多く、いずれもその出典を略記した。

(2) 明治26年以降の資料は、彦根地方气象台・県・警察の調査記録や、諸報告書および新聞等であるが、これらの出典は、特殊なものを除きその都度掲げることは省略した。

3. 月日は、明治5年に新暦が施行されるまでは太陰暦により、それに対応する太陽暦の月日を括弧内に付記した。

4. 古文書の資料の採録にあたっては、文体の平易化に努めた。

5. 同一現象について、幾とおりの資料のあるものは、その代表的なものを選んだ。

6. 干支（えと）

十干 きのえ 甲 きのと 乙 ひのえ 丙 ひのと 丁 つちのえ 戊 つちのと 己 かのえ 庚 かのと 辛 みずのえ 壬 みずのと 癸
 十二支 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

7. 十二支と時刻・方角

時	午 前						午 後					
	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
	真夜	夜	暁	明	朝	昼	真昼	昼	夕	暮	宵	夜
刻	九 ツ 半	八 ツ 半	七 ツ 半	六 ツ 半	五 ツ 半	四 ツ 半	九 ツ 半	八 ツ 半	七 ツ 半	六 ツ 半	五 ツ 半	四 ツ 半
	0 1	2 3	4 5	6 7	8 9	10 11	12 13	14 15	16 17	18 19	20 21	22 23
方角	北	北東 (艮)		東	南東 (巽)		南	南西 (坤)		西	北西 (乾)	

目次

写	真	
風	水	害
編	編 1
雪	害	編
編	編 109
干	ば	つ
編	編 130
雷	電	編
編	編 143
地	震	編
編	編 163
資	料	編
編	編 185

風 水 害 編

本県の風水害の概要

風水害には地形的要素が、大きな影響を及ぼすことが考えられるが、本県の地勢をみると、四方を山でめぐらした盆地の中央に湖があり、県境の山脈の標高は1000m～1300m位、湖水面の標高は85m余となっている。河川は、県境の山脈に源を發し、瀬田川を除いて、すべて琵琶湖に流入しており、流路延長が短かいため、大雨のときは水位が急上昇し、破堤や溢水が起こりやすい。また、河床が流域地帯より高くなっているところが多く（天井川）堤防が決壊すれば、大きな被害を生じるのである。琵琶湖は、これら河川の天然ダム役割りを果しているが、全県的に豪雨が起こったり、長雨が続くような場合は、湖水位の上昇により周辺に浸水地帯ができ、農作物を始め、諸産業に大きな被害を受けるのである。

さて、風水害の原因となった気象要素を調べると、台風によるものが最も多く、次いで前線・低気圧の順となり、死者と全壊家屋を伴うような大災害は、その殆んどが台風を原因としている。また月別の発生状況を見ると大半が6月から9月までの間に起こっており、6月・7月は主として梅雨前線、8月・9月は台風によるものである。このほか3月には融雪洪水による被害も発生している。

台風は、日本の南方海上に年に平均27個位発生しているが、このうち本県へ影響を及ぼすものとして、風速15m/s以上、雨量100mm以上のものをとると多い年で5個、少ない年で1個であり、また時期的には9月、特に9月15・16日頃が最も多く、次いで25・26日頃である。

台風の進路と暴風雨の様相をみると、3つの型に大別できる。

1. 北東進型

本県にとって最悪の型で、県の西側を通る場合と、東側を通る場合とに分類される。

- (1) 西方至近距離を北東に進む場合は、風台風で、大型台風の時は暴風となる。彦根で最大風速25m/s以上を観測した台風はすべてこの型であり、雨は一般に少なく、出水による被害は比較的少ない。

例) 昭和9年9月21日の室戸台風

 " 25年9月3日のジェーン台風

 " 36年9月16日の第二室戸台風

- (2) 東方至近距離を北東に進む場合は雨台風で、地形の影響により、特に鈴鹿・比良の山岳地帯に豪雨が降り、大きな水害が発生する。最大風速は今までの記録では21m/sである。

例) 昭和28年9月25日の13号台風

 " 34年9月26日の伊勢湾台風

 " 40年9月17日の6524号台風

2. 北上型

一般に雨台風で、接近の度合によっては風も強い。

例) 昭和37年8月26日の6214台風

3. 北西進型

盛夏期に多く、雨台風で大きな洪水被害がある。

例) 昭和24年7月29日のヘスター台風

また、前線・低気圧についてみると、梅雨末期から夏期にかけて、本県付近に前線があり、その線上を低気圧が東進する場合、または、低気圧が日本海を北東に進み、これに伴った寒冷前線が本県を通過する場合は、局地的な大雨を降らすことがあり、特に雷を伴う時、局地的豪雨が起り易く大災害を被ることがある。

例) 明治29年9月4日～12日の豪雨

昭和28年8月14日、15日の多羅尾地方の豪雨

古い時代についてみると、都が所在していたこともあって、近畿地方の風水害記録は多数あり、本県に影響を及ぼしたと推測できるものも数多くある。これらを別表のとおり年表として掲げ、年々襲いくる災害の繰り返しの一端をうかがうこととした。もちろん、これらのうち、明らかに本県に関する記述のあるものは、その内容を本編に集録している。

風 水 害 年 表

[明治25年(1892)まで]

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
欽明天皇 28 . 9	567. 10～11	近 畿 大洪水
推古天皇 9 . 5	601. 6～7	近 畿 大 雨
" 34 . 3～7	626. 4～8	近 畿 霖 雨
舒明天皇 10 . 7 . 19	638. 9 . 2	近 畿 大 雨
白 雉 3 . 4 . 20	652. 6 . 2	近 畿 大 雨
大 宝 元 . 8 . 14	701. 9 . 20	近 畿 大風雨
慶 雲 4 . 5 . 21	707. 6 . 25	畿 内 霖 雨
和 銅 2 . 5 . 20	709. 7 . 1	近畿・東海道 霖 雨
天 平 14 . 5 . 3	742. 6 . 9	近畿諸国 水 損
天平勝宝 6 . 8	754. 8～9	畿内並びに諸国 風 水
宝 亀 4 . 3 . 5	773. 4 . 1	近江・飛弾・出羽諸国 大 風
延 暦 15 . 8 . 6	796. 9 . 11	近畿諸国 霖雨、水損
" 18 . 4 . 9	799. 5 . 18	近畿諸国 水 損
" 23 . 8 . 10	804. 9 . 17	京都並びに近国 暴風雨
大 同 元 . 8 . 4	806. 9 . 19	近畿諸国 水 害
弘 仁 6 . 6 . 16	815. 7 . 25	近畿諸国 水 害
" 7 . 8 . 16	816. 9 . 11	京都並びに近国 大 風
嘉 祥 2 . 6 . 1	849. 6 . 24	畿 内 霖雨、飢饉
貞 観 2 . 9 . 14	860. 10 . 2	近畿諸国 大風雨、洪水
" 16 . 8 . 24	874. 10 . 8	近 畿 大風雨、洪水
仁 和 3 . 8 . 20	887. 9 . 12	京都・近江 大 風
延 喜 13 . 8 . 1	913. 9 . 3	近 江 大 風
" 18 . 8 . 16	918. 9 . 23	近 江 風雨、洪水

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
応和 2 . 8 . 30	962. 10 . 1	大和・近江 大風雨
安和 2 . 7 . 22	969. 9 . 6	近 江 大風雨
天元 3 . 7 . 9	980. 8 . 22	近 江 大暴風雨
永祚 元 8 . 13	989. 9 . 15	京都並びに近国 大風雨
長徳 2 閏7 . 21	996. 9 . 6	近 江 大 風
長元 元 . 9 . 2	1028. 9 . 22	近畿諸国 大風雨、洪水
長久 元 7 . 26	1040. 9 . 5	伊勢並びに近畿諸国 大風雨、洪水
延久 元 9 . 7	1069. 9 . 24	近畿並びに出雲 大風雨
寛治 6 . 8 . 3	1092. 9 . 7	伊勢並びに諸国 大風、洪水
永久 2 . 2 . 3	1114. 3 . 11	京都並びに近国 大風、洪水
" 5 . 9 . 1	1117. 9 . 28	近 江 大 風
元永 元 6	1118. 6 ~ 7	近 畿 霖雨、洪水
天治 2 . 9 . 12	1125. 10 . 11	諸 国 洪 水
長承 3 . 5 . 17	1134. 6 . 11	近畿諸国 霖雨、洪水
" 9 . 12	" 10 . 1	近 江 大 風
永治 元 8 . 20	1141. 9 . 21	近 江 大雨、洪水
安元 元 . 6 . 7	1175. 6 . 26	近 江 霖雨、洪水
建久 元 8 . 17	1190. 9 . 18	近 畿 大風雨
" 6 . 9 . 6	1195. 10 . 10	近 畿 大 風
建仁 元 8 . 11	1201. 9 . 9	近 畿 大風雨
元久 2 . 3	1205. 3 ~ 4	近 畿 大 風
承元 3 . 9 . 22	1209. 10 . 22	近 江 大 風
安貞 2 . 7 . 20	1228. 8 . 21	京都並びに近国 大風雨、洪水
寛喜 2 . 9 . 8	1230. 10 . 15	近畿・関東諸国 大風雨
正嘉 2 . 8 . 1	1258. 8 . 30	近畿・関東諸国 大風雨、洪水
文応 元 8 . 5	1260. 9 . 11	近畿・関東諸国 大風雨
弘長 3 . 8 . 14	1263. 9 . 17	近畿諸国並びに鎌倉 大 風
文永 3 . 8 . 18	1266. 9 . 18	近畿・西国諸国 大風雨
弘安 4 閏7 . 1	1281. 8 . 16	近畿・九州諸国 大風雨
永仁 3 . 7 ~ 9	1295. 8 ~ 11	近畿諸国 大風雨
乾元 元 7 . 8	1302. 8 . 2	近畿諸国 大風雨、洪水
正中 元 7 . 16	1324. 8 . 6	近 江 大風雨、洪水
正平 11 . 8 . 14	1356. 9 . 9	近畿・東海道諸国 大風雨
文中 2 . 9 . 2	1373. 9 . 18	近畿諸国 大風雨
応永 13 . 8 . 24	1406. 10 . 6	近 江 大風雨、洪水
" 26 . 7 ~ 9	1419. 7 ~ 10	近畿・関東・奥羽諸国 洪 水
" 34 . 9 . 3	1427. 9 . 23	近畿・関東・奥羽諸国 風雨、洪水
永享 9 . 6	1437. 7	京都並びに諸国 霖 雨

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
嘉 吉 3 . 9 . 4	1443. 9 . 27	近 畿 大風、洪水
文 安 3 . 夏	1446. 8	近 江 大 水
" 4 . 6 . 22	1447. 8 . 3	近 江 大 風
" 5 . 7 . 19	1448. 8 . 18	近畿諸国 霖雨、洪水
長 祿 元 8 . 21	1457. 9 . 9	近 江 大 風
寛 正 元 6 . 13	1460. 7 . 1	近畿諸国 大雨、洪水
" 8 . 29	" 9 . 14	近畿諸国 大風雨、洪水
文 明 7 . 5 . 27	1475. 6 . 30	近畿諸国 大雨、洪水
" 8 . 6	" 9 . 6	近畿諸国 大風雨
" 14閏7 . 19	1482. 9 . 2	近畿諸国 大風雨
" 18 . 8 . 4	1486. 9 . 1	近畿・東海道諸国 大風雨
長 享 元 3 . 5	1487. 3 . 29	近畿諸国 霖雨、大水
明 応 元 5 . 29	1492. 6 . 23	近畿・東海道諸国 大雨、洪水
" 4 . 8 . 27	1495. 9 . 15	山城・近江諸国 洪 水
" 5 . 8 . 17	1496. 9 . 23	近畿・東海道諸国 大風雨、洪水
" 7 . 7 . 14	1498. 8 . 1	京都・近江 大風雨、洪水
" 9 . 9 . 2	1500. 9 . 25	近畿諸国 大 風
文 龜 2 . 8 . 29	1502. 9 . 30	近畿諸国 風雨、洪水
永 正 7 . 5	1510. 6 ~ 7	近畿諸国 霖雨、洪水
" 8 : 8 . 19	1511. 9 . 11	九州・近畿・奥羽 大風雨
天 文 8閏6	1539. 6 ~ 7	近畿諸国 洪 水
" 8 . 17	" 9 . 29	近畿・関東諸国 大洪水
" 9 . 4 . 9	1540. 5 . 15	近畿諸国 洪 水
" 8 . 11	" 9 . 11	近畿・関東・中部・奥羽諸国 大風雨
" 10 . 8 . 10	1541. 8 . 31	近畿・東海道・奥羽諸国 大風雨、洪水
" 13 . 7 . 9	1544. 7 . 28	近畿・東海道諸国 大風雨、洪水
" 19 . 8 . 2	1550. 9 . 12	近畿・奥羽諸国 洪 水
弘 治 元 9 . 19	1555. 10 . 4	近 江 大 風
" 3 . 8 . 26	1557. 9 . 18	近畿諸国 大風雨
元 龜 2 . 6 . 13	1571 7 . 5	江北地方 大雨、洪水
" 8 . 20	" 9 . 9	近畿・東海道諸国 大 風
" 3 . 7 . 28	1572. 9 . 5	近 江 大 風
天 正 元 8 . 29	1573. 9 . 25	京 都 大 風
" 6 . 5 . 12	1578. 6 . 17	京都・近江 大雨水
文 祿 3 . 7 . 23	1594. 9 . 7	近畿諸国 大 風
慶 長 元 8 . 5	1596. 9 . 26	近畿・東海道諸国 大 風
" 3 . 7 . 28	1598. 8 . 29	近 江 大風、洪水
" 9 . 8 . 4	1604. 8 . 28	近江・伊勢・美濃・尾張 大 風

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
慶 長 9 . 8 . 14	1604. 9 . 7	近畿・東海道諸国 大 風
" 10 . 7 . 20	1605. 9 . 3	近畿以東 大風、雨水
" 11 . 5 . 25	1606. 6 . 30	近畿・東海道・関東諸国 風雨、洪水
" 8 . 30	" 10 . 1	四国・中国・近畿・東海道諸国 大風雨
" 13 . 4 . 21	1608. 6 . 3	近畿・東海道諸国 風雨、洪水
" 6 . 3	" 7 . 14	近畿諸国 大雨、洪水
" 6 . 24	" 8 . 4	近畿諸国 大風雨
" 8 . 1	" 9 . 9	近畿諸国 大雨、洪水
" 14 . 8 . 9	1609. 9 . 7	近畿・東海道諸国 大風雨
" 8 . 16	" 9 . 14	諸 国 大雨、洪水
" 15 . 7 . 21	1610. 9 . 8	近畿諸国 大風雨
" 17 . 6 . 22	1612. 7 . 20	近畿・東海道・奥羽諸国 大風雨
" 7 . 5	" 8 . 1	西 国 大 風
" 9 . 2	" 9 . 26	近畿・東海道諸国 大風雨
" 18 . 8 . 9	1613. 9 . 23	近 江 大 風
" 19 . 4 . 27	1614. 6 . 4	近畿・東海道諸国 大雨、洪水
" 5 . 12	" 6 . 19	近畿・東海道諸国 大雨、洪水
" 6 . 4	" 7 . 10	近畿・東海道諸国 霖雨、洪水
" 8 . 28	" 10 . 1	近畿・東海道・関東諸国 大風雨、洪水
元 和 5 . 8 . 10	1619. 9 . 17	近畿並びに諸国 大風雨、洪水
寛 永 8 . 9 . 18	1631. 10 . 13	近畿・関東・奥羽諸国 大風、洪水
" 10 . 5 . 28	1633. 7 . 4	近畿諸国 連雨、洪水
" 7 . 4	" 8 . 8	近江・摂津諸国 水 害
" 8 . 10	" 9 . 13	近畿諸国 大風雨、洪水
" 13 . 8 . 13	1636. 9 . 12	京都並びに近江・尾張諸国 大風雨、洪水
慶 安 3 . 7 . 27	1650. 8 . 24	近畿諸国 風雨、洪水
" 9 . 1	" 9 . 26	九州・近畿・東海道諸国 大雨、洪水
承 応 2 . 6	1653. 6 ~ 7	近 江 暴風雨
明 暦 元 8 . 10	1655. 9 . 9	近 江 大 水
万 治 元 8 . 3	1658. 8 . 31	近畿諸国 大風雨、洪水
" 3 . 7 . 29	1660. 9 . 3	近畿・関東諸国 大風雨、洪水
" 8 . 20	" 9 . 24	近畿・東海道・関東諸国 大風雨、洪水
" 9 . 20	" 10 . 24	四国・近畿・東海道・関東諸国 大風雨
寛 文 9 . 6 . 16	1669. 7 . 13	北陸並びに近江・出雲諸国 大雨、洪水
延 宝 2 . 4 . 10	1674. 5 . 15	近畿諸国 大雨、洪水
" 6 . 13	" 7 . 16	中国・近畿諸国 大雨、洪水
" 4 . 5 . 6	1676. 6 . 17	近畿諸国 霖雨、洪水
" 7 . 4	" 8 . 13	近畿・東海道・関東諸国 大風雨、洪水

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
天和元 7 . 10	1681. 8 . 23	近畿諸国 大 風
" 7 . 20	" 9 . 2	近畿・中部 大風、雨水
" 3 . 1 . 1	1683. 1 . 28	江戸並びに諸国 大雨、洪水
貞享元 3 . 22	1684. 5 . 6	近 江 大雨水
" 4 . 14	" 5 . 28	近 江 大雨水
" 6 . 15	" 7 . 27	近 江 風 水
" 3 . 5 . 15	1686. 7 . 5	近 江 大 水
" 7 . 25	" 9 . 12	四国・中国・近畿 大風雨
" 4 . 9 . 9	1687. 10 . 14	四国・近畿・北陸・関東諸国 風雨、洪水
元禄 6 . 1 . 27	1693. 3 . 3	京都・近国 大 風
" 7 . 3	" 8 . 4	近畿・東海道 大風、洪水
" 9 . 9 . 29	1696. 10 . 23	近 江 大 水
" 14 . 8 . 17	1701. 9 . 19	四国・近畿・東海道・関東・奥羽 大風雨
宝永 5 . 6	1708. 7 ~ 8	近 江 大雨、洪水
" 7 . 2	" 8 . 17	京都並びに近江・伊勢諸国 大 風
" 7 . 19	" 9 . 3	近 江 洪 水
" 6 . 7 . 4	1709. 8 . 9	近畿諸国 大 風
" 9	" 10 ~ 11	近 江 大洪水
正徳 2 . 7 . 2	1712. 8 . 3	中国・近畿 大風雨、洪水
" 3 . 8	1713. 9 ~ 10	近 江 暴風雨
" 4 . 7 . 8	1714. 8 . 17	近 江 大風雨、洪水
" 8 . 8	" 9 . 16	近畿・東海道・奥羽諸国 大風雨
享保元 6 . 18	1716. 8 . 5	近畿諸国 大雨、洪水
" 6 閏 7 . 10	1721. 9 . 1	中国・近畿 大風雨、洪水
" 閏 7 . 15	" 9 . 6	四国・中国・近畿・中部・関東 大風雨、洪水
" 7 . 8 . 14	1722. 9 . 24	近畿・東海道諸国 大風雨
" 10 . 4	1725. 5 ~ 6	近畿諸国 霖雨、大水
" 13 . 7 . 8	1728. 8 . 13	近畿・東海道諸国 大風雨、洪水
" 8 . 4	" 9 . 7	関西諸国 大風雨、洪水
" 19 . 6 . 6	1734. 7 . 6	京都・近江 暴 風
" 20 . 6 . 21	1735. 8 . 9	近畿諸国 大風雨、洪水
元文元 8 . 17	1736. 9 . 21	近畿・関東諸国 大風雨、洪水
" 3 . 6 . 1	1738. 7 . 17	近 江 大洪水
" 5 . 6 . 9	1740. 7 . 2	近畿諸国 大雨、洪水
" 閏 7 . 16	" 9 . 6	京都・近国 大風雨、洪水
寛保元 7 . 21	1741. 8 . 31	四国・近畿諸国 大風雨、洪水
" 2 . 7 . 11	1742. 8 . 11	近畿諸国 大風雨
" 7 . 28	" 8 . 28	近畿・関東・北陸諸国 大風雨、洪水

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
寛 延 2 . 7 . 2	1749. 8 . 14	山陰・近畿諸国 大風雨、洪水
宝 曆 5 . 8 . 24	1755. 9 . 29	近 江 大風雨
" 6 . 9 . 16	1756. 10 . 10	近畿・東海道諸国 大風雨、洪水
" 9 . 25	" 10 . 18	加賀・近江諸国 洪 水
" 13 . 9 . 3	1763. 10 . 9	近畿・北陸・関東諸国 大風雨
明 和 2 . 7 . 5	1765. 8 . 21	近畿諸国 大風雨
" 7 . 6	" 8 . 22	近 畿 大 風
" 8 . 2	" 9 . 16	四国・近畿・関東 大風雨、洪水
" 5 . 7 . 21	1768. 9 . 1	四国・近畿・山陰諸国 大風雨、洪水
" 8 . 7 . 22	1771. 9 . 1	近畿諸国 大風雨、洪水
安 永 元 8 . 20	1772. 9 . 17	四国・近畿・東海道諸国 大風雨、洪水
" 3 . 6 . 23	1774. 7 . 31	近畿・佐渡・江戸 大風雨、洪水
" 5 . 8 . 7	1776. 9 . 19	江 北 大雨、洪水
" 7 . 7	1778. 8 ~ 9	江 州 大雨、洪水
" 8 . 7 . 1	1779. 8 . 12	近畿諸国 大風雨
" 7 . 12	" 8 . 23	近畿諸国 大風雨
" 7 . 23	" 9 . 3	近畿諸国並びに江戸 大風雨、洪水
天 明 元 7 . 21	1781. 9 . 9	近 畿 大風雨
" 7 . 27	" 9 . 15	四国・近畿 大風雨、洪水
" 2 . 2 . 2	1782. 3 . 15	近畿・加賀諸国並びに江戸 大風雨
" 3 . 6 . 17	1783. 7 . 16	近 畿 大雨、洪水
" 5 . 8 . 12	1785. 9 . 15	近畿・東海道諸国 大雨、洪水
" 6 . 8 . 29	1786. 9 . 22	山陰・近畿・北陸諸国 大風雨、洪水
" 9 . 6	" 9 . 27	近 畿 大風雨、洪水
" 6 ~ 7	1786. ~ 87.	諸 国 飢饉、洪水、大風
寛 政 元閏 6 . 6	1789. 7 . 28	近江・北陸 大洪水
" 3 . 8 . 20	1791. 9 . 17	四国・近畿・北陸・関東諸国 大風雨
" 4 . 7 . 26	1792. 9 . 12	四国・中国・近畿 大風雨、洪水
享 和 2 . 6 . 27	1802. 7 . 26	近畿・東海道・関東諸国 風雨、洪水
" 8 . 6	" 9 . 2	四国・中国・近畿 大風雨、洪水
文 化 4 . 5 ~ 6	1807. 6 ~ 8	京都・近国 大雨、洪水
" 9 . 17	" 10 . 18	尾張・若狭・丹波・近畿 大風雨、洪水
" 12 . 6	1815. 7 ~ 8	近 江 大雨、洪水
" 6 . 27	" 8 . 2	近畿・東海道 大雨、洪水
" 13閏 8 . 3	1816. 9 . 24	四国・中国・近畿・中部・関東 大風雨、洪水
文 政 3 . 5	1820. 6 ~ 7	近 江 大 水
" 4 . 8 . 4	1821. 8 . 31	近畿諸国 大風雨、洪水
" 9 . 5 . 21	1826. 6 . 26	四国・中国・近畿 大風雨、洪水

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
天 保 6 閏 7 . 6	1835. 8 . 29	近 江 大風雨、洪水
" 7 . 8 . 13	1836. 9 . 23	近畿・中部・江戸 大風雨、洪水
" 8 . 8 . 5	1837. 9 . 4	近江・若狭・江戸 風雨、洪水
" 8 . 14	" 9 . 13	近 江 大風雨
" 13 . 5 . 17	1842. 6 . 25	近畿諸国 大雨、洪水
" 5 . 29	" 7 . 7	近畿諸国 大雨、洪水
弘 化 3 . 7 . 7	1846. 8 . 28	近畿・東海道・関東諸国 大風雨、洪水
" 4 . 4 . 10	1847. 5 . 24	近畿・中部 大風雨
嘉 永 元 6 . 6	1848. 7 . 6	京都並びに近国 大雨、洪水
" 8 . $\frac{11}{12}$	" 9 . $\frac{8}{9}$	近畿諸国 大風雨、洪水
" 3 . 7 . 21	1850. 8 . 28	近畿・中部 大風雨、洪水
" 8 . 7	" 9 . 12	九州・中国・近畿中部 大風雨
" 9 . $\frac{2}{3}$	" 10 . $\frac{7}{8}$	四国・中国・近畿中部・奥羽 大風雨、洪水
" 5 . 7 . 21	1852. 9 . 4	近畿・関東諸国 大風雨、洪水
" 8 . $\frac{22}{23}$	" 10 . $\frac{5}{6}$	中国・近畿・江戸 風雨、洪水
" 11 . 12	" 12 . 23	近 江 風水害
安 政 2 . 8 . 20	1855. 9 . 30	四国・近畿・東海道 大風雨、洪水
" 4 . 7 . 1	1857. 8 . 20	四国・近畿諸国 大風雨、洪水
" 7 . 29	" 9 . 17	四国・近畿 大風雨、洪水
" 5 . 6 . 27	1858. 8 . 6	近 江 北風、大波
" 7 . 13	" 8 . 21	近 江 大 風
" 7 . 27	" 9 . 4	近江・若狭 大風雨、洪水
万 延 元 3 ~ 5	1860. 3 ~ 6	近 江 長 雨
" 7 . 11	" 8 . 27	四国・近畿 大 風
" 7 . 17	" 9 . 2	紀伊・近江 大風雨、洪水
" 2 . 5 . $\frac{5}{6}$	1861. 6 . $\frac{12}{13}$	近 江 洪 水
文 久 2 . 5 . 2	1862. 5 . 30	近 江 大 風
慶 応 元 閏 5	1865. 6 ~ 7	近 江 大雨、洪水
" 2 . 5 . 15	1866. 6 . 27	近 江 洪 水
" 8 . $\frac{6}{7}$	" 9 . $\frac{14}{15}$	近畿・中部・関東・奥羽諸国 大風雨
明 治 元 閏 4 ~ 5	1868. 5 ~ 7	近畿・中部・関東・奥羽 霖雨、洪水
" 7	" 8 ~ 9	近 江 風雨、洪水
" 2 . 7 . 12	1869. 8 . 19	近畿・東海道・関東・奥羽 暴風雨
" 3 . 7 . 19	1870. 8 . 15	近畿・中部・関東 大風雨
" 9 . 7	" 10 . 1	四国・近畿・東海道・関東 大風雨
" 9 . 18	" 10 . 12	四国・近畿・中部・関東・奥羽 大風雨
" 4 . 5 . 17	1871. 7 . 4	四国・中国・近畿 大風雨
" 10 . 10 . 11	1877. 7 . 4	近 江 暴風雨、洪水

邦 曆 年 月 日	西 曆 年 月 日	事 項
明 治 13 . 7 . 1	1880.	中国・近畿・中部 豪雨、洪水
" 8 . 25	"	四国・近畿・関東 大風雨
" 10 . 3	"	近畿・東海道・関東 大風雨
" 14 . 9 . 13	1881.	近畿・中部 暴風、洪水
" 15 . 8 . 5	1882.	近畿・東海道 暴風雨、洪水
" 16 . 2 . 21	1883.	滋 賀 颯 風
" 9 . 12 13	"	九州・四国・近畿 大風雨
" 10 . 7	"	近畿・北陸・奥羽 暴風雨
" 10 . 12	"	九州・四国・近畿・中部 大風雨
" 17 . 5 ~ 7	1884.	滋 賀 洪 水
" 8 . 10	"	九州・四国・近畿・奥羽 暴風雨
" 8 . 25	"	九州・四国・中国・近畿・北陸 暴風雨
" 9	"	滋 賀 洪 水
" 18 . 7 . 1	1885.	近畿・中部・関東 大風雨、洪水
" 19 . 9 . 16	1886.	滋 賀 暴風雨、洪水
" 9 . 24	"	滋 賀 暴風雨、洪水
" 20 . 10 . 7	1887.	四国・近畿・東海道 暴風雨、洪水
" 22 . 9 . 11	1889.	滋 賀 暴風雨
" 24 . 10 . 20	1891.	滋 賀 洪 水
" 25 . 5 ~ 8	1892.	滋 賀 暴風雨
" 9	"	滋 賀 洪 水

応 和 2 年 (9 6 2)

8月30日 (10.1)

大風雨。大和、近江の神社・佛寺、多く破壊す。〔東浅井郡志 (日本紀略)〕

天 治 2 年 (1 1 2 5)

9月12日 (10.11)

近江町打出浜、大水。〔中右紀目録〕

承 元 3 年 (1 2 0 9)

9月22日 (10.22)

近江大雨。〔天台座主紀〕

元 享 4 年 (1 3 2 4)
正 中 元 年

7月16日 (8.6)

建保以来の洪水。民家多く流失し、人馬死する者、数を知らず。叡山の諸堂、多く顛倒したといふ。〔東浅井郡志 (花園院宸記)〕

正 平 11 年 (1 3 5 6)

8月14日 (9.9)

大風雨。石山寺山崩れ、水湧き、門流る。〔東浅井郡志(園大暦)〕

大 安 3 年 (1446)

夏 (8)

江州大水。瀬田橋落つ。〔立川寺年代記〕

文 安 5 年 (1448)

5月・9月

大雨長降り。天下大水損すこぶる多し。この年又瀬田橋落つ。〔立川寺年代記〕

長 禄 4 年 (1460)

寛 正 元 年

6月13日(7.1)

湖水満ち溢れて田圃に浸潤し、あえて種子を下す者なし。人びとは他国へ移転したという。

〔東浅井郡志(碧山目録)〕

文 明 7 年 (1475)

5月27日(6.30)

大雨洪水。近江の国、山の崩るる所多し。〔東浅井郡志(長興宿禰記ほか)〕

明 応 7 年 (1498)

7月14日(8.1)

近江、大風洪水。〔気象史料総覧〕

天 文 13 年 (1544)

7月9日(7.28)

大洪水。日吉の大橋・延暦寺の僧坊数棟、その外民家・人馬等流失。〔東浅井郡志(皇年代私記ほか)〕

元 龜 2 年 (1571)

6月12~13日(7.5~6)

江北地方、大雨洪水。〔東浅井郡志(言繼卿記)〕

元 龜 3 年 (1572)

7月28日(9.5)

近江の国大風。この日大風吹き出して、大木を吹き折り、民家を吹き破る。〔北陸七国志〕

天 正 6 年 (1578)

5月12日(6.17)

大雨洪水。野洲川堤防決壊。辻・出庭・中・小坂等の諸村に濁水溢れ、溺死の人数を知らず。

〔栗太郡志(六地藏福正寺記録)〕

慶 長 9 年 (1604)

8月4日(8.28)

酉の刻より大風。近江・伊勢・美濃・尾張など最も甚だしく、損害は計り知れず。〔東浅井郡志(当代記)〕

慶 長 10 年 (1605)

7月20日(9.3)

近江・美濃・伊勢・尾張・三河の五国、大水。ところどころ堤防切れる。〔東浅井郡志(当代記)〕

慶長 11 年 (1606)

8月30日 (10.1)

8月29日、夜より翌日巳の刻に至るまで、近江・美濃・伊勢三国大風吹く。ために秋不作。
〔東浅井郡志(当代記)〕

慶長 14 年 (1609)

8月9日 (9.7)

亥の刻より、翌日亥の刻まで大風。江州の農作物の被害甚だし。〔東浅井郡志(当代記)〕

8月16日 (9.14)

諸国大雨洪水。近江では去年の水より3尺程低かったという。〔東浅井郡志(当代記)〕

慶長 17 年 (1612)

7月5日 (8.1)

近江国以西大風。〔日本災異志〕

9月2日 (9.26)

去月より長雨あり、今に至るも止まず。前夜丑の刻より大風。今日未の刻に至り、西に返り殊に強し。但し、水は出ず。近江・伊勢・美濃・尾張でこの風強く吹く。都合5,000人程死すという。〔当代記〕

慶長 18 年 (1613)

8月9日 (9.23)

近江の国北風吹く。湖岸は波が烈しくて、商人舟10隻余破船。この風他の国には吹かず。〔当代記〕

慶長 19 年 (1614)

8月28日 (10.1)

諸国大風雨、洪水。江州も風強く、大木吹き折れ、根から倒れるものもあり。朝妻・前原では舟付の家とも、水に浸って5丁余退き、山際に居住したという。〔東浅井郡志(当代記)〕

寛永 10 年 (1633)

5月28日 (7.4)

雨水、江湖水増す。1丈2尺余。〔氣象史料(続史愚抄)〕

4～6月大洪水。江州水溢れること1丈2尺余り。〔享祿以来年代記〕

7月4日 (8.8)

江州、膳所の所領水害を被る。よって銀300貫目恩賜あり。〔徳川実記〕

8月10日 (9.13)

暴風雨で出水甚だしく、江州水溢ること、1丈2尺余、民家多く流失したという。〔東浅井郡志(享祿以来年代記)〕

慶安 3 年 (1650)

9月1日 (9.26)

8月29日より、9月2日まで長雨。江州も田畑多く損じ、三重・鈴鹿・川林の堤崩れ、家屋・人畜の損害は少なくなかった。駅々の橋梁を押し流し、3日より旅人往来できず。〔徳川実記〕

承 応 2 年 (1653)

6月(6~7)

暴風雨あり、野洲川^{はんらん}氾濫し、伊勢落所屬の堤防決壊。伊勢落と野洲郡南桜と甲賀郡岩根とにまたがる50町歩の田畑荒れはてて、3村の境界不明となる。〔栗太郡志〕

寛 文 9 年 (1669)

6月16日(7.13)

大風雨数日にわたり、水溢れ、堤を破り、田を損し、家倒れ、人多く死す。〔東浅井郡志(殿中日記)〕

分部隼人正の居所、江州大溝領地20,000石のうち12,000石水損の由。〔玉露叢〕

延 宝 4 年 (1676)

7月4日(8.13)

洪水。彦根城下の西ヶ原あたりでは船で往来する。〔彦根市史稿〕

延 宝 9 年 (1681)
天 和 元 年

7月20日(9.2)

4日・6日・9日大水。20日大風大水、30年来の大水。〔愛知郡志(森野繁次郎氏記録、以下森野記録と略記)〕

天 和 3 年 (1683)

1月1日(1.28)

大洪水あり、東草野村大字上板並の宮谷崩壊す。〔東浅井郡志(春日神社調書)〕

貞 享 元 年 (1684)

3月22日(5.6)

大雨洪水。鏡山^{くず}崩る。〔愛知郡志(森野記録)〕

4月14日(5.28)

大雨。清水鼻村で4軒埋まり、死者2名、負傷者2名。〔愛知郡志(森野記録)〕

6月15日(7.27)

風、大水。〔愛知郡志(森野記録)〕

貞 享 3 年 (1686)

5月15日(7.5)

近江大水。〔氣象史料総覧〕

7月25日(9.12)

大風。農作物ことごとく不作。〔愛知郡志(森野記録)〕

貞 享 4 年 (1687)

9月9日(10.14)

大風大水。50年以来の大風。水も38年以来の大水。〔愛知郡志(森野記録)〕

元 禄 9 年 (1696)

9月29日(10.23)

大水、47年前の大水と同様。〔愛知郡志(森野記録)〕

元 禄 14 年 (1701)

8月17日 (9.19)

11日より雨降り、17日・18日両日に至って甚だしく出水し、東草野・西草野共に川橋にことごとく砂流る。曾根村の堤防2箇所決壊。〔東浅井郡志(小堀日記ほか)〕

宝 永 5 年 (1708)

6月 (7~8)

大雨洪水。安曇川^{なまずお}尾堤106間・大堤127間決壊す。湖水定水より6尺ばかり増す。大溝地方で壊家130軒。〔高島郡誌〕

7月19日 (9.5)

大戸川洪水。各所で堤防を破壊して、濁流は稻田を海にし、中野・芝原両村は、その激流のため神社・寺院を始め家屋を流失し、人畜の死傷多く、ほとんど全滅の惨害を被った。〔栗太郡志〕

宝 永 6 年 (1709)

9月 (10~11)

大洪水。芝原所属の堤防249間決壊して大災害を被る。〔栗太郡志〕

正 徳 3 年 (1713)

8月 (9~10)

暴風雨あり、伊香郡高月川・黒田川の被害甚だし。〔彦根市史稿〕

正 徳 4 年 (1714)

7月8日 (8.17)

大風雨、洪水所々、前代未聞。〔愛知郡志(森野記録)〕

享 保 6 年 (1721)

閏7月15日 (9.6)

大雨、洪水。湖水1昼夜に3尺余り満つ。前代未聞のことなり。〔蒲生郡志(八幡町年寄記録)〕

享 保 19 年 (1734)

6月6日 (7.6)

近江暴風。〔気象史料総覧〕

元 文 元 年 (1736)

8月17日 (9.21)

洪水。彦根城下、浸水5尺8寸、四十九町まで船にて往来す。北野寺前まで水1丈余。〔彦根市史稿〕

元 文 3 年 (1738)

6月1日 (7.17)

5月7日より6月3日まで降雨つづき、彦根大水、定水より5尺2寸高く、四十九町も船で往来し、尾末町・京町で7寸浸水。〔彦根市史稿〕

大洪水。山崩れあり、熊野山、土砂流出し、両古賀村40軒つぶれ、死傷あり。後に「^{いま}午年の荒」と称す。〔高島郡誌〕

寛 保 2 年 (1742)

7月11日(8.11)

大洪水にて近江国180,000石皆無となる。〔愛知郡志(平松山田平松之丞氏記録、以下平松山田記録と略記)〕

宝 曆 6 年 (1756)

9月16~17日(10.9~10)

16日暴風雨あり、南近江災害最も甚だし。膳所藩が幕府への報告によれば、近江国内で53,600余石の内40,488石余の田畑は水損を被り、河川堤防の破壊、山岳の崩壊により流失倒壊家屋200余戸、浸水戸数3,180余戸に達した旨記されている。金勝の東坂村で19人の流死者をみた。〔栗太郡志〕

芹川堤防2箇所決壊し、新町あたり水2階に至る。彦根領内で49,000石の損失、農民に3ヵ年間半納を許す。〔彦根市史稿〕

明 和 2 年 (1765)

7月5日(8.21)

大風雨。大津の辺、山崩れ人馬死す。〔東浅井郡志(続史愚抄)〕

8月2日(9.16)

大風雨。彦根城内の損耗50,000石に及ぶ。〔彦根市史稿〕

明 和 5 年 (1768)

7月21日(9.1)

大風雨。彦根の浸水4尺8寸。領内にて64,000石損耗をみる。〔彦根市史稿〕

明 和 8 年 (1771)

7月22日(9.1)

夜大風雨、芹川5合余水増す。〔彦根市史稿〕

明 和 9 年 (1772)
安 永 元 年

8月20日(9.17)

21日、東は美濃・近江、西は備前讃岐等大風雨。民家を倒し、樹木折れ、人多く死す。〔続日本王代一覽〕

安 永 3 年 (1774)

6月23日(7.31)

大風。岩劔宮鳥居・毘沙門堂倒る。〔高島郡誌〕

安 永 5 年 (1776)

8月7日(9.19)

江北大雨、洪水。塩津集福寺の山崩れ。宮前寺破壊。〔東浅井郡志(熊谷家年代記)〕

安 永 7 年 (1778)

7月(8~9)

2日・10日・12日・閏7月25日・26日江州領分大雨洪水につき損毛、田畑に水や土砂が流入し、その被害79,166石余なりと。〔彦根市史稿〕

天 明 3 年 (1783)

6月17日(7.16)

暴風雨大波。船舶の破船したもの多し。〔高島郡誌〕

天明 6～7 年 (1786～87)

3～8月(3～9)

3・4月より6月まで雨風多く、春作不作。盆前より降りつづき、8月20日に大風、9月30日に雪降り、冷氣加わる。〔蒲生郡誌(杉森共有記録)〕

天明7年末半年間は雨つづき、米穀高値となる。〔蒲生郡誌(杉森共有記録)〕

天明7年国々飢饉。江戸救米、3月より九月まで彦根明性寺・養春院2箇所、長浜浄国寺にて大釜を設け、粥入り合って日々施しを行なう。粥米凡そ80石余、郷中は正米20,000石余賜わる。

〔彦根市史稿〕

8月・9月(9～10)

8月30日大風。朝四ツ時より八ツ時にわたる。大木折る。〔高島郡誌〕

8月・9月洪水。若藤様日記留帳に、善利川8合の出水。高宮川出水し、通行これ無しと。

〔彦根市史稿〕

寛政元年(1789)

閏6月6日(7.28)

6日夕大洪水、湖上満水なり。〔高島郡誌〕

寛政3年(1791)

8月20日(9.17)

暮六ツ時より九ツまで大風雨、被害甚だし。天守いたみ、櫓高塀、城山の木8分ばかり倒れ、侍屋敷の大破損51軒、足軽町扶持人壊家大破278軒、堂宮拝殿並びに寺の壊れ69箇所、寺の破損5箇所、町家の壊れ25軒、百姓壊家2,876軒、百姓即死人9人、負傷6人、倒木無数。〔彦根市史稿〕

寛政4年(1792)

7月26日(9.12)

大風、朝六ツ時より夜八ツ時に至る。〔高島郡誌〕

享和2年(1802)

6月29日(7.28)

卯の刻より大風雨、所々洪水。善利川(芹川)堤防切れ、亥の刻大石橋崩れ落つ。溺死人多く、切通し番所流れ、新町辺所々壊家有り。〔彦根市史稿〕

28日豪雨あり。其の夜より29日にわたり北東の風強く大雨。諸川水溢れて堤防決壊す。田上の堂村は大戸川の決壊により、ほとんど流失す。草津川上流部田村・岡本村方面で堤防決壊、草津町浸水数尺に達し、住家倒れ、老幼溺死、壊家287軒、溺死42人、負傷者22人。〔栗太郡志(草津町深尾又五郎記録)〕

安曇川堤防決壊、大田民家流失10戸、死者7人。〔高島郡誌〕

8月6日(9.2)

二百十日、昼すぎより風起こり、夜中大風、西浜村全壊4,5軒、半壊14,15軒、今津方面は

被害多し。安曇川筋堤防決壊 150 間、流失家屋 3 戸、親子 3 人死す。〔高島郡誌〕

文化 4 年 (1807)

5 月～6 月 (6～8)

5 月 21 日より大雨、同 23 日の夜より 24 日朝にかけて諸国洪水。この時清水ヶ鼻の山崩れで家 1 軒壊れ、1 人死す。同 6 月 26 日まで雨降らぬ日なし。湖水常水より高きこと 7 尺余。大津石場街道 2 尺 5 寸ばかり水あり。〔愛知郡志 (徒々年代記)〕

5 月 23 日、江北大水出で、姉川決壊す。〔東浅井郡志 (曾根天神社調書ほか)〕

5 月 23 日、夜半、大溝町山王谷、愛宕山山崩れあり。翌日安曇川筋堤防決壊 200 間ばかり、太田村流失家屋 4 戸・死人 4, 5 人あり。鴨川筋一部決壊、同村浸水。下小川村堤防決壊、出鴨村民 1 人死す。26 日より又降雨あり、6 月 9 日まで続く。大溝町浸水す。15 日湖水増水 5 尺 7, 8 寸という。〔高島郡誌〕

9 月 17 日 (10.18)

大風・大水にて稽古館休講。〔彦根市史稿〕

文化 12 年 (1815)

6 月 (7～8)

4 日～6 日昼夜雨、6 日は殊に大雨車軸を流し、水溢る。桜川の今年の洪水は去る^{いひ}戊年の洪水に勝るといふ。水口大光寺壊れ、圧死 2 人。その外横関・安養寺・高木など所々の水損その数を知らず。高木の水損 1,000 石余という。川合玉尾山崩れ 200 間ばかり。中之郷・奥師 5 軒流る。〔蒲生郡誌 (村角日記)〕

6 月洪水。百瀬川堤防 1 箇所、大川筋 6 箇所決壊す。〔高島郡誌〕

文政 3 年 (1820)

5 月 (6～7)

雨甚だしく、湖水大いに溢る。〔東浅井郡志 (翠巖遺稿)〕

文政 9 年 (1826)

5 月 21 日 (6.26)

大風。油木・桐木多く倒る。但し民家被害なし。〔高島郡誌〕

天保 6 年 (1835)

閏 7 月 6 日 (8.29)

夜、大風吹く。〔愛知郡志 (平松山田記録)〕

天保 7 年 (1836)

8 月 13 日 (9.23)

7 月 7 日、8 日大雨。それより降続き、8 月 13 日暴風雨あり、水田の被害多く、彦根にては四十九町・内船町・石ヶ崎町・中菽等浸水し、弘道館勝手口の柵門通 30 日ばかり浸水す。

其の後米価暴騰、死屍道に満つる、有名な天保 7 年の大飢饉となれり。11 月、坂田・浅井・伊香の 3 郡には徒党と称し、農民一揆を見たり。〔彦根市史稿〕

8 月 13 日夜、けしからぬ大風雨致し、一夜の間に大難出来、これにより諸作とも不作致し、1 反に付き 3 俵又は 2, 3 斗までの取込に候。これより穀、だんだん高値に相なり、冬相場 1 俵に

つき80匁致し、御年貢等も出来難く候に付き、御上様より御金拝借致し、御上納皆済仕り候。

一中略一 翌年3月27日、此の時相場米1俵に付100匁、大麦1俵に付64匁致し、買求むる手だてもなく、飢えにも及ぶべしと、人々山林へ行き、榎の実を拾い、松の木の皮を取ってほうらいにて煎り、石臼にてすり、団子にす。又葛根を数多引きおこし、薄くわん切りにして、3日ばかりも水につけ置き、あくをきり、よくかわかしてはたき、団子に致す。又、びょうぶ・藤・桜・つつじ・いも木・其の外いろいろと木の芽を塩あえにして食ひ、又は野に出て、田にし・溝貝を拾ひ、或は芹・三つ葉・よめ菜・蓴・おぼこ・其の外いろいろと青葉を取り、これも塩あえにして食ひ、ようようと露命をつなぎかねたるばかりなり。誠にもって恐ろしき飢饉なり。

〔彦根市史稿・愛知郡志（平尾共有記録）〕

天明より約50年にして天保の大凶あり。酉年の飢饉と称す。天保7年は正月より天候常ならず。2月より雨降りつづき、6月土用も甚だ冷氣にて、田畑の作物は稔らず。7月になりて暑き日2日ばかりありしも、7・8両日大雨となり、湖水増水し、沿湖各村水込み、8日安曇川・新米川の堤一部決壊す。其の後もなお雨止まず。

7月26日大風、8月13日夜に入りて又大暴風雨となり、各村の大木を打ち折り、或は根こぎにし、山村にても大木山木の折れ倒れたるもの数知らず。又堤防の決壊多く、前代未聞の大風と称す。6月より8月下旬までは水引かず、隣家の往来も船通行なり。9月13日より高山に雪降り、其の後消えず。村里にも時々降雪を見、下旬には四方の山々真白となり、収穫の遅れたるは雪の中となれり。早稲は5分作、中稲は3分7厘作、晩稲はおしなべて1分8厘作と称し、諸作は3分5厘作なりという。〔高島郡誌〕

天保8年（1837）

8月5日（9.4）

洪水。沢川大水にて沢村の堤防200間余、知内村堤防150間余決壊、豊熟の田地流失し、知内村床上浸水す。方々の橋落ち、溺死2、3人ありという。この時の被害は主として北部にあり、湖水増水2尺ばかりなり。〔高島郡誌〕

8月14日（9.13）

大風雨。芹川満水8合7匁。〔彦根市史稿〕

嘉永元年（1848）

6月6日（7.6）

守山・草津・勢多近在、大洪水にて大荒れ、人多く死し、家流る。〔愛知郡志（平松山田記録）〕

葉山川出水甚だしく、六地蔵村にて堤防決潰、川辺・目川・洪川・中沢・川原・上笠等の諸村皆浸水す。〔栗太郎志〕

8月11日（9.8）

夜風雨。上小川村堤防橋詰より下100間、南方600間ばかり決壊。〔高島郡誌〕

8月12日（9.9）

夜、大水、13日の五ツまで大風。〔愛知郡志（平松山田記録）〕

古今稀なる大風雨、愛知川1升5合の水。東海道筋橋々落ち、犬上川切れて、高宮駅大荒れ、

彦根新町浸水、芹川南切れ、大藪村まで白川になる。〔愛知郡志（西小椋村會根辨隨構共有文書）〕

嘉永3年（1850）

7月21日（8.28）

7、80年以來の大風なり。〔愛知郡志（平松山田記録）〕

9月3日（10.8）

大洪水。安曇川堤防決壊、霜降村の民家、床上浸水5、6尺に及び、流失したる民家あり。

〔高島郡志〕

嘉永5年（1852）

11月12日（12.23）

風水害甚だしく、領内へ救米を出す。〔蒲生郡志（大森陣屋記録）〕

安政2年（1855）

8月20日（9.30）

夜大風雨。鴨川出水、堤防40間余決壊す。〔高島郡誌〕

安政5年（1858）

6月27日（8.6）

七ツ時より勝野北風、湖上一面水煙立ち、暮時に大波、海津石垣を打ち越し、水、裏町に及ぶ。前代未聞と称す。石垣大部分崩壊。西浜村、壊家1軒。〔高島郡誌〕

7月27日（9.4）

・昼の五ツ時より夜五ツ時まで大風・大水。28日夜大水にて愛知川筋大荒れ、所々の堤切れ、愛知川宿、家2軒流れる。〔愛知郡志（平松山田記録）〕

安政7年（1860）
万延元年

3～5月（3～6）

3月より雨天続き、4月大水、5月5日大水、10日大風雨、16、7日ごろいよいよ洪水。100年来の大水と言う。〔愛知郡志（福山記録）〕

春より長々雨天打続き洪水の所、5月11日大風雨にて村々水込みになり、郷中一統難渋す。

〔愛知郡志（平松山田記録）〕

長雨打ち続き、湖水定水より8尺高水なり。この時勢多橋まん中にて水より橋まで4～5寸ばかりに見ゆ。彦根は四十九町より浜手の方は皆水つき、大手橋まで水つき、其のほか、湖の周り
はみな床上まで水つく。〔彦根市史稿〕

5月10日大洪水、11日朝暴風雨、続いて大波起こり、海津石垣くずれ、民家土蔵大破、中小路町表西町とも浸水し、往来舟を用う。西浜は石垣ことごとく崩壊し、浜側の家は大破し、壊家多く、土蔵小屋にて流失したるもあり。村民は寺々に避難し、あるいは山内に堀立を建て引移る。今津ことに甚だしく、石垣総くずれとなり壊家あり、土蔵小屋の流失あり。加賀藩領下の損害は、今津流失34軒、大壊92軒、半壊24軒、土砂流入52軒、浸水262軒。湖上水増すこと7尺余なり。

〔高島郡誌〕

7月（8～9）

11日夜大風吹き、大いに損ず。水はこの辺は少なし。風は近年に無き大風なり。17日朝より風

吹き、この時は大水なり。〔愛知郡志（平松山田記録）〕

夏、洪水あり。湖水常水よりおよそ1丈を増し、沿湖の各村被害多し。〔栗太郡志（六地藏福正寺記録）〕

万延2年（1861）

5月5～6日（6.12～13）

大雨にて洪水。此の時凶作。〔蒲生郡志（久郷日記）〕

文久2年（1862）

5月2日（5.30）

1日夜より2日の四ツ時までうしとら（北東）の大風ふく。村中の家々大あれ。〔愛知郡志（平松山田記録）〕

慶応元年（1865）

閏5月（6～7）

連日豪雨のため諸川増水。愛知川は堤破れ、橋落ち折損。〔彦根市史稿〕

慶応2年（1866）

5月15日（6.27）

洪水。蛭口川、山崎の上にて堤防決壊、鴨川・安曇川も堤防決壊せり。

8月6～7日（9.14～15）

7日、大風高波。海津西浜の石垣崩れ、海津加州本陣を始め、民家大破し、土蔵流失あり。海津の田畑すべて浸水し収穫無し。今津南浜町浜側橋本にて3軒残して其の余はすべて壊家となる。打下村はことに被害多しと云う。〔高島郡誌〕

明治及び大正初期の水害（県史より）

本県の水害は、瀬田川洗堰完成までは、ほとんど連年多少の被害を免れず、琵琶湖治水会調書による水害表は、次のとおりである。

最大被害は、明治18年及び29年の2回であった。

自 明治元年 琵琶湖沿岸水害表（3千町歩以上水害の分）
至 大正6年

年次	鳥居川最高水位	同月日	水害反別	損失金
明治元年	一尺	—	一反	1,826,854円
3	—	—	—	1,590,449
8	4.50	8月13日	4,239.2	476,563
9	3.10	9 29	5,357.0	645,893
10	3.90	9 21	2,819.5	339,945
14	4.55	7 9	4,511.1	746,028
17	7.00	7 20	8,176.4	1,130,755
18	8.95	7 4	11,277.6	1,470,876
22	6.60	9 15	10,787.3	1,292,868
23	6.50	5 10	8,734.3	965,578
25	5.40	7 27	6,830.2	698,929
28	7.00	8 9	10,743.4	1,474,692
29	12.30	9 13	16,732.5	1,730,103

32	4.80尺	10月10日	3,722.8反	297,249円
36	4.85	7 25	5,529.5	906,756
40	4.23	9 11	3,300.0	
大正6年	4.71	10 29	6,245.0	

慶應4年 (1868)

閏4～5月 (5～7)

4月上旬より梅雨降り続き、おいおい暴雨に相成り、日夜止み間なく、5月4日、5日に至り、湖水7、8尺の増水にて大津より北国街道筋・三井寺下・尾花川・唐崎・堅田・絹川・和仁・南浜・北浜等、人家床の上1、2尺も水込み、往来は船にて、田畑一円の水と相成り候。諸民の難波言語に尽くしがたく、鯉・鮒の類、人家の柵の上などへとび上り、又は山手木の枝等に掛かり居り候。〔気象史料〕

4月15日より半日雨、半日晴の日が続き、5月4日七ツ時より9日まで毎日雨降り、8日大洪水。今年植付前より雨続き、長しけに大麦・小麦立ちながらはゆる。

5月11日より雨降り、15日8ツ時まで少しもあからず降り続く。16日は8ツ時まで上天気、それより雨17日、18日降り続き、19日大水、23日まで雨降り、4月15日より5月23日まで37日間の長しけ。湖水のまわり大洪水。先の申年の水より2尺6寸ばかり高水にて彦根の水害もおびただしく、下辺の町には家財を二階に上げて縁故をたどって上の町へ避難し、1ヵ月ばかり自宅へ帰れず。

彦根の被害

人家421戸・田28町9反・畑41町9反 (各松原町) 〔彦根市史稿・彦根百年譜〕

閏4月15、6日より、5月20日過ぎまで、37、8日の間雨天続き、常水より湖水1丈余出水。落合村大堰大明神の半町余上まで水先上る。八木浜西照寺御堂上り段3つ沈む。大津石場辺・鏈屋などは、床の上水4尺ばかり上る。〔東浅井郡志 (大村家記録)〕

5月洪水、湖上増水6尺余。海津にては浸水家屋多く、田畑植付なりがたし。今津等は全村浸水して舟にて往来す。〔高島郡誌〕

7月 (8～9)

百瀬川増水1丈2尺、堤防40間決壊す。湖上増水、沿湖の家屋皆浸水し、海津にては床上に及ぶ。後年これを“辰年の大水害”と称す。〔高島郡誌〕

明治3年 (1870)

7月19日 (8.15)

16日～19日大雨。19日4ツより8ツまで大風。川水大增し、堤切れ、高宮の宿、水にて家流れ、死人多く、山々崩れ。〔愛知郡志 (福山記録)〕

9月7日 (10.1)

夜、大暴風雨。〔栗太郡志・愛知郡志〕

9月18日 (10.12)

暴風雨。河水満溢し、堤防決壊する所多し。〔東浅井郡志〕

17日・18日の両日にわたり暴風雨襲来、浸水・堤防決壊等の被害あり。大橋・岡・沼波・芹中・橋向・後三條・中藪等芹川沿岸に甚だし。高宮町倒壊家屋 137 戸、溺死32人、農作物の被害多し。時の人これを“米宗風”と称す。〔彦根市史稿・彦根百年譜稿〕

明治 10 年 (1877)

10月11日

暴風雨。諸川洪水、堤防を決壊し、田圃を損害す。無慮 2,819 町^も反、339,945 円の多きに上るべしという。〔東浅井郡志〕

明治 16 年 (1883)

2月21日

滋賀颶風。〔^{つじかぜ}気象資料(摘要類函)〕

9月12~13日

台風が12日午後2時大隅沖に、13日午前6時には潮岬付近に達し、浜松付近より関東地方を斜断して鹿島灘に出た。九州・四国・近畿暴風雨となる。〔気象史料(台風調査報告)〕

明治 17 年 (1884)

5~7月

5月連日降雨あり。湖水^{はんらん}氾濫し、沿湖の稻田^{ちゅう}腐爛す。減水後、苗を植え直す。〔彦根市史稿〕

6月13日夜より大雨降り、19日まで降り通し、洪水して屋敷まで水入る。〔愛知郡志(福山記録)〕

7月連日降雨あり。湖水^{はんらん}氾濫し、沿湖の稻田^{ちゅう}浸水して腐爛す。〔栗太郡志〕

9月

連旬雨降り、湖水^{はんらん}氾濫し、湖岸の稻田^{ちゅう}浸水腐爛す。〔愛知郡志〕

明治 18 年 (1885)

7月1日

台風が1日午後2時紀州南端に接近し、同夜半島の東側を北上し、2日午前6時に佐渡付近に至り、東進して日本北部を斜断し、太平洋に去る。〔気象資料〕

6月18日より7月7日まで20日間、連日大雨襲来、ために県下^{はんらん}到る所、河川氾濫して湖面にあふれ、その被害滋賀郡最も甚だし。

滋賀郡 和辻村浸水 285 戸、田畑損害60町歩。真野村浸水45戸、田畑損害30町歩。堅田村浸水 435 戸。

栗太郡 老上村倒壊家屋 3 戸、浸水 140 戸、田畑損害60町。

野洲郡 三上村堤防決壊50間。市三宅村同80間、浸水田畑 200 町歩。

蒲生郡 八幡町及び宇津呂村全部浸水。島村浸水 282 戸、田 166 町歩。

愛知郡 青山村、曾根村、妹村所属堤防決壊15町、全部浸水。上岸本村一円浸水、流失家屋 1 戸。中戸村、鯉江村所属田 100 町歩流失。

坂田郡 磯、朝妻筑摩、上中下多良村住家田畑浸水、堤防決壊 550 間、流失家屋15戸。醒井村堤防決壊50間、田10町歩浸水。長岡村堤防決壊55間、人家 100 戸余り浸水、田12町歩浸水、1戸流失。

高島郡 湖辺人家約1,000戸浸水し、田畑に損害が多く、深溝村のごときは流失家屋21戸、田畑浸水のため収穫ほとんど皆無の惨況を呈した。〔県史〕

7月1日・2日両日大強風起こり、にわかには湖水丈余に増し、村内の人民16家、家内みなみな当寺山内へのがれ来り、およそ30日余、当寺に寓居す。〔聖衆来迎寺記録〕

明治19年(1886)

9月16日

暴風大風にて洪水あり、河川満漲し、堤防田畑の損害多し。〔東浅井郡志(滋賀県沿革誌)〕

9月24日

暴風雨・洪水あり、堤防決壊する所多し。〔東浅井郡志(滋賀県沿革誌)〕

明治22年(1889)

9月11日

暴風雨。安曇川堤防決壊300間、濁流南船木の北部に流れこみ、田畑・家屋・橋梁の流失多し。

南船木 流失・全壊家屋9戸、半壊10戸、浸水46戸

北船木 一円に床上浸水1尺余。〔高島郡誌〕

明治24年(1891)

10月20日

百瀬川堤防50間決壊、埋没反別9反、山林埋没10町歩。〔高島郡誌〕

明治25年(1892)

5～8月

5月以来長雨しきりに至り、湖面漲溢し、稻田水底に没したが、7月に入り快晴連旬、ようやく減水した。各農家は専心稲苗の改植に勉めたが、8月2日より又暴風雨となり、湖面再び増水し、郡内沿湖水田の損害395町に及ぶ。〔蒲生郡志(郡後所記)〕

9月

琵琶湖増水、田地を浸し、米作の被害多大なり。〔高島郡誌〕

明治28年(1895)

7～8月

天候状況

7月1日以来晴天の日は少なく、16日から19日にかけて大雨が降り、特に、24日早朝からは風雨となり、25日昼前頃におさまった。また、26日夕刻から降り出した雨は月末まで続き、殊に、30日は雷鳴をまじえた激しい豪雨で、道路は河となって流れる程で、木之本における雨量は同観測所開始以来未曾有で、28日99mm、29日197mm、計296mmで、7月の月合計雨量は504mmであった。

また、8月も6日まで連日大雨が降り、7日に至りようやく晴れた。

出水状況

7月29日、朝より各河川出水し、湖北地方の姉川・余呉川2流域内は最も甚だしく、その水源地方の山岳の崩壊多く、流水崩土を流し、崩土川を堰止め、水勢激突して河底の土砂を浚え、巨巖を流し、堤防を決壊し、喬木を折り、家屋・田畑・道路・橋梁を流し去り、河幅は3倍となる。

姉川の最高水位は平水位より約22尺増高し、余呉川は同日朝8時に最高水位となる。姉川流域は30日朝より、余呉川は29日午後1時頃より減水したが、高時川は数日を経ても平水位に復しなかつた。

出水前後の雨量 mm

親測地	月日	7月25	26	27	28	29	30	31	8月1	2	3	4	5	合計
彦根	根	—	33	18	24	32	9	0	14	47	53	84	9	323
木之本	之	26	31	28	99	197	11	1	41	81	91	91	14	711
長浜	浜	3	28	10	40	90	11	20	44	106	77	61	11	501
今津	津	9	38	16	30	30	16	7	10	51	68	102	17	394
八幡	幡	—	47	17	11	6	4	—	64	55	51	16	38	309
大津	津	2	43	25	1	6	15	8	50	48	38	16	28	280

被害状況

別表のとおりであり、特に著しかったのは坂田・東浅井・伊香・高島の各郡であった。県警察部勤務森本兵次郎警部は、8月2日伊香郡丹生村尾羽梨子で救護活動中に殉職した。

激甚地の状況

東浅井郡虎姫村は、田川の河水停滞により、姉川・高時川の水逆流し、全村の家屋殆んど水中に没し、住民は、天井あるいは屋上に難を避けて頻りに救いを求めたが、水深く、長浜より舟数十隻をもってきて救助した。

伊香郡片岡村柳ヶ瀬は、余呉川の氾濫により、3棟を除き全部落ことごとく浸水した。避難所が設けられるや、罹災者は争って移ったが、その後も出水甚だしく、食糧運搬ができず、避難所と浸水しない土地との間に一條の線を張り、これによって食糧や通信を送った。同村椿坂・中河内・丹生村奥河並・鷺見・摺墨・尾羽梨子・針川も同様惨状をきわめた。

被害表

(明治28年自7月水害景況)

死者	3人	宅地	荒地	181,722反
負傷者	11 "	"	浸水	3,158,611 "
全壊住家	25棟	山林	荒地	455,124 "
" 其他	45 "	"	浸水	6,061,107 "
半壊住家	64 "	其他	荒地	12,800 "
" 其他	14 "	"	浸水	138,123 "
破損住家	1,078 "	計	{ 荒地	9,751,390 "
" 其他	1,121 "		{ 浸水	138,947,991 "
流失住家	13 "	道路	破損	952カ所
" 其他	17 "	橋梁	破損・流失	445 "
浸水住家	4,559 "	用悪水路	破損	638 "
" 其他	1,372 "	溜池	破損	13 "
計 { 住家	5,739 "	井堰	破損	308 "
{ 其他	2,569 "	電柱	倒伏	27 "
田荒地	7,180,817反	山崩	れ	298 "
" 浸水	109,158,826 "	船舶	破損	2 件
畑荒地	1,920,927 "	堤防	破損	945カ所
" 浸水	20,431,324 "	被害	区域	135町村

明治 29 年 (1896)

9月の豪雨 台風・前線

この年は非常な多雨年で、1月から8月までに1637mmと平年の1年分に相当する雨が降っており、また、9月に入ってもよく降り、9月7日早朝より雷を伴った一大豪雨となったのである。当時の状況を、元彦根測候所長関和男氏は、その回顧録で「雨の降り方の強烈なことは、丁度ロープのような太さの雨で、その上雷雨を伴ない、実に凄惨な光景であった。」と述べている。

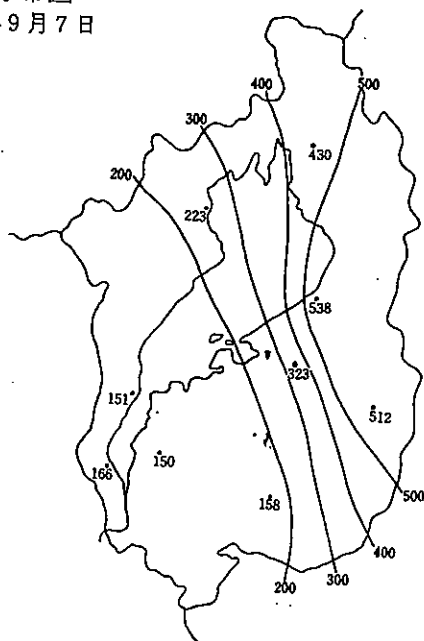
彦根の日雨量

9月	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	計
日雨量 mm	—	—	0	10	4	23	597	162	81	107	4	20	1008

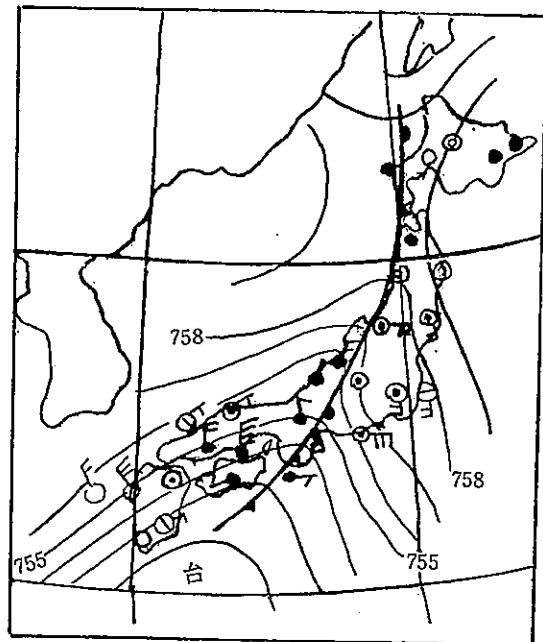
雨量は、わずか10日間に1008mmという平年降水量の6割強の豪雨が降ったのであり、しかも24時間最大は、684mm(7日6時~8日6時)・4時間最大は183mm(7日6時~10時)と、まことに驚異的なものであった。

当時の気圧配置を知るために、天気図を作成して調べた結果によると、9月4日、朝鮮南部を北東に進んだ低気圧は、日本海中部をとって6日には北海道北方に達した。この低気圧の中心から南西にのびる寒冷前線は、6日朝6時には奥羽西部をとおり、近畿中部を経て四国南部に達していた。その後、この前線は、太平洋高気圧と日本海の高気圧にはさまれ、9日までは僅か東西に振動したのみで、殆んど停滞していた。しかし、10日には台風の接近により西に移動し、11日には奥羽方面へ北上した。一方、6日土佐沖にあった低気圧はゆっくり東に進み、紀伊半島付近で消滅した模様であるが、この低気圧と南方海上にある台風との影響で、暖気の補給が盛んとなり、6日より停滞していた前線が、7日には非常に活発になり、滋賀県を中心とする豪雨となったのである。

降水量分布図
明治29年9月7日



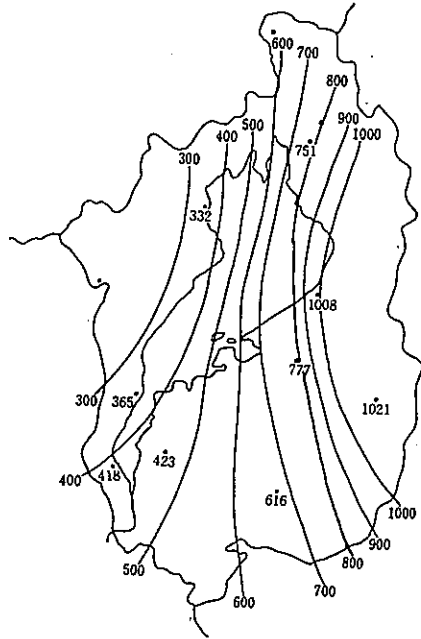
地上天気図
明治29年9月7日
午前6時



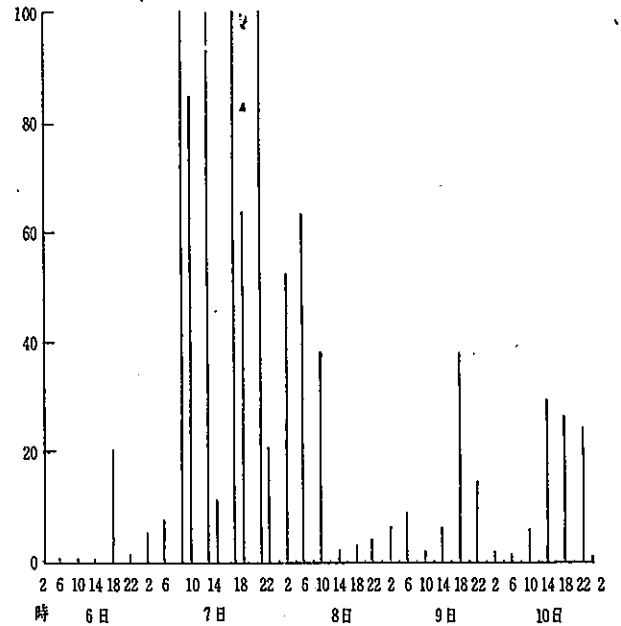
降水量分布図

明治29年9月3日～12日

前4時間雨量変化図(彦根)



降水量mm



被害状況

9月8日12時には気象台の構内は38cmの浸水となり、その後、1時間に1～2cm増水し、12日午前9時には浸水1m30cmとなり、13日午前には1m35cmと最高を示し、その後減水した。彦根市街は9月13日最高水位の時80%が浸水している。

また、琵琶湖の水位（大津量水標）の変化をみると、6日午前6時には1m73cmであったのが、9日午前6時には3m18cm、12日午後12時には北風のため、4m02cmと驚くべき上昇を示し、常水位を上まわること約3m余となった。このため、湖畔の稲田はすべて湖水となり、村落は水に没し、市街は舟を浮べて航行し、次のような未曾有の大被害となったのであった。

注：鳥居川量水標 6日 162cm・9日 296cm

〔彦根地方気象台 大坪・伊藤調査〕

被害調 (県 史)					
死者	29人	浸水床上	35,627棟	堤防破損延長	35,910間
行え不明	5 "	" 床下	22,764 "	道路流失及埋没	30,455 "
負傷者	79 "	田 荒地	25,605反	船舶流失	63艘
流失住家	} 1,749棟	" 浸水	296,826 "	" 破損	196 "
同その他		畑荒地浸水	43,095 "	湖岸港湾波止場破損	159カ所
全壊住家	} 1,251 "	宅地荒地	724 "	山 崩	6,648 "
同その他		" 浸水	28,767 "	避難所数	636 "
半壊住家	} 6,136 "	山林原野荒地浸水	26,793 "		
同その他		堤防決壊箇所	1,954カ所		
破壊家屋	26,365 "	同 上 延長	69,494間		

人的住的被害郡別内訳

	死者	行不明	負傷者	流失家	同その他	全壊家	同その他	半壊家	同その他	破損家	浸水上	同床下
滋賀	1		32	97	176	103	110	768	884	8,300	1,167	942
栗太	1		1	30		162	46	174	51	1,889	2,950	734
野洲	3			69	365	29	53	33	32	2,370	180	973
甲賀	4		5	9	5	15	10	21	19		389	859
蒲生	8	3		69	9	50	19	89	13	45	8,640	3,978
神崎	1	2	13	100	49	95	42	466	297	2,035	1,979	2,587
愛知	1		19	47	24	28	12	45	24	1,313	3,814	4,205
犬上	3			113	24	64	50	366	37	1,534	3,856	2,459
坂田	2		1	82		66		334		3,584	5,403	1,984
東浅井	2		7	137		94		681		2,210	4,245	1,078
伊香	1		1	37	27	25	2	96	8		1,262	2,478
西浅井	1			2		1		179			927	368
高島	1			96	182	96	79	595	924	3,085	815	119
計	29	5	79	1,749		1,251		6,136		26,365	35,627	22,764

主要河川出水状況 (県統計全書)

河川名	量水標位置	警戒水位	最高水位	月日
野洲川	甲賀郡柏木村 泉	1.82 ^m	3.00 ^m	9.7
日野川	蒲生郡苗村川守	1.22	4.50	"
愛知川	愛知郡愛知川町愛知川	0.91	3.20	"
宇曾川	彦根市日夏	0.91	3.40	"
犬上川	犬上郡多賀町敏満寺	0.60	3.20	"
姉川	長浜市国友	0.91	3.85	"
高時川	東浅井郡速水村馬渡	0.91	3.70	9.10
草野川	" 下草野村飯山	1.20	4.00	9.7
安曇川	高島郡本庄村南舟木	1.51	3.30	9.10
"	" 朽木村岩瀬	0.91	2.20	"
田川	東浅井郡虎姫町唐国	0.90	4.00	"
余呉川	伊香郡木之本町黒田	0.89	3.25	9.7

29年の水害は、県でも未曾有のもので、県下被害総額1千万円、死傷100余人を出した。本地域(大津市)でも唐崎量水標は最高水位3m91cmをしるした。下坂本村の「両社の辻」には、この高水位を印した石柱が建てられている。〔新大津市史〕

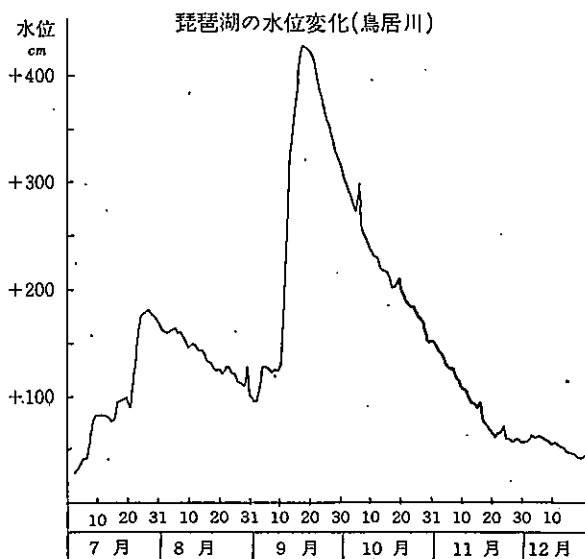
明治30年(1897)

9月

上旬に強雨があり、各河川増水し、堤防・道路・橋梁等の破損がでた。〔東浅井郡志(県沿革誌)〕

各地の総降水量mm(1~8日)

彦根 159



明治29年

木之本	150	大津	92
水口	179	今津	182

、明治 32 年 (1899)

3月 融雪出水

3月以来降雨多く、融雪のため湖北の河川増水し、堤防・道路の破損、橋梁の流失が多かった。
〔東浅井郡志(県沿革誌)〕

、8月28日

県下至る所の諸川が出水した。愛知郡では、愛知川筋高野橋を流失し、中稲に小害を被り、柿その他が吹き落された。彦根付近においては中稲に多少被害があったようで、樹木・高塀及び生垣を倒した箇所が多かった。

彦根 最大風速 S 14.2^{m/s} (現9.9^{m/s}) 28日22時00分

各地の総降水量^{mm} (28, 29日)

彦根	48	八幡	27
大津	71	今津	35

9月8日

暴風雨あり。水害の大きかった河川は、高島郡内の安曇・知内・百瀬・石田の4川、東浅井郡では姉川・高時・草野の3川、伊香郡では余呉・高時の2川で、いずれも堤防決壊、道路の破損が甚しかった。

彦根 最大風速 NW 13.8^{m/s} (現9.7^{m/s}) 8日18時00分

各地の総降水量^{mm} (6~8日)

彦根	129	八幡	106
大津	172	今津	190

10月7日

暴風雨で県下至る所で河川が氾濫した。栗太郡草津町横町では小川溢水し、住家床下浸水、板塀の被害があった。

彦根 最大風速 N18.3^{m/s} (現12.8^{m/s}) 7日15時00分

各地の総降水量^{mm} (4~7日)

彦根	145	大津	128
八幡	106	今津	97

明治 33 年 (1900)

9月28日 台風

台風は、23日ルソン島の南東方に現われ、25日台湾の東方約600kmの洋上を過ぎ、27日午後1時、屋久島付近に達し、種子島辺より北東に転じ、28日午前3時紀州の南端を掠め、浜松より上陸し、関東南部を通過して金華山沖に去った。

彦根 最大風速 NW 16.8^{m/s} (現11.8^{m/s}) 28日08時00分

各地の総降水量^{mm} (26~28日)

彦根	171	大津	119
----	-----	----	-----

八 幡 118 今 津 138

本県では各所で多少の被害がでた。特に著しかったのは甲賀郡で、水口町の東端より柏木村の西端に至る1里余の東海道では膝や股に達する浸水箇所が多く、野洲川・杣川等は橋梁の破損・流失多く、田畑の浸水も著しかった。また、三雲村大沙川・内良川・谷川等の堤防も決壊し、列車は柘植・草津間が不通となった。

明 治 34 年 (1901)

6月30～7月1日

6月末大雨あり。堤防の決壊、道路破損多し。〔伊香郡志〕

各地の総降水量 mm (6月30, 7月1日)

彦 根	72	大 津	108
八 幡	81	今 津	84

8月22日

大雨あり。湖北の諸川出水し、堤防の決壊した所多し。〔東浅井郡志 (県沿革誌)〕

各地の総降水量 mm (21, 22日)

彦 根	118	大 津	27
木之本	184	今 津	73
八 幡	55		

9月28日

暴風雨あり。堤防の決壊多し。〔東浅井郡志 (県沿革誌)〕

彦根 最大風速 S $9.4m/s$ (現 $6.6m/s$) 28日20時00分

降 水 量 $86mm$ 28日

各地の総降水量 mm (21～28日)

彦 根	155	山 上	185
八 幡	153	大 津	174
今 津	119		

明 治 37 年 (1904)

9月16～17日

暴風雨あり。道路・橋梁・堤防の損害甚だ多し。〔東浅井郡志 (県沿革誌)〕

彦根 最大風速 SE $17.6m/s$ (現 $12.3m/s$) 17日6時00分

各地の総降水量 mm (15～17日)

彦 根	204	八 幡	116
山 上	376	大 津	143
今 津	134		

明 治 38 年 (1905)

6月

6月に長雨が続き、7月、塩津浜水量標増高 $36cm$ になり、沿湖稻田の浸水は旬日に及んだ。〔伊香郡志〕

各地の6月降水量mm

彦根	441	大津	574
八幡	464	今津	390

明治40年(1907)

8月14~15日

8月11日、小笠原島の南西海上に現われた台風は、13日琉球列島の南東方洋上に出て、北北東に転向し、14日紀伊半島の南方に進み、15日夜、名古屋・津の間を通過し、福井付近を経て日本海に入った。

このため県下では、河川・溜池の数箇所に堤防の破損をみた。

彦根 最大風速 NNW 15.7m/s (現11.0m/s) 15日22時00分

各地の総降水量mm (14~16日)

彦根	119	大津	49
八幡	65	今津	46

8月25日、9月20日

8月25日、洪水。越えて9月20日に至りて再び洪水あり。ともに姉川の堤防を欠損した。〔東浅井郡志(県沿革誌)〕

各地の総降水量mm

(8月23~25日)				(9月20, 21日)			
彦根	54	大津	146	彦根	60	大津	71
八幡	72	今津	89	八幡	64	今津	59

明治41年(1908)

2月24日

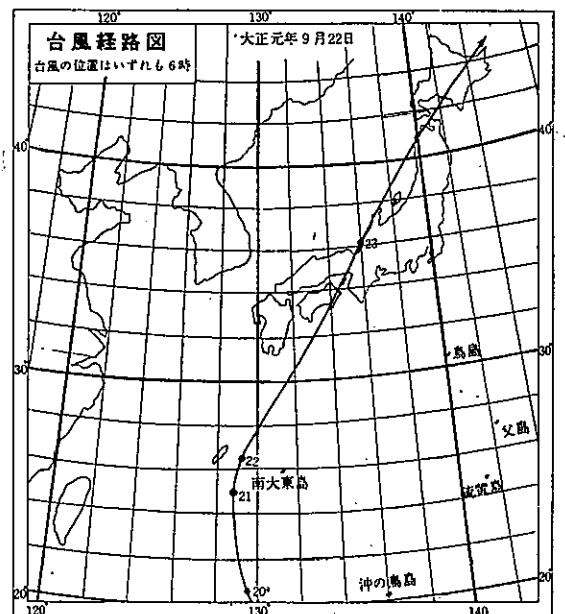
朝来晴天、風力弱く、午後に至りにわかに雲量が増加し、午後2時10分北の暴風となり、霰を降らし、雷電起り、風力益々加わり、午後3時前後においてその極に達し、琵琶湖上は漁船・荷船で難波したものが多かった。

彦根 最大風速 N 17.1m/s (現12.0m/s) 24日16時00分

大正元年(1912)

9月22~23日 台風

台風は、9月19日、マリアナ郡島西方洋上に現われ、北西に進み、宮古島の南東方海上において北東に転じ、22日の夜10時、高知県足摺岬付近に上陸した。それより四国東部、瀬戸内東部を横切り、京阪地方と姫路・岡山の間より舞鶴付近に向い、23日午前6時には、福井・石川県海岸に沿って進み、能登半島を襲い、奥羽地方を横ぎり、北海道を通過し、オホーツク海に去った。



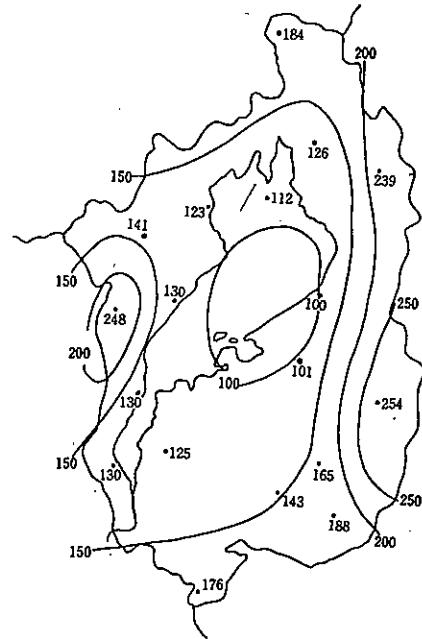
本県では、22日夜から23日にかけて彦根測候所創立来の暴風雨となり最大風速は南南東34.3 m/s (現24.0 m/s) であった。

この暴風雨は、本県下にも多量の降雨をもたらし、北東山岳地帯に最も多く、22日午前10時より23日10時に至る24時間の雨量は、いずれも200 mmに達する多量となり、各河川は一時、非常に増水し、大きな被害があった。

被害状況

- 死傷者 30余人 坂田郡
- 住家全壊 200戸 愛知・坂田の2郡
- 堤防決壊 高時川 (小谷村で約55間)・姉川堤防(一部) など
- 鉄道 北陸線一時不通
- その他、住家の浸水・田畑の浸水多数。

降水量分布図
大正元年9月21~23日



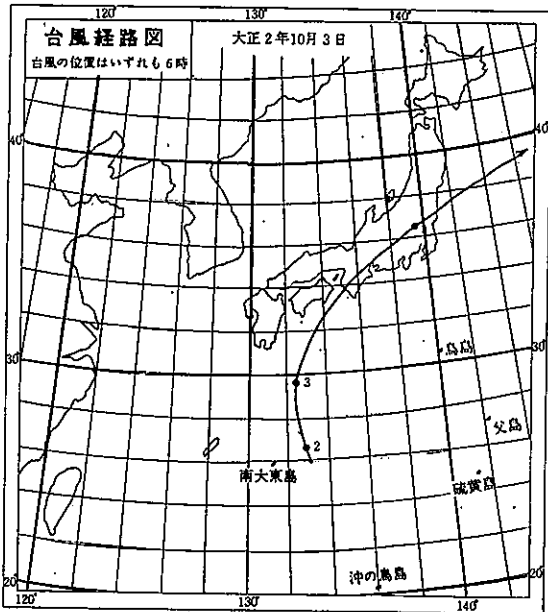
● 大正2年 (1913)

10月2~3日 台風

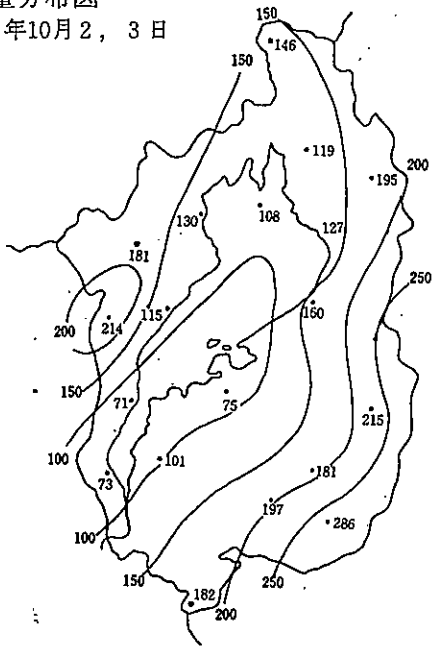
台風は9月29日、マリアナ群島のグアム島付近に発生し、北西に進み、1日沖繩東方洋上を北上、同夜次第に北東に転向し、3日朝室戸岬の沖に到り、紀州田辺付近より同半島に上陸し、津・岐阜方面を経て中仙道を通り、4日朝小名浜付近より太平洋に入り、5日千島の南方海上に去った。この台風は、その経路付近に著しい風雨をもたらし潮岬では、3日午後4時気圧730.8mm(974.4mb)に下り、大阪では、同日午後6時に風速35.6m/s(現24.9m/s)に達した。

本県では、2日から3日にわたった降雨は、近年稀な豪雨であって、八幡以南の湖岸を除けば、各地共100mm以上に達し、東部山間地帯は200mmを越えた。このため野洲・愛知・犬上等の河川は増水して堤防決壊し、橋梁流失多く、野洲郡では溺死者十数人を出した。

彦根	最低気圧	743.8mm (991.7mb)	3日19時40分
	最大風速	N 22.2m/s (現15.5m/s)	3日18時00分
	総降水量	160mm	2, 3日
土山	"	286mm	2, 3日



降水量分布図
大正2年10月2, 3日



被害状況

- 死者 42人
- 野洲川筋 35 "
- 日野川筋 1 "
- 愛知川筋 2 "
- その他 2 "
- 東浅井郡大郷村 2人(出漁中の魚船転覆)
- 住家流失 20戸余 (野洲川筋 16戸)
(日野川筋 4 "
- 家屋浸水 多数 (野洲川筋が主で床上)
(4 ~ 5 尺浸水 .)
- その他の建物流失 68戸
(野洲川・日野川・愛)
(知川・宇曾川筋など)

野洲郡河西村笠原地先で野洲川堤防決壊のため、流失人家21戸41棟、倒壊人家21戸32棟、死者男20人、女11人、浸水田地 300 町に及んだ。〔県史〕

河川別水害調

区分	死者	負傷者	住家		非住家	
			流失崩壊	その他浸水	流失崩壊	その他浸水
瀬田川				8	1	
野洲川	32	55	81	1,509	131	1,047
日野川	1		25	293	30	52
姉川流域	2			159		9
愛知川	3	1	18	816	4	137
宇曾川				175		166
犬上川				7		70
天野川				93		1

〔大正2年水害表〕

注：死者に相違があるが、他の資料にも42人とある。

大正3年 (1914)

7月1日 梅雨前線

早晩雷雨があり、南部地方に豪雨をもたらし、所どころに被害あり。野洲川筋では田畑の流失、埋没数町歩に達し、浸水田畑は数十町歩・浸水家屋32戸・溺死2人。

大津市で浸水家屋あり、石山村宇治川水電では隧道堤防が崩壊した。

大正5年(1916)

2月29日 低気圧

百瀬川筋堤防40間破壊、民家に浸水す。(高島郡誌)

各地の総降水量mm(28、29日)

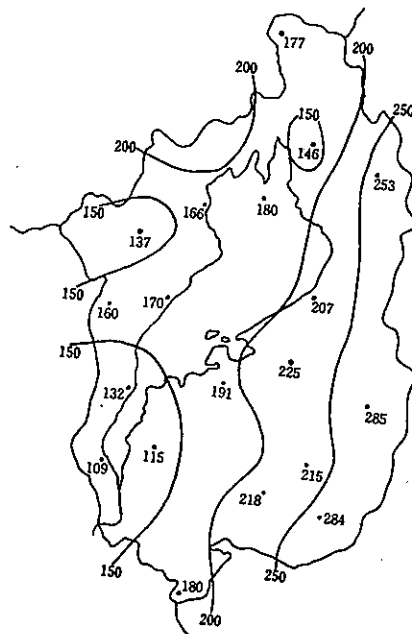
彦根	32	今津	48
八幡	31	市場	79
大津	43	坊	88

6月16~17日 梅雨前線・低気圧

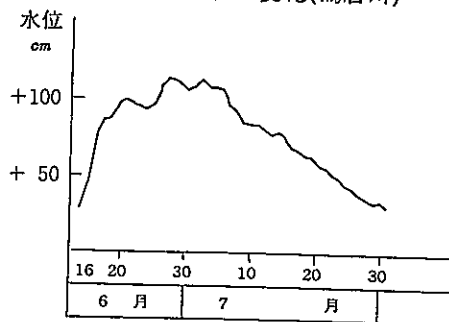
16日昼前頃より降り始めた雨は、近年稀な豪雨で、16、17日両日の雨量は、少ない地方でも100mmを越え、200mmを越えた所が多く、鈴鹿山系が最も多かった。

この豪雨で、湖水は急に増水し、16日朝32cmであった水位は、19日朝83cmに達し、沿岸の田畑は浸水した。その後引きつづき降雨があったため、30日朝には1mを越える高水位になった。

降水量分布図
大正5年6月15~17日



琵琶湖水位の変化(鳥居川)



大正5年

被害状況

死者	1人
重傷者	2 "
軽傷者	9 "
家屋床上浸水	422戸
床下浸水	318 "
橋梁流失	15カ所
破損	3 "

橋梁破損	3カ所	田畑浸水	308カ所
堤防決壊	708間	和船流失	5隻

8月10日 前線

県下全般に大雷雨があり、湖東及び鈴鹿山系に最も多く、80~100mmの雨量があった。

各地の降水量mm(10日)

彦根	68	今津	10
木之本	31	大津	25
政所	106	土山	112

被害状況

甲賀郡山岳地方で橋梁流失3箇所あり。

大正6年(1917)

9月29~30日 台風

台風は南西諸島付近より北東に進み、潮岬南方150kmをとおり、伊豆半島に上陸し、鹿島灘に

抜け、北海道方面に進んだ。

本県では、28日より降雨あり、30日夜に至って暴風雨となり、県下の諸川はみな出水し、日野・高時・愛知の各河川に堤防決壊を生じ、琵琶湖は刻一刻に増水し、沿岸の村落は次第に浸水区域を拡大した。〔東浅井郡志（琵琶湖治水沿革誌）〕

彦根 最大風速 N 17.8 m/s (現12.5 m/s)

30日24時00分

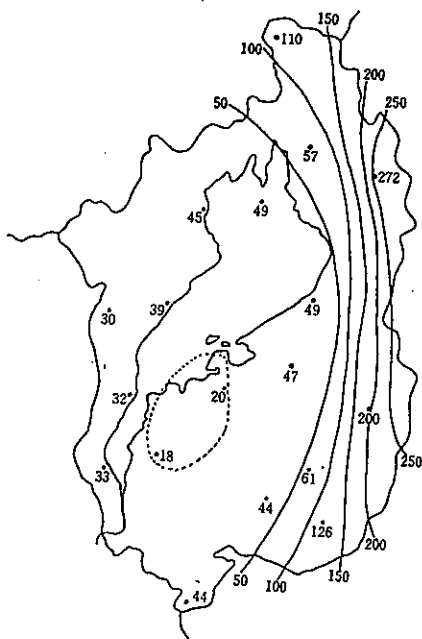
総降水量 238 mm 28~30日

政所 " 335 mm 28~30日

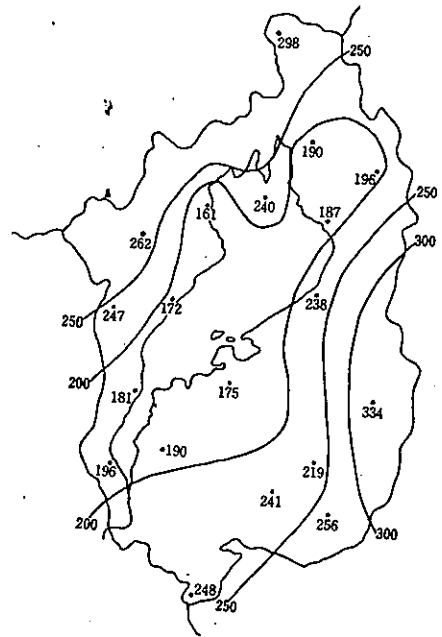
被害状況

家屋全壊	7戸	橋梁破損	32カ所
" 半壊	55 "	鉄道施設	1 "
" 床上浸水	555 "	埋没流失田	59町歩
" 床下浸水	2,984 "	宅地	4 "
道路決壊	250カ所	山林田野	166 "
橋梁流失	28 "	雑種地	34 "

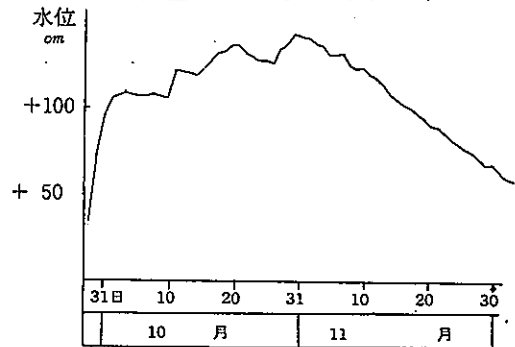
降水量分布図
大正7年7月10~13日



降水量分布図
大正6年9月28~30日



琵琶湖水位の変化（鳥居川）



大正6年

大正7年 (1918)

7月12~13日 台風

台風は9日フィリピン群島の東方洋上に現われゆっくり北上し、11日大東島付近を通過し、12日豊後水道をとおり、中国西部を貫き、日本海に出て、消滅した。

彦根 最低気圧 739.9 mm (986.4 mb)

12日12時00分

最大風速 ESE 23.8 m/s (現16.7 m/s)

12日10時00分

総降水量 49 mm 10~13日

吉槻 " 272 mm 10~13日

被害状況

(激甚地は湖東地方)

死者	1人	工場煙突の倒壊	5本
負傷者	2名	民家倒壊	100余戸
官庁・学校・工場倒壊	3棟	堤防決壊	200余間

8月30日 台風

27日マリアナ群島付近に現われた台風は、北西に進み、29日午前6時、四国南方約300kmに到着した。それより進路を次第に北東に転じ、30日四国東岸に上陸、近畿を縦断して31日三陸沖に抜けた。

本県では、愛知・野洲・安曇川など各河川は出水、堤防決壊及び橋梁流失したものが多く、その他蒲生・神崎郡では板塀小屋の倒壊多数、坂田郡においては田畑・桑園に多少の被害があった。

彦根 最大風速 ESE 15.9m/s (現11.1m/s) 30日07時00分
 総降水量 28mm 29, 30日

9月14日 台風

沖繩付近から北東進した台風は紀伊半島に上陸し、日本東部を北上し、能登半島から日本海に抜けた。

本県での被害状況は不明であるが僅少のもよう。

彦根 最大風速 NW 12.8m/s (現9.0m/s) 15日03時00分
 総降水量 23mm 14, 15日

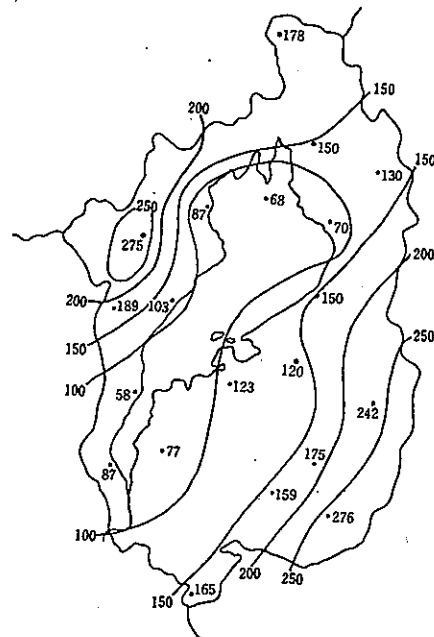
9月24日 台風

台風は19日グアム島付近の洋上に現われ、22日大東島の南方洋上に到り、北北東に転じ、23日同島の東方海上を通過し、24日浜松付近より上陸し、日本中部を貫き、日本海に出て、25日樺太南部を横切り、26日オホーツク海に入った。

本県では野洲・愛知・安曇川等の各河川は出水、堤防の決壊・橋梁の流失数多く、水田・家屋の浸水も夥しかった。被害の著しかったのは湖南地方で、大津市では樹木・高塀の倒壊多く、滋賀郡では住家全壊3戸・半壊2戸、その他の郡においても樹木の切損・高塀の倒壊が多かった。

彦根 最低気圧 735.8mm (981.0 mb) 24日11時00分
 最大風速 NNW 19.3m/s (現13.5m/s) 24日10時00分・12時00分
 総降水量 150mm 23~25日
 土山 276mm 23~25日

降水量分布図
 大正7年9月23~25日



大 正 10 年 (1 9 2 1)

4 月 3 日 台風

百瀬川堤防 5 箇所、延長 60 間破壊し、山林埋没 30 町歩、浸水田地 4 町歩、被害高 1 万円。

彦根	最大風速	SE	20.3 ^{m/s} (現 14.2 ^{m/s})	3 日 13 時 00 分
	総降水量		18 ^{mm}	2, 3 日
坊	"		152 ^{mm}	2, 3 日

7 月 13 日 台風

9 日ごろ、マーシャル群島付近に発生した台風は、11 日南大東島の東方洋上に達し、12 日朝、奄美大島の東方に到り、漸次北に転向、同日正午同島の北東洋上において北北東に転向し、13 日朝足摺岬に接近し、四国中部をとおり、岡山県より夕刻日本海に出た。

この台風は雨が多く、琵琶湖は増水し、14 日 1 m、17 日 1 m 11^{cm}で、明治 40 年来の高水位となり、浸水田 40,000 町歩であった。

彦根	最大風速	SE	7.8 ^{m/s} (現 5.5 ^{m/s})	13 日 13 時 00 分
	総降水量		92 ^{mm}	12, 13 日
政所	"		132 ^{mm}	12, 13 日

9 月 25~26 日 台風

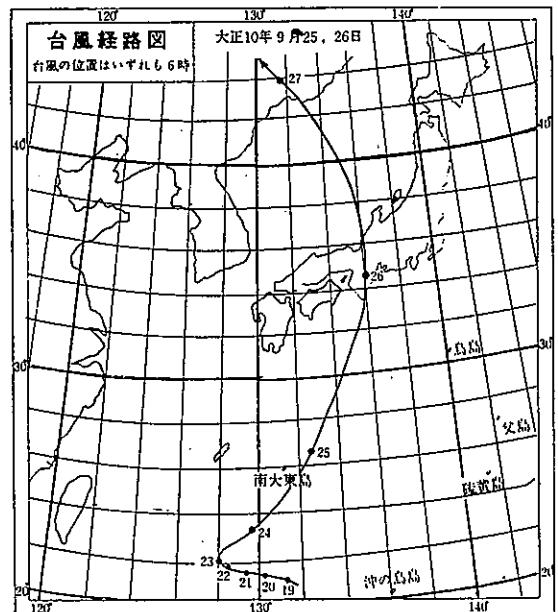
16 日朝、ラサ島南東 600 km の洋上に現われた台風は、西方に徐行し、23 日同島の南西約 500 km の洋上において急に北東に転向、次第に速度を増し、24 日午後、ラサ島付近をとおり、進路を次第に北に転じ、25 日午後 11 時 30 分潮岬付近に上陸、——潮岬 726^{mm} (968^{mb})——奈良・京都付近を経て、26 日朝 3 時敦賀付近より日本海に出て進路を北西に転じ、同夜ウラジオストック付近に上陸し、次第に弱まりながら満州北部に去った。

この台風は、本県においては大正元年 9 月の暴風雨に次ぐ強烈なもので、人畜の死傷・家屋の倒壊・浸水・河川堤防決壊・その他農作物の被害甚大であった。

彦根では、25 日午後 8 時ごろから気圧下降し始め、午後 10 時ごろより南東の風が強まり、26 日午前 2 時ごろが最も強く、雨は夜半より 1 時に至る間が最大 (1 時間 19^{mm}) であった。

被害状況は次のとおりで、湖北地方が最も惨状を極め、湖西地方は割合少なかった。

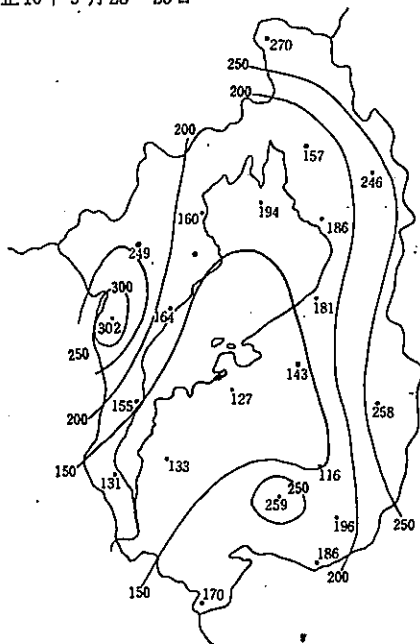
彦根	最低気圧	729.9 ^{mm} (973.2 ^{mb})
		26 日 02 時 00 分
	最大風速	SE 28.2 ^{m/s} (現 19.7 ^{m/s})
		26 日 02 時 00 分
	最大瞬間風速	SE 29.4 ^{m/s}
		26 日 02 時 00 分
	総降水量	180 ^{mm} 23~25 日
坊	"	302 ^{mm} 23~25 日



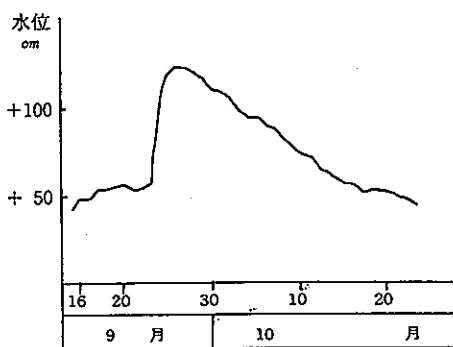
被 害 表

郡 別 被害区分	大津	滋賀	栗太	甲賀	野洲	蒲生	神崎	愛知	犬上	坂田	東浅井	伊香	高島	合計
死者人	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	3	2	2	9
傷者	—	—	—	—	—	3	—	2	3	3	5	1	—	17
住家全壊戸	6	—	19	19	22	63	16	38	51	52	95	29	—	410
“ 半壊 “	—	—	7	6	10	72	18	20	30	75	102	82	—	422
非住家全壊 “	—	10	57	86	64	163	84	66	32	18	169	142	2	893
“ 半壊 “	—	—	25	64	10	60	4	22	26	40	141	105	—	497
住家破損 “	—	—	75	2,351	136	—	1,181	—	290	5,000	504	—	—	9,537
非住家破損 “	—	—	150	1,473	73	—	536	—	—	1,500	369	—	—	4,101
田 反	—	289	702	3,473	240	15,726	6,031	3,090	203	5,430	1,960	8,122	5,967	51,233
畑 “	—	2	—	246	—	167	55	405	8	66	1,518	1,180	6	3,653
宅 地 “	—	—	—	2	—	—	—	3	5	3	758	313	3	1,087
原 野 “	—	—	—	51	—	5	—	—	—	8	14	20	—	98
そ の 他 “	—	—	—	120	—	—	500	—	—	25	17	—	57	719
道路決壊・破損	—	—	6	140	—	105	42	58	31	350	11	93	25	862
堤防決壊・ “	—	—	—	51	11	65	8	49	27	45	135	46	55	492
橋梁流失・ “	—	—	—	17	3	33	4	10	4	—	7	12	17	107

降水量分布図
大正10年9月23～25日



琵琶湖水位の変化(鳥居川)



大正10年

大 正 1 2 年 (1 9 2 3)

6月8～9日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線により、8日から9日午前中にかけて降り、雨量は彦根109mm、大津141mm、草津137mmであり、河川の堤防は危険に瀕したが、消防団・在郷軍人団が徹宵警戒し漸く決壊を防止しえた。

6月16～18日 梅雨前線・低気圧

この雨は湖南に多く、草津98mm、大津106mm、湖北地方では割合少なかったが、野洲川は出水著しく、野洲川橋は中間において損傷し一時交通が杜絶した。

6月21～22日 梅雨前線・台風

6月14日ヤップ島の南方に現われた台風は、北西に進み、20日朝石垣島の西方を北上し、21日上海の東方において揚子江流域を東進してきた低気圧を併合し、進路を東北東に転じ、22日瀬戸内海・北陸地方を経て、24日北海道の南東洋上に去った。

本県でも50～120mmの大雨を伴った強風があったので、真野川は堤防約15m決壊した。

6月27日 梅雨前線・低気圧

6月27日朝、東支那海にあった低気圧は正午頃佐賀県に、午後6時岡山付近に進み、28日朝東海道沖に去った。このため27日夜には強い雷雨となり、雨量は湖東・湖南地方が最も多く150mm内外の豪雨で比較的短時間の雨であった。

被害状況

滋賀郡真野川堤防決壊35m、田地20町歩浸水。同郡藤野川は、江若鉄道沿いに約10m決壊、列車一時不通。

栗太郡草津町伯母川出水甚しく、堤防約4m決壊。

大津市内尾花川氾濫。

6月30～7月2日 梅雨前線・低気圧

6月29日朝、山東半島に現われた低気圧は、30日朝、朝鮮海峡を横断して日本海に入り、7月1日北海道方面に去った。

本県では、30日朝から雨が降り出し、次第に強雨となって日雨量100mmを突破した所もあり、7月2日朝には止んだ。この連日の大雨で、琵琶湖の水位は増高し、3日午後には100cmに達し、浸水田は3,000町歩になった。また、雨量は彦根が最多で130mm、北小松は128mmで、梅雨に入って度々の大雨襲来のため地盤緩み、石垣の崩壊、土砂の流出した箇所数多くあり、殊に1日午前10時50分ごろ彦根市辨財天山麓の断崖は地層が緩み、150余坪崩壊し、線路上に推積したため上下両線共列車脱線し、大惨事を惹起した。

7月13～15日 前線・低気圧

7月12日朝、揚子江に現われた低気圧は、13日朝、朝鮮南部の沖に進み、日本海から北海道に去った。

県内では80～200mmの大雨が降り、湖北塩津村岩熊先の大川堤防約36m決壊し、付近の田畑は浸水した。

9月15日 台風

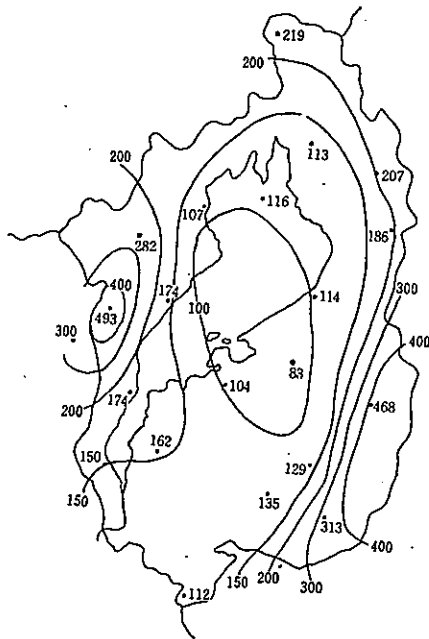
台風は9月12日小笠原島の西方海上に現われ、北西に進み、15日室戸岬の南方にせまり、次第に北東に転向し、八木・浜松・沼津地方を通過、16日朝、東京の北方を経て鹿島灘に去った。

このため、15日午後4時40分頃より約20分間風力静穏、雨は微雨、一部に青空を見る。台風の眼としては甚だ不完全なものであった。午後7時過ぎ、風向北西に逆転すると共に、降雨激しくなる。雨量特に多く、鈴鹿・比良の両山系では400mmを突破したので、各河川共出水甚しく、橋梁の流失、堤防の決壊多く、琵琶湖の水位は上昇、そのため、沿岸の田畑に被害を被った。

彦根 最低気圧 735.5mm (980.6 mb) 15日16時00分・17時00分

最大風速 E 10.4m/s (現7.3m/s) 15日10時00分

降水量分布図
大正12年9月13~16日



総降水量 114mm 13~16日

政所 " 468mm 13~16日

坊 " 493mm 13~16日

堤防の決壊箇所

- 愛知川筋 神崎郡御園村地先3カ所
- 芹川筋 千本村大堀・久徳村地先
- 野洲川筋 野洲町・葉山村・中里村地先他
- 安曇川筋 安曇村・常盤地先他
- 真野川筋 4間

その他和迓・木戸・大谷川等比良山系に属する各河川、被害多数。

10月10日 台風

台風は10月7日、フィリピン群島東方洋上に現われ、10日には琉球南方洋上に進み、午後6時、潮岬の南方を経て関東の南東部を横断し、

三陸沖を経て北海道南東沖に去る。

この台風による彦根の最大風速は北北西13.7m/s (現9.6m/s) で各河川出水し、堤防決壊、橋梁流失など多少あった。

大正14年 (1925)

7月10日 前線

湖南大津地方に雷雨があり、大雨を伴い、河川は出水、溝は氾濫し濁水が床下に浸水した家屋が多く、殊に大津市橋本町等では床上まで浸水した所も相当あった。

また姉尾川は出水し、付近の山崩れと共に濁水は道路に氾濫し、電車その他の交通は一時杜絶した。滋賀村地方では10日夕刻に至り、平野屋川堤防約5間崩壊し、付近の稲田に浸水して多大の被害を及ぼした。石山村鳥居川より流れる三田川は、11日早朝増水著しく、氾濫して、橋梁の流失・田畑の浸水と約100戸の家屋浸水をみた。

7月11~12日 前線

午後雷雨が発生し、各地に100mmを越す雨量があった。とくに愛知川流域が多く、神崎郡龍田で127mm・政所105mmなどの大雨を観測した。

この雷雨により、県下の各河川は一時に増水・氾濫して家屋・田畑を浸水し、道路を破壊して交通は一時杜絶し、橋梁を流失して多大の被害を及ぼした。なお、琵琶湖水位の増高は、沿湖稲田を浸水して少なからぬ被害を及ぼした。

8月16~17日 台風

8月6日、ラサ島の南に現われ、7日朝、南大東島に接近し、9日奄美大島の東方に達した。台風はこの頃から次第に南下し始め、13日ラサ島南東に進み、発達して740mm (986mb) 以下になった。これより再び北上し、加速しつつ16日夕刻、紀伊水道の南約200kmに達し、17日朝、和歌山付近を通り、舞鶴付近を経て日本海に入った。

彦根 最大風速 S E 14.6 m/s (現10.2 m/s) 17日07時20分
総降水量 111 mm 14~18日

被害状況

大津市 京阪電車が日ノ岡付近の山崩れのため不通。

蒲生郡 新築中の住家1棟倒壊。

神崎郡 能登川小学校1棟倒壊。

高島郡 水尾村小学校1棟倒壊。

その他 橋梁の流失・堤防の決壊・農作物の被害多大。

9月10~11日 台風

9月7日、小笠原の南東海上に現われた台風は、北西に進み、10日夜、三重県に上陸し、愛知県西部を経て北陸から東北地方に抜けた。

このため、県下では河川決壊・橋梁流失などの被害があった。

彦根 最大風速 N 9.8 m/s (現6.9 m/s) 11日03時00分
総降水量 86 mm 10, 11日

大正 15 年 (1926)

1月31日 寒冷前線・季節風

1月28日、蒙古に低気圧が発生して南東に進み、9日黄海に入り、30日日本海中部をとおり、北東進して北海道南東沖に去った。

本県では、この低気圧の東進に伴ない、寒冷前線が30日午前10時ごろに通過、その後大陸の高気圧が張り出してきた季節風が吹き出し、雪も降り出した。この前線の通過により突風が起り、琵琶湖上では、午前10時30分ごろ小松崎沖付近で堅田町の漁船3隻が顛覆し、10人が激浪にさらわれ内3人が溺死したのをはじめ、その他で多くの漁船の遭難があった。

小松崎沖での当時の天気は曇、北の強風が吹き、波浪の高さ5尺を越えていた。

彦根 最大風速 NW 7.4 m/s (現5.4 m/s) 31日11時00分

7月29~30日 寒冷前線

29日、日本海を東進した低気圧より南西に伸びる寒冷前線により、朝から雨が降り出し、午後には雷鳴を交え、夜半には激しい雷雨となり、彦根では30日午前1時頃より3時頃までが最も強く、同昼過ぎ止んだ。この雷雨は彦根を中心とした平野部に大雨が集中し、この大部分が30日午前1時~3時の約2時間に降り、彦根118 mm (任意の時間雨量65 mm)・木之本52 mm ・土山では僅かに19 mm であった。(被害状況不明)

昭和 2 年 (1927)

3月10日 融雪洪水・低気圧

8日、黄海北部にあった低気圧は、発達して9日には日本海に入り、午後から南西の風が強くなり、最大風速は彦根で西12.1 m/s (現8.5 m/s) 10日夜半より雨は雪に変わり、気温低下-3℃になる。この強風により、栗太郡物部村で家屋倒壊、その他板塀倒れ、看板飛散多く、湖北地方においては9日夜大雨に見舞われ、融雪と共に各河川一時増水し、堤防決壊多数で、浸水家屋を出した。

昭和 3 年 (1928)

6月17~18日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線により17日午後から雨になり、湖西・湖南地方は大雨となり、木戸川30間位決壊、田地3町歩埋没。栗太郡侮母川出水氾濫し、109戸浸水。湖南よりも湖西地方に被害が多かった。

昭和 4 年 (1929)

4月21日 低気圧

18日夕刻、東支那海に低気圧が発生し、次第に発達して20日夕刻土佐沖に進む。また、19日正午、揚子江中流域にも低気圧が発生、20日夕刻発達し、前者は紀伊半島に上陸し、東海道に出て北東進、後者は広島県付近に上陸し、中国山脈を縦断して若狭湾に出、21日朝、能登沖と宮城県付近に達し、22日朝には北海道の南東洋上で合流、728mm(971mb)以下に発達し、暴風雨になった。

彦根での最大風速は西南西9.3m/sで、この強風により太湖汽船会社定期船第三太湖丸は、21日朝5時30分ごろ、竹生島で激浪のため大岩石に衝突して沈没したが、死傷者はなかった。

昭和 5 年 (1930)

3月13日 低気圧

12日、台湾の北方海上に低気圧が発生し、発達しながら北北東に進行し、13日朝、朝鮮南部に達し745mm(993mb)になる。また、副低気圧が山陰沖に発生し、東北東に進行し日本海を通過した。

彦根では13日未明より南東の風雨が強まり、最大風速は南東13.0m/sに達した。このため、貨物列車の臨時停車、停電による電車の延着、湖上船舶の航行不能などの交通のみだれをはじめ八日市付近では、電柱の倒伏・板塀の倒壊・看板・屋根瓦の飛散などかなりの被害があった。

6月25~30日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線により6月25日から30日にかけて大雨があり、各地で100~200mmとなり、特に27日は日量50~100mm内外の降雨で各河川は増水し、かなりの被害があった。

被害状況(土木課調)

堤防決壊	2カ所	砂防流失	2カ所
" 破損	284 "	" 破損	2 "
道路埋没及び流失	5 "	橋梁破損	43 "
" 破損	208 "		

7月8~9日 梅雨前線・低気圧

日本海に北上した梅雨前線がゆっくり南下し、山陰から中部にかけて停滞した。

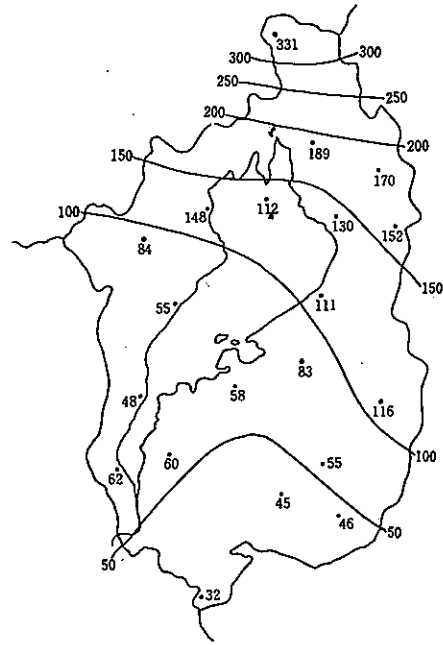
本県では、8日午後から雨が降り出し、9日昼過ぎから激しくなり、午後3時頃最も強く、彦根で1時間最大13mm、夜に入り一時雨勢衰えたが夜半過ぎ再び強くなる。この雨は北部に特に多く、8、9日、中河内で331mm・木之本で189mm・南部石山では僅かに40mm、また8~11日の4日間に中河内では480mmの豪雨になった。このため姉川・高時川・余呉川等の各河川は去る大正10年来の大増水となり橋梁流失・堤防決壊等水害が発生した。

被害状況 (土木課調)

堤防決壊	16カ所
" 破損	151 "
道路埋没・流失	12 "
" 破損	70 "
橋梁流失	9 "
" 破損	17 "
土砂埋没田畑	60反
浸水田地	10,000 "
" 家屋	数百余戸

降水量分布図

昭和5年7月8, 9日



7月31～8月1日 台風

7月27日夕刻、サイパン島の北西に台風が現われ、29日正午、小笠原諸島の東方約350kmの海上に達し、31日伊勢湾口に、夕刻津市付近に達し、中部地方松本付近で分裂し消滅した。

本県では、風は大したことはなかったが、雨が強く、山間地帯で200～250mm、鈴鹿山系で250mmを越え、平地で100～150mmであった。この豪雨で河川の増水著しく、次の被害を出した。

堤防決壊	9カ所	橋梁流失	3カ所
" 破損	72 "	" 破損	9 "
道路埋没流失	5 "	砂防破損	2 "
" 破損	83 "		

昭和6年 (1931)

7月 梅雨前線

梅雨のため、7月は悪天続きで、月中降雨のなかった日は彦根では僅かに4日、日量30mm以上の日数は4日あり、11日は73mmで月総量は326mmとなった。また湖南地方では月総量400mm内外の雨量があった。この連日の降雨続きで琵琶湖の水位は上昇し、湖畔の一部は浸水した水田があった。

●昭和7年 (1932)

7月1～2日 梅雨前線・低気圧

日本を東西に延びる梅雨前線上を、低気圧が東進したので、本県各地で大雨が降り、北小松157mmを最多とし、湖南・湖西・湖北の各地はいずれも100～150mm、鈴鹿山地は60～80mmの大雨となり、次の被害があった。

堤防決壊	10カ所	道路埋没流失	20カ所
" 破損	295 "	" 破損	154 "

橋梁破損 31カ所 港湾破損 3カ所

7月6～8日 梅雨前線・低気圧

低気圧が6日朝、日本海南部に発生し、北方に進行して8日正午北海道西岸近くで消滅した。大して強いものではなかったが、その南側は一帯に雨を降らせた。

本県では、6日夕刻より降り出し、7、8日の両日は雷も交えて各地に大雨があり、愛知川、政所方面は最も多く、200mmを突破した。このため、河川は再び出水し、次の被害があった。

堤防決壊 13カ所 道路破損 115カ所

〃 破損 333 〃 橋梁流失 1 〃

道路埋没流失 2 〃 〃 破損 11 〃

大津市石山町では人家100戸が床下2尺位浸水、その他稲田の浸水多数。

11月14～15日 台風

11月7日、ヤップ島付近に現われた台風は次第に発達し、12日ルソン島北端付近で進路を北東に向け、14日四国室戸岬の南方500kmの海上より北東進し、正午には浜松の南方300kmの海上に達して720mm(960mb)を示し、房総沖をかすめて鹿児島に去った。

本県では、14日未明より降雨となり、4時過ぎより雨勢を増し、夜に入って益々強くなり、15日正午過ぎ止んだ。この雨は山間部は100mmを越え、平地で60～100mmであった。

彦根 最大風速 NNW 15.7m/s 14日24時00分

被害状況

住家全壊 1棟 水田浸水 50町歩

非住家全半壊 多数 樹木・竹林の被害、板塀の倒壊など多数

昭和9年(1934)

6月19～20日 低気圧

6月19日、東支那海に現われた低気圧は、20日朝対馬海峡に達し、夕刻能登半島沖合を経て東北・北海道方面に去った。

本県は19日午前10時過ぎより南東の風が強く、夜8時過ぎより雨が降り出し、各地で大雨となり20日にかけて彦根では131mm、各地で80～150mmで近年珍しい大雨になった。各地方の一部で浸水家屋・稲田の浸水などがあったが、全般的には被害は割合少なかった。

9月21日 室戸台風

この台風は9月13日南洋パラオ島の南東洋上で発生し、次第に発達しながら北西に進行し、17日正午にはルソン島とヤップ島の中間に現われ、琉球列島に接近するに従い次第に勢力を増し、20日朝6時には沖縄の南東方150kmの海上に達し、中心気圧は725mm(967mb)となり、進路を北～北北東にとり、琉球列島の東側にそって北上、午後6時には九州南東洋上に達し、同日夜半には宮崎の南東方約100kmの日向灘に進んだ。この頃に至り、進路を急に北東に転じ、進行速度も著しく増大し、毎時60～70kmで室戸岬に向い、21日午前3時には足摺岬の沖合を、同6時には徳島の南西を通過—室戸岬で最低気圧684mm(911.9mb)を観測—淡路を経て、同8時には大阪の北方を、8時30分京都の北方を通過し、本県南西部に入り、8時40分北西部に達し、さらに北東進した。この頃に至り台風は漸く衰えはじめ、若狭湾・佐渡島の南方には副低気圧を誘発し、

竹生島においては、21日午前7時30分頃、既に風浪の高さ3mを越えて棧橋を流失、同8時過ぎに6m、同9時30分に至り最も激烈を極め、浪高実に7.6mに達した。

海津湖岸より今津・舟木一帯にわたる湖岸の風浪は、午前5時頃より起り、同9時前後に至り最強に達し、其の浪高は6mを越えた。この激浪のため、海津港に碇泊中の白鳥丸は横倒れとなり、また、多景島丸は浸水甚しく沈没した。

琵琶湖上の龍巻

22日午後6時の地上天気図によると、台風はすでに千島南東洋上に去り、756mm(1008mb)の低気圧が山陰沖と東海道沖にあり、近畿地方は弱い高圧部になっていた。

22日午後5時すぎに琵琶湖南部堅田沖において龍巻を観測した。

堅田観測所の報告によると、この日は朝から層積雲におおわれ、陰曇な天候であったが、正午すぎから比良山脈より南西方にわたって積雲が発生し、徐々に北東に進行中であった。午後5時頃から積雲は著しく発達した。雷鳴や降雨は起らなかったが天空は、暗黒を呈して陰悪な空模様になった。午後5時23分、湖岸より南方約75mの湖面上に龍巻が起り、最初は直径1.5m内外の漏斗状の雲が母雲より垂下すると忽にして湖面に達し、北東方に進行するにつれて益々発達し、ついに湖水を攪乱し、水を巻き上げたような状態を呈した。

漏斗状を呈した時は、その色は暗黒色を帯びていたが、発達するにつれて次第に灰白色となり、湖面に達した頃は全く白煙のような雲柱となった。同35分頃には雲柱は湖面より離脱上昇し、44分全く消滅した。この現象の発現継続時間は21分間であった。

被 害 表 (社会課調)

郡 市 別	死 者	重 傷 者	軽 傷 者	住 家		非 住 家	
				全 壊	半 壊	全 壊	半 壊
大 津 市	11 ^人	43 ^人	165 ^人	63 ^戸	105 ^戸	68 ^棟	295 ^棟
滋 賀 郡	2	3	19	105	108	193	77
栗 太 郡	21	36	187	187	197	362	284
野 洲 郡	4	12	13	120	105	366	63
甲 賀 郡	3		1	6	6	13	14
蒲 生 郡	1		63	16	25	294	180
神 崎 郡	1		11	38	108	233	308
愛 知 郡	2	1	6	19	24	142	81
犬 上 郡	1	11	16	20	57	268	196
坂 田 郡			4	5	2	43	8
東 浅 井 郡			15	11	18	36	37
伊 香 郡		2	11	12	61	55	71
高 島 郡	1	6	16	79	105	158	128
計	47	114	527	681	921	2,231	1,742

建物被害額	2,665,257円
農作物被害額	9,287,623 "
森林被害額	1,382,919 "
水産被害額	146,214 "
蚕業被害額	98,893 "

船舶被害額	45,770円
電柱被害額	147,237 "
塀・石垣・鳥居・燈籠被害額	60,840 "
岸・港湾・波止場被害額	121,800 "
井堰・水路・その他被害額	128,306 "
計	14,084,859 "

昭和10年(1935)

6月28~30日 梅雨前線・低気圧

23日の朝、上海南方に進出した752mm(1003mb)の低気圧は、24日朝瀬戸内海を経て大阪湾に入り、更に近畿地方を経て東進した。このため各地に大雨を降らせた。

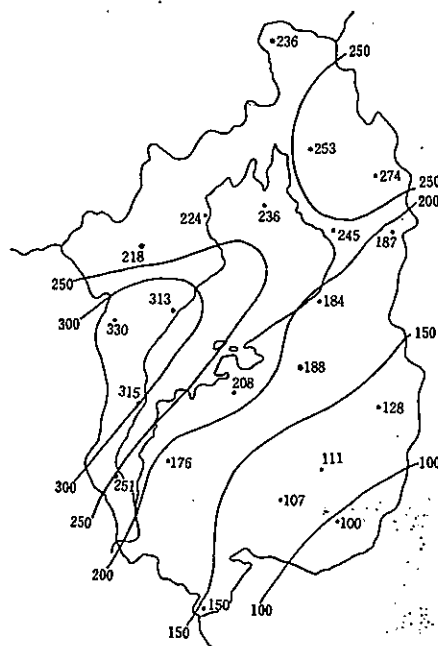
また、27日朝、東支那海に現われ北東に進み28日朝日本海中部に入った748mm(997mb)の低気圧は、其の勢力が比較的強く雷雨を伴ない、各地で豪雨を降らした。

この影響で県下の各河川は増水し、氾濫を起すところも出た。被害の最も多い地方は、大津市の一部及び滋賀郡で、被害総額は300万円に達した。

被害状況

死者	1人
負傷者	8 "
行方不明	1 "
住家全壊流失	32戸
" 半壊	59 "
" 床上浸水	207 "
" 床下浸水	2,733 "
非住家被害	654棟
田畑流埋没	140町
" 浸冠水	986 "
道路破損	337カ所
橋梁流失	49 "
堤防決壊	592 "
山崩れ	160町

降水量分布図
昭和10年6月27~30日



8月9~11日 台風

台風は、9日朝東支那海に入り、10日朝済洲島付近に達し、11日瀬戸内より東海道付近に進んだ。

このため、本県は大雨となった。雨量は200mm以上の最多地帯は大津市付近、100mm以下の寡雨地帯は、高島郡北部より南東にわたる一帯で、鈴鹿山地も割合少なかった。

各地の総降水量mm(9,10日)

彦根	79	大津	222
八幡	135	今津	108

被害状況

家屋半壊	2戸	堤防決壊	7ヵ所
" 浸水	260 "	" 流失	1 "
田 流失	14反	道路破損	20 "
" 浸水	4,110 "	" 埋没	1 "

昭和 11 年 (1936)

7月1～2日 梅雨前線・低気圧

1日に上海北方にあった低気圧は、2日朝6時朝鮮西方海上に進み、前線が対島海峡より東海道沖に伸びていた。

本県では、1日午後から雨が降り出し、2日は終日止まず、3日未明まで降りつづいた。このため、各河川は著しく増水し、滋賀郡真野川は堤防決壊し、約30町歩の稲田が埋没、家屋・土蔵の破壊など相当の被害があった。

各地の総降水量 mm (1, 2日)

彦根	104	大津	69	今津	70
八幡	100	堅田	145		

7月6～7日 梅雨前線・低気圧

6日朝6時、東支那海にあった低気圧が東進し、夕刻四国沖に達し、前線は東支那海より九州を横切り、四国沖より八丈島付近に伸びていた。

本県では、6日未明より7日未明ごろまで雨が降り、各地で40～80 mm を観測した。このため河川は出水、または増水し、琵琶湖の水位は上昇、湖岸の稲田は浸水し、神崎郡山上村では土砂が流出し、死傷者を出すなど相当な被害があった。

各地の総降水量 mm (6, 7日)

彦根	49	大津	76
八幡	78	今津	63

9月1日 梅雨前線

正午過ぎより夕方5時頃にわたり殆んど県内全般に発雷し、湖南各地には大雨を降らせ、滋賀郡小松村以南坂本付近一帯、甲賀郡水口町付近は豪雨を伴ない、河川は増水・氾濫し、稲田の浸水・土砂の流失した所もあった。

昭和 12 年 (1937)

8月6日 梅雨前線

比良山付近に強い雷雨があり、湖西山岳地帯では大雨で、付近の河川は急に出水し、木戸川では崖崩れを起こし、河流を一時阻止し堤防数箇所を決壊、河川は氾濫して付近の田畑に流れ込み、水田約5町歩を埋没し、その他にも被害を及ぼした。

昭和 13 年 (1938)

6月24～25日 梅雨前線・低気圧

日本付近を東西に伸びる梅雨前線上を低気圧が東進した。

本県では24日朝9時すぎから雨が降り出し、25日夜半まで続き、25日正午すぎには雷鳴を伴な

った大雨となり、河川は出水し、所々被害を出した。

彦根 総降水量 98mm 24, 25日

政所 " 141mm 24, 25日

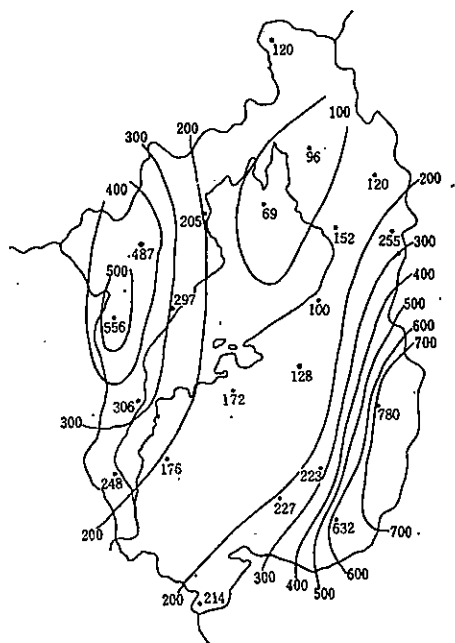
8月2～3日 梅雨前線・低気圧

7月31日高気圧は、カムチャッカ半島及び千島付近に停滞し、低気圧は九州南西海上及び上海付近にあって東北東に進行し、あたかも梅雨期における気圧配置となった。この低気圧は分裂し、2日朝6時には、日本海中部・土佐沖・九州南西海上にあって、各地に豪雨を降らせた。

本県では、低気圧の東進に伴ない、8月1日夜半過ぎから雨が降り出し、終日止まず、午後になって東南東の風が吹きつりのり、風速は5～9m/sであった。雨量は、鈴鹿山脈で800mm近く、比良山地では500mm余りの豪雨であったが、平野部では至って少なく、100mm内外であった。なお1日の日雨量は彦根は42mmであるが、政所301mmと非常に多かった。

降水量分布図

昭和13年7月30～8月4日



被害状況

死 者	6人
負 傷 者	1 "
住家全壊	7戸
" 半壊	17 "
" 流失	1 "
" 床上浸水	502 "
" 床下浸水	1,360 "
非住家被害	777棟
道 路	212カ所
橋 梁	80 "
堤 防	138 "
田 浸 水	2,383町歩
" 埋 没	107 "

その他農作物被害大。

昭和16年(1941)

4月6日 低気圧

4日から5日にかけて、日本付近を深い気圧の谷がとおり、低気圧が南岸を東進し、6日関東沖で発達して744mm(992mb)となった。一方揚子江下流域には776mm(1033mb)の高気圧があって東に張り出し西高東低の冬型気圧配置になった。

本県では6日朝から北西の季節風が強まり、琵琶湖上は風波が高く、ボートの転覆事故があった。これが“遠くかすむは彦根城……”と琵琶湖哀歌に歌われた四高生11名の遭難事故である。

彦根 最大風速 NNW 11.3m/s 6日15時00分

" 最大瞬間風速 NNW 16.2m/s 6日14時48分

6月25～29日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線の活動によって、6月25～29日まで大雨が降り、最多域は湖南大津付近で200～280

mm、湖北方面は100mm前後で割合少なかった。

彦根 総降水量 188mm 25～29日

大津 " 276mm 25～29日

降水量分布図
昭和16年6月25～29日

被害状況

行方不明 1人 耕地浸水 6,500町歩

負傷者 1 " " 流失 70 "

家屋倒壊 30戸 橋梁流失 11カ所

" 流失 8 " 堤防決壊 6 "

" 床上浸水 1,500 " 鉄軌道被害 2 "

" 床下浸水 3,238 "

大津市山上町で、三井寺法明院北谷川の氾濫で山津波が起こり、人家7戸が流失している。

8月15日 台風

3日ヤルート島西方洋上に発生した台風は、12日朝ラサ島東方海上に達し、ここで北に転向した。15日朝室戸岬北西約20km付近に上陸し、上陸とともに弱まり、瀬戸内より岡山付近を経て正午米子付近に達し、730mm(973mb)となり、日本海を経て津軽海峡に去った。

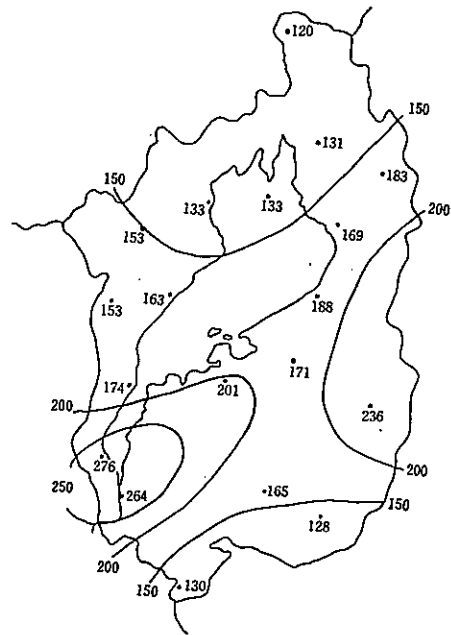
本県では14日朝から雨が降り出し、15日朝から風雨が強まり多少の被害があった。

彦根 最大風速 ESE 13.7m/s 15日04時00分

最大瞬間風速 ESE 30.6m/s 15日06時08分

総降水量 89mm 13～16日

土山 " 235mm 13～16日



被害状況

近江鉄道は宇治川の送電線切断のため一時不通。

蒲生郡西大路村薬師堂の大木が倒れて宇治川電気配電線を切断。

蒲生郡日野町で民家1棟半壊、警防団見張所4カ所大破。

昭和17年(1942)

6月18～19日 梅雨前線

18日早朝より降雨強く、19日まで続き、総降水量は100mmを越す所があった。

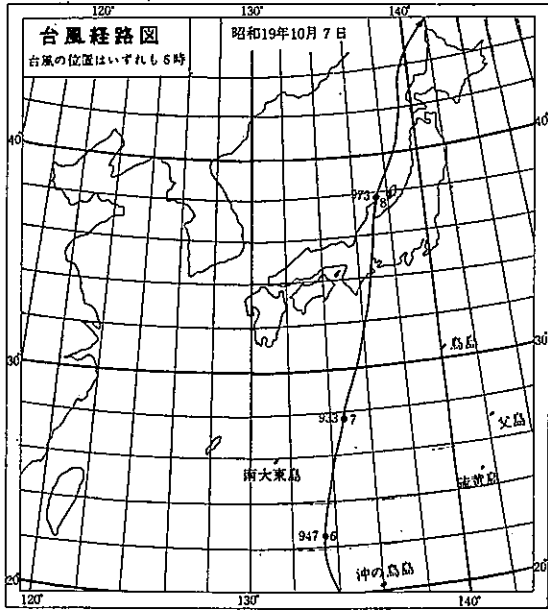
このため、野洲郡祇王村家棟川が氾濫し、浸水・流失家屋があった。

昭和19年(1944)

10月6～8日 台風

4日沖ノ鳥島南方洋上で発生した台風は、7日朝6時潮岬南方海上500～600km付近で、中心気圧680mm(907mb)に発達し、7日夕刻熊野灘にせまり、夜半渥美湾から濃美平野に上陸し、各地に被害をもたらし、8日朝6時には能登半島に達し、日本海を北上した。

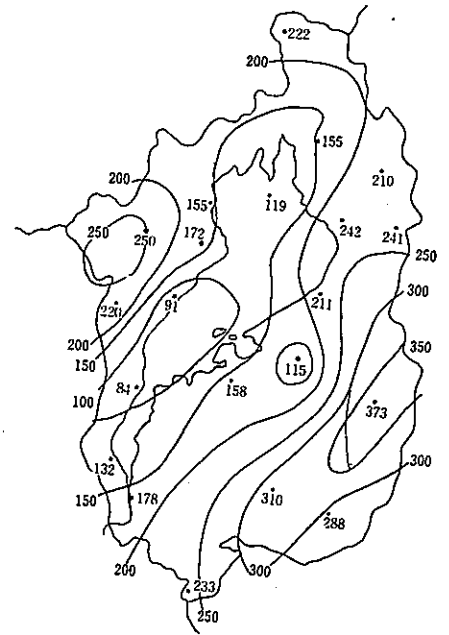
本県では6日夜半すぎから雨が降り出し、7日は午後には豪雨となり、政所では7日の日量334mm、水口271mmを観測した。しかし北小松は59mm、堅田66mmと少なく、雨量分布に大きな違いが



現われた。

彦根 最低気圧 978.5mb 8日00時30分
 最大風速 N 15.7 m/s 7日19時20分
 最大瞬間風速 N 20.5 m/s
 7日19時29分
 総降水量 211 mm 6～8日
 政所 " 373 mm 6～8日

降水量分布図
 昭和19年10月6～8日



被害状況

死者	2人	田畑流埋没	232町
負傷者	2 "	浸冠水	448 "
住家全壊流失	31戸	道路損壊	120ヵ所
" 半壊	27 "	橋梁流失	73 "
" 床上浸水	1,028 "	堤防決壊	88 "
" 床下浸水	4,068 "		

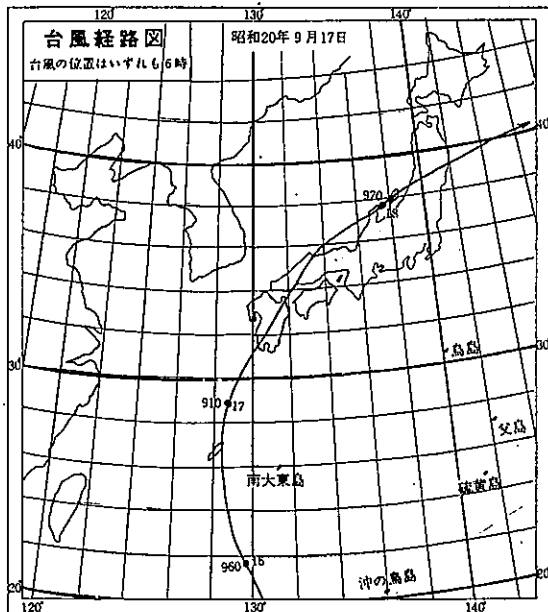
昭和20年(1945)

9月17～18日 枕崎台風

12日、マリヤナ諸島で発生した台風は、16日ラサ島南西方に進み、17日14時には九州南端に達し、枕崎に上陸、次第に衰弱しながら瀬戸内に入り、中国地方を斜断して日本海に入り、奥羽地方へ進んだ。

本県では、7日夜に入って南東の風雨が強まり、夜半過ぎが最も強く、最大風速は15 m/s を越えた。雨量は鈴鹿山系では190 mm を突破したが、平地は50 mm までで大津付近は10 mm 以下の小雨であった。

彦根 最低気圧 981.0mb 18日03時00分
 最大風速 SE 15.7 m/s
 18日01時00分



最大瞬間風速 S 23.0^{m/s}

18日06時04分

総降水量 62^{mm} 16~18日

政所 " 191^{mm} 16~18日

被害状況

家屋全壊 12戸

" 半壊 2 "

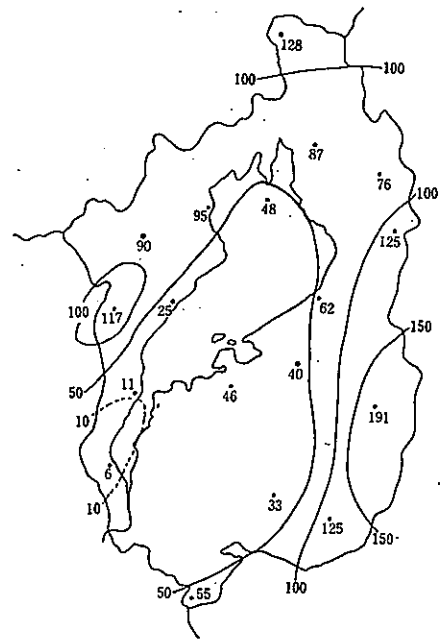
" 床上浸水 25 "

電柱・高塀の倒伏

農作物の被害相当あり

降水量分布図

昭和20年9月16~18日



10月10日 前線・阿久根台風

4日サイパン東方洋上に発生した台風は、9日朝6時には沖縄東方60kmに進み、次第に発達しながら北進し、10日14時頃九州阿久根西方に上陸した。その後、九州を北東に横断して周防灘から広島北方をとおり、11日松江東方から日本海に抜けた。この頃、日本付近にあった前線と、台風の影響により各地に大雨を降らせ、九州・中国・四国で甚大な被害があった。

本県では、月始めから毎日雨が降り、2日から10日までに平地で200~300mm、山地では300~450mmの大雨が降り、水害が発生した。

彦根 最大風速 S E 8.3^{m/s} 10日22時00分

最大瞬間風速 S E 18.6^{m/s} 10日20時55分

総降水量 70^{mm} 9, 10日

市場 " 154^{mm} 9, 10日

被害状況

家屋床下浸水 6戸

堤防決壊 5カ所 (姉川・余呉川・百瀬川等)

田畑流失 11町歩

" 浸水 1,296 "

道路損壊 4カ所

昭和21年 (1946)

4月24日 低気圧・前線

日本海を北東に進んだ低気圧より南西に伸びる寒冷前線が南下して停滞したので、雷を伴う大雨となった。比良山地から東に伸びる地域が大雨の中心で最多は240mmに達した。この大部分は24日15時~25日3時の約12時間に降っている。これは季節外れの珍しい大雨である。

各地の総降水量 mm (23, 24日)

彦根	156	木之本	62
大津	105	坊	132

7月29~30日 台風

23日サイバン島北東洋上に発生した台風は、北上し、29日宮崎沖から豊後水道を通過した。30日には高知・広島付近に副低気圧が発生して衰弱し、午後米子から日本海に去った。衰弱が早かったので被害は少なく、全般的に稲作の虫害を除去し、通過後夏型の好天を誘致し、「豊作型台風」ともいわれた。

彦根	最低気圧	993.7mb	30日15時00分
	最大風速	ESE 13.8 m/s	30日10時50分
	総降水量	10 mm	29, 30日
市場	"	250 mm	29, 30日

昭和22年 (1947)

9月13~14日 台風

11日にマリアナ群島に発生した台風は、次第に北上して日本に接近し、14日から15日にかけて関東南部をかすめて鹿島灘に抜けた。

本県では、13日から14日にかけて各地に150~200 mm 、最多地は土山で230 mm の大雨が降った。

被害状況

家屋倒壊	1戸	(甲賀郡)
床下浸水	19 "	(甲賀・蒲生郡)
水田浸水	27町歩	(野洲郡)
畑浸水	500 "	(蒲生郡)
" 流失		(野洲郡守山町)
橋梁流失	4カ所	
堤防決壊	100 m	(高島郡)
山崩れ		(草津線、柘植一大原市場)

昭和23年 (1948)

7月23~24日 梅雨前線

梅雨前線の活動により、19日から降ったり止んだりした雨は、23日夜から24日にかけて強くなり、各地で水害が発生し、特に湖北では200 mm を突破し被害は甚大であった。

被害状況

被害甚大区域—伊香郡塩津村・高島郡地方

堤防決壊	47カ所	橋梁流失	7カ所
道路浸水	861 "	家屋床上浸水	102戸
" 損壊	1 "	" 床下浸水	760 "
山崩れ	12 "	田畑浸水	1,494町歩 (内松原干拓田 480反)

24日14時頃、竹生島宝巖寺本坊下の石垣延長35 m 、高さ6 m が崩壊し、売店従業員2名が負傷。

昭和 24 年 (1949)

6月18~20日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線の活動により、湖国一帯は18日夕方から19、20日にかけて近年にない豪雨になり、彦根市松原干拓田や湖岸地帯は、田畑が一時水浸しとなったが被害は少なかった。

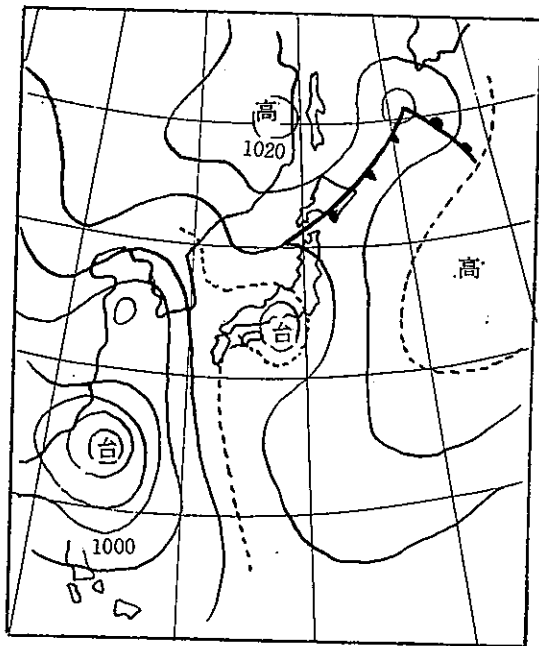
各地の総降水量mm (18~20日)

彦根	90	堅田	147
木之本	82	大津	172
市場	138	政所	128

7月5日 梅雨前線・低気圧

5日、発達した低気圧が東支那海に現われ、梅雨前線上を東進したので、県下では夜から風雨が強まり、彦根で最大風速南東12.0m/s・最大瞬間風速南東19.0m/sを、降水量は45mmを観測した。長浜では板塀・看板が吹き飛ばされ、犬上郡下では電柱の折損などがあり、彦根・多賀間の電話不通となる等の被害があった。

地上天気図
昭和24年7月28日21時



7月29日 ヘスター台風(4906)

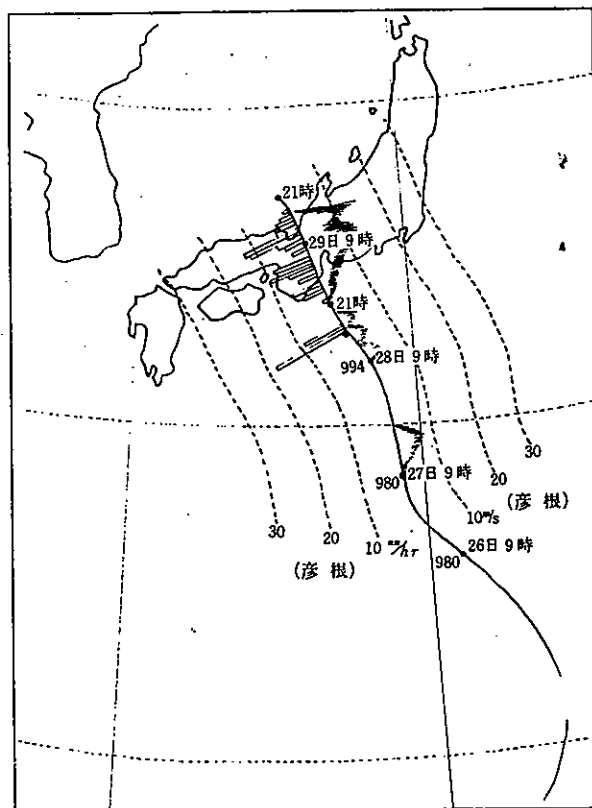
23日にマリアナ西方洋上で発生し、26日午前中には父島・硫黄島間を通り、29日未明に三重県志摩半島に上陸し、その後本県に入り、正午過ぎ若狭湾に抜け、31日早朝、日本海で消滅した。この台風は日本に接近するとともに急速に衰弱したが、29日午後から31日までの3日間、京阪神を中心とした西日本一帯に大雨が降り、甚大な被害が発生した。

彦根地方では28日16時過ぎから小雨が降り出し、2時間後には並雨と雷を交え20時過ぎまで続いた。29日5時頃より風雨強まり、13時頃には南寄り15m/s内外の暴風雨となり、17時頃から弱まった。雨量は県の北西部で250mmを突破した。野洲川上流では豪雨があり被害も甚大で、安曇川・大戸川の各流域でも被害があった。

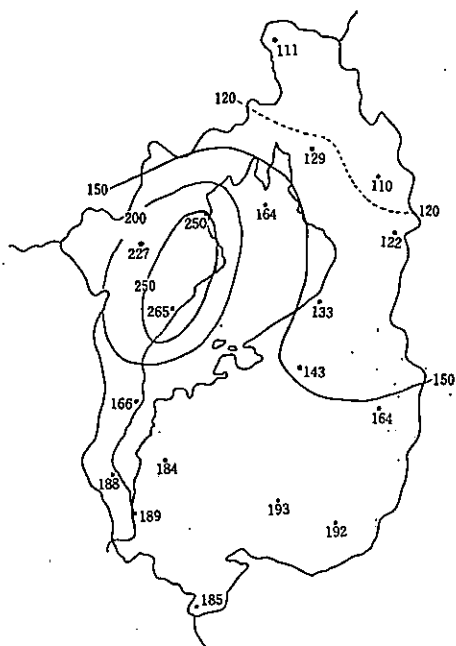
彦根	最低気圧	1005.7 mb	29日10時00分
	最大風速	SSE 14.2m/s	29日13時10分
	最大瞬間風速	SSE 16.9m/s	29日13時11分
	総降水量	133mm	28~30日
北小松	"	265mm	28~30日

ヘスター台風経路図

彦根の気象変化図



降水量分布図
昭和24年7月28～30日



被害状況

死者	1人
負傷者	1 "
住家全壊流失	4戸
住家半壊	3 "
住家床上浸水	160 "
" 床下浸水	1,344 "
田畑流埋没	314町歩
" 浸冠水	4,474 "
道路損壊	114カ所
橋梁流失	50 "
堤防決壊	72 "
山崩れ	68 "
9月22～23日	前線・低気圧

22日から23日にかけて各地で大雨が降り、特

に鈴鹿山系では140 mmを越える大雨になった。

伊香郡古保利村では水田5町歩が稲丈を没する泥海と化し、また堤防決壊のため水田約1町歩が埋没し収穫皆無となり、その他、甘藷畑1町歩が全滅した。

昭和 25 年 (1950)

6月20～21日 梅雨前線

梅雨前線のため、20日朝から大雨が降り、雨量は伊吹山付近で 200 mm、大津付近で 100 mmに及び、姉川は増水、長浜市内では床上浸水 1 米に達した所もあり、各地に水害が発生した。

被害状況

床上浸水 600戸 田畑冠水 数千反
 床下浸水 200 "

7月28～30日 台風(5009)・前線

熱帯低気圧が23日頃南西諸島南部で発生し、北東進して27日には台風9号になった。しかし、九州近傍に来てから勢力が弱くなり、熱帯低気圧となった。

本県では、27日午後から雨が降り出し、30日にかけて鈴鹿山系では特に多く、300 mmを越す豪雨になった。

被害状況

(甲賀・愛知・犬上・坂田・神崎の5郡下)

家屋床上浸水 15戸 道路損壊 9カ所
 " 床下浸水 108 " 橋梁流失 7 "
 田畑流失・浸水・冠水 667町歩 堤防損壊 16 "

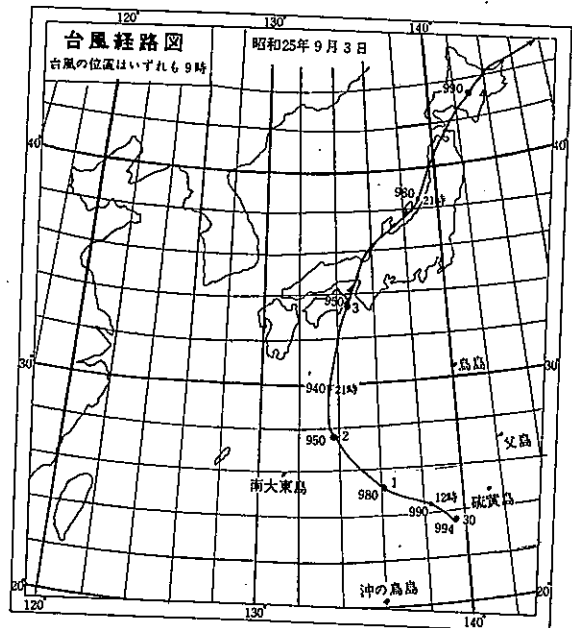
8月3～4日 雷雨

3日夜から4日朝にかけて湖北・湖東・湖南方面に大雷雨あり、水害が発生した。

床上浸水 15戸 (八木荘村・宇曾川上流決壊による。)
 床下浸水 108 " (八木荘村・北比都佐村・西櫻谷村・高島郡下)
 田埋没・冠水 311町歩 (同上)
 堤防損壊 2カ所
 道路損壊 1 "

9月3日 ジェーン台風(5028)

8月30日硫黄島南西洋上で発生し、9月1日頃から次第に発達し、2日9時には四国南方約 500 kmの沖に進み、中心気圧 950 mbとなり、ますます発達しながら室戸岬を目標して北上した。3日9時には室戸岬の北東方15 kmの海上に達し、淡路島を通り、大阪湾に出た。その後60 kmの速度で大阪湾を通り、神戸市垂水付近に上陸、北北東進して舞鶴市付近を経て若狭湾に入った。このため、大阪・神戸・京都は台風の中に入り、3日早朝から暴風雨となり、大阪では最大瞬間風速44 m/sを記録した。この台風で阪神を中心に、近畿・四国・中国東部など西日本

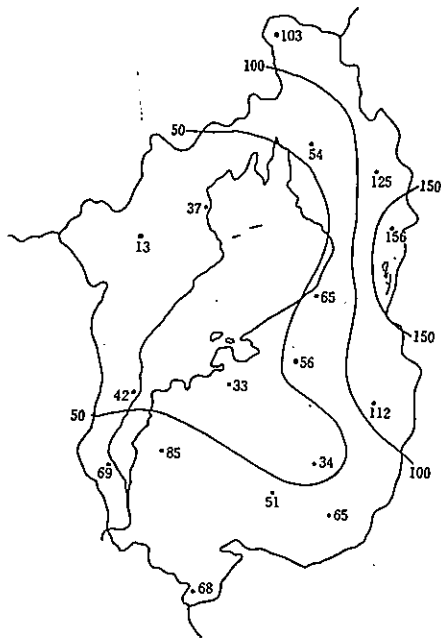


一帯は住家・稲作に多大の被害を受けた。

本県では、3日朝から南東の風が次第に強まり、昼頃から暴風雨になり、最大は彦根で南東27.8 m/s、最大瞬間は南東42.5 m/sを観測した。これは昭和9年の室戸台風に次ぐ強風であった。しかし雨量は少なく、平地で30~50 mm位であったが、東部山岳地帯では100 mmを越えた所もあった。この暴風雨は3日夕刻頃から次第におさまった。

県下で死者7人をはじめ別表のような大被害をうけ、また、近鉄尼子駅付近では暴風雨中に近鉄バスと電車が衝突し、重軽傷者10人を出す惨事もあった。

降水量分布図
昭和25年9月2~4日



	彦 根	春 照
最低気圧	984.8 mb	989.6 mb
	3日13時09分	3日13時32分
最大風速	S E 27.8 m/s	E S E 23.1 m/s
	3日13時20分	3日12時30分
最大瞬間風速	S E 42.5 m/s	S E 39.5 m/s
	3日12時35分	3日12時14分
総降水量	65 mm	156 mm
	2~4日	2~4日

被害状況

死者	7人	住家半壊	854戸
負傷者	76 "	住家床上浸水	11 "
行方不明	1 "	住家床下浸水	41 "
住家全壊流失	297戸	非住家被害	4,954棟

昭和26年(1951)

7月1~2日 台風(5106)

6月26日カロリン北西洋上から北上した台風は沖縄付近を通って北上し、7月1日九州に接近し、同夜、四国に上陸、四国を横断して2日9時ごろには神戸付近に達し、近畿地方を横断、衰弱して分裂し、その一部は関東地方に進んだ。

彦根 最低気圧	996.0 mb	2日12時45分
最大風速	N N W 15.8 m/s	2日14時20分
最大瞬間風速	N N W 16.0 m/s	2日14時10分
総降水量	46 mm	1, 2日
北小松 "	110 mm	1, 2日

本県では、特記する被害はなかった。

7月11~16日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線を低気圧が次々と東進したので各地で豪雨になった。本県は伊吹山系から南西にのび、湖西北小松一帯が最多雨域で、鈴鹿山系土山付近が寡雨域という珍しい雨量分布を示し、大きな水害をもたらした。

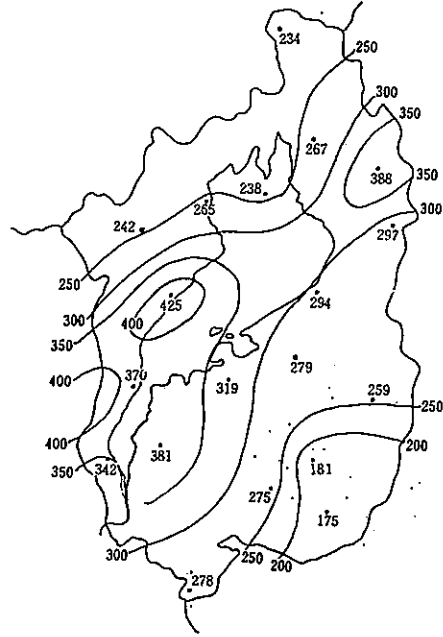
彦根 総降水量 294mm (7月7~17日)

北小松 " 425mm (7月7~17日)

被害状況

死者	3人
負傷者	1 "
住家全壊流失	1戸
" 半壊	12 "
" 床上浸水	13 "
" 床下浸水	412 "
田畑流埋没	135.6町歩
" 浸冠水	2,218.8 "
道路損壊	63カ所
橋梁流失	26 "
堤防決壊	70 "
山崩れ	4 "

降水量分布図
昭和26年7月7~17日



10月14~15日 台風(5115)

10月9日マリアナ諸島西方海上に熱帯低気圧が発生、次第に発達しながら北西進し、11日15時には中心示度 948 mb であったものが、12日15時には 925 mb となり、1日に23 mb 低下して非常に強い台風になった。14日6時には沖縄の北西80km付近を通り、同日19時頃鹿児島県西岸串木野付近に上陸し、時速80km位の速度で九州を縦断、周防灘から山口県防府市付近に上陸、中国を斜断して15日早朝浜田の西から山陰沖に出て、能登半島を通り、奥羽地方に進んだ。

本県では、台風が石垣島の東方海上にある13日午後から雨が降り、平地30~50mm、山地50~100mmの雨量があった。

彦根 最低気圧	981.0mb	15日07時30分
最大風速	S E 18.0m/s	15日02時40分
最大瞬間風速	S E 27.5m/s	15日02時39分
総降水量	29mm	13~15日
市場 " "	110mm	13~15日

被害状況

負傷者	2人	建物一部破損	70戸
建物全壊	6戸	非住家被害	20棟
" 半壊	19 "		

昭和27年(1952)

6月22~23日 梅雨前線・台風(5202)

6月20日ルソン島東方洋上に発生した台風は23日沖縄の西方海上に、6時頃名瀬の西方約50km

海上に達し、衰弱して熱帯低気圧となった。この頃本邦南岸に梅雨前線があり、この前線上を熱帯低気圧が北東進したので各地で大雨が降り、かなりの被害があった。

彦根	最低気圧	993.1 mb	23日 23時07分
	最大風速	NW 11.3 m/s	23日 24時00分
	最大瞬間風速	E 17.8 m/s	23日 23時00分
	総雨量	118 mm	22, 23日
多羅尾	"	207 mm	22, 23日

被害状況

住家半壊	1戸	道路損壊	3カ所
" 床上浸水	6 "	橋梁流失	7 "
" 床下浸水	319 "	堤防決壊	20 "
田畑流埋没	31.3町歩	山崩れ	4 "
" 浸冠水	3,590.0 "		

7月2日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線の活動により大雨が降り、各地で堤防決壊、家屋浸水などの被害があった。

7月10日 梅雨前線

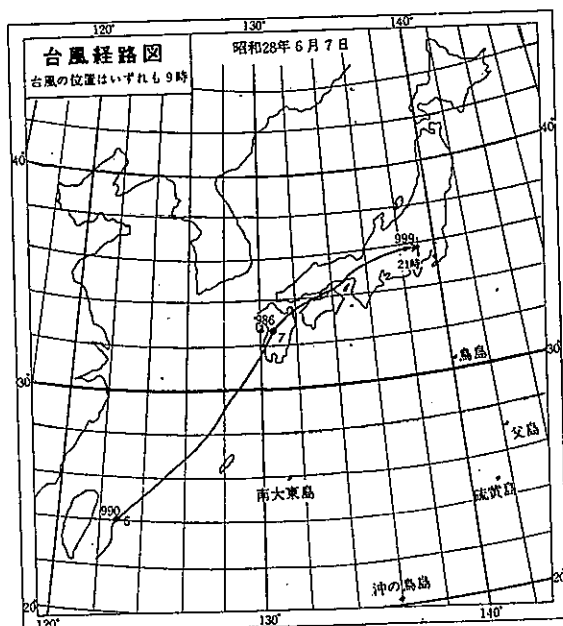
梅雨前線の活動により大雨が降り、次の被害があった。

被害状況

住家全壊流失	3戸	田畑浸冠水	3,999町歩
" 床上浸水	4 "	道路損壊	10カ所
" 床下浸水	1,024 "	橋梁流失	2 "
田畑流埋没	2町歩	堤防決壊	8 "

7月18~19日 梅雨前線

梅雨前線の活動により再び大雨になり、18日夜から19日朝までの雨量は、高島郡で100 mmを越え、湖西地方で床上浸水、堤防一部決壊などの被害があった。



昭和28年(1953)

6月7~8日 梅雨前線・台風(5302)
台湾東方海上より北東進した台風2号は、九州に上陸し、熊本、大分を経て瀬戸内に入り、神戸付近から滋賀県北部を経て関東西部で消滅した。

本県では、4日から雨が降り出し、8日までに県下各地で100~200mm、湖西山岳地帯では200~300mmの大雨があった。

彦根	最低気圧	994.4 mb	7日 17時15分
	最大風速	SSW 14.0 m/s	

7日 19時40分

最大瞬間風速 S S W 20.5m/s

7日19時38分

降水量分布図
昭和28年6月4～8日

総降水量 167mm 4～8日

北小松 " 277mm 4～8日

被害状況

住家全壊流失 2戸

" 床下浸水 100 "

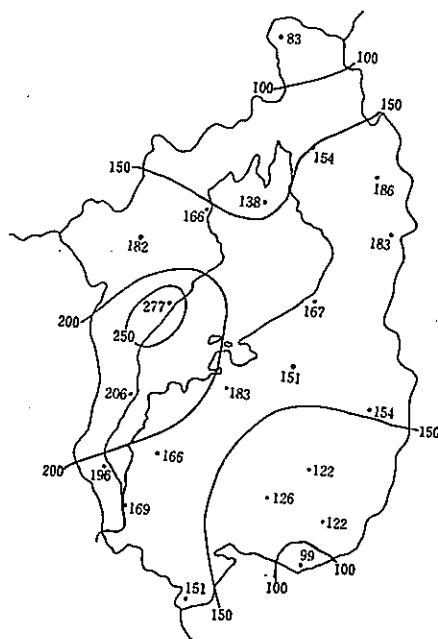
田畑流埋没 2町歩

" 浸冠水 894 "

道路損壊 8カ所

堤防決壊 3 "

山崩れ 6 "



7月5～8日 梅雨前線・台風(5304)

7月2日揚子江下流域に低気圧が発生し、東進するにしたがって本邦南方洋上の前線はこの低気圧から東に伸る温暖前線となり次第に北上し、3日より本州中部を横断して停滞した。5日台風4号が華中に達するに及んでこの前線は台風より伸びる温暖前線となり各地で雷雨や大雨が降った。

本県は、2日夜半ごろから雨が降り出し、8日夕刻まで降ったり止んだりで各地で大雨になり、降雨量は南部で140～200mm、北部は200～300mm、吉槻は400mmを突破してかなりの被害があった。

被害状況

死者 1人 道路損壊 2カ所

住家全壊流失 1戸 橋梁流失 1 "

" 床下浸水 137 " 堤防決壊 2 "

田畑流埋没 1町歩 山崩れ 3 "

" 浸冠水 2,544 "

7月19～22日 梅雨前線

7月16日から梅雨前線の活動が再び活発になり、前線上を低気圧が東進したので連日大雨が降り、24日早朝まで降ったり止んだり、各地で150～200mmの大雨になり被害があった。

被害状況

住家床上浸水 1戸 橋梁流失 1カ所

" 床下浸水 169 " 堤防決壊 3 "

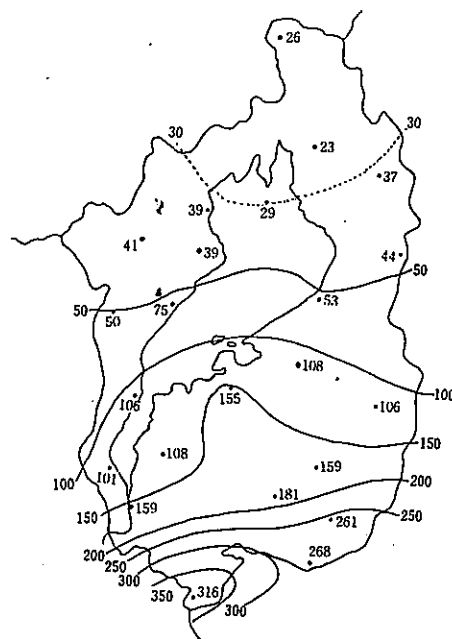
田畑浸冠水 786町歩 山崩れ 2 "

道路損壊 2カ所

8月14～15日 多羅尾地方の豪雨・寒冷前線
(南山城の豪雨)

降水量分布図
昭和28年8月14, 15日

台風7号が沖縄南方約600kmの洋上において北西に進み、太平洋高気圧が本邦南岸沿いに楔状に張り出し、九州南部まで達していた。一方低気圧が樺太からオホーツク海に進み、13日朝頃からそれに伴う寒冷前線が南下し、14日には奥羽南部から新潟・長野・近畿北部の線に停滞した。この前線付近にあたった各地では豪雨となって東北各地では多くの被害があった。15日にはさらに南下して関東南部・東海道・山陰東部の線に16日まで停滞した。京都府南部・滋賀県南・三重県・奈良県では14日夜から15日朝にかけて雷を伴う大豪雨となった。京都府湯船村で428mmの雨量があったのを最高に各地で相当な雨量が観測され、同府井手町では大正池堤防の決壊によって680戸が流され、死者140名を出した。



本県での状況

14日夜半から翌15日朝5時頃まで、多羅尾村を中心として甲賀郡南東部の山間部一帯は、300mmを越す雷雨をまじえた豪雨となり、特に15日0時頃から3時頃までが最も強く、時間雨量は水口で53mm、大原では60mmを測り、(雨量は警察の観測値)大戸川・杣川・信楽川・野洲川が増水氾濫した。

多羅尾村では15日払暁、河川は急速に増水し、随所に山津波が起り、立木もろとも岩石・土砂が崩壊し、家屋・田畑を埋没あるいは濁流で押し流し、道路は寸断、谷間はそのまま大川となって、避難の予猶すもなく、一瞬のうちに死者44名、全半壊流失戸数が全村の4割という甚大な被害をもたらした。

大戸川では、上流信楽町一帯で285mm以上の降雨があり、同川の危険水位3mを突破し、最高期(8時頃)は7mに達し、瀬田川に至る全流路にわたり各所で氾濫・決壊し、橋梁の流失と、家屋の倒壊・流失等の被害があった。

杣川では、平素水位60cm程度のものが、急激に増水し、危険水位1mを越えて3mに達し、堤防の決壊・橋梁の流失を生じ、油日村・大原村・貴生川町・甲南町・水口町の建物・田畑及び同地方の交通に被害をもたらした。

野洲川上流では、危険水位2mに対して、最高水位2.85mに達し、一時警戒を叫ばれたが、上流野洲川ダムの機能もあり、下流において内堤防決壊1カ所があったのみで危険を脱した。

彦根	総雨量	53mm	14, 15日
土山	"	261mm	14, 15日
多羅尾	"	316mm	14, 15日(推定値)

救護状況

県は15日早朝水害発生の報告をうけるや、直ちに水害対策本部を設け、救助活動に入った。

◎救援物資

被害の最も甚大であった多羅尾村は、山間僻地で一切の交通通信が杜絶し、孤立化したので、食糧その他の補給は、消防団員等により難路を克服し歩行運搬を行なった。主な救援物資は、次のとおりである。

精	米	140俵	精	麦	36斗			
醬	油	10斗	味	噌	80貫			
漬	物	1桶	野	菜	926貫			
缶	詰	195かん	毛	布	380枚			
衣	料	品	5,026点	ロ	ソ	ク	1,116箱	
上	敷	・	むしろ	常	備	薬	34袋	
家	庭	用	品	1,230点	日	用	品	2,054点

◎避難者収容と医療

救助され、または避難した罹災者は、小学校・公民館等に収容され、負傷者は医務班により現場で応急手当を施し、重傷者は甲賀病院に移送された。県では大津日赤病院・甲賀病院に医務班の出動を要請し、水口保健所からは防疫班を編成し、それぞれ信楽町・多羅尾村に派した。

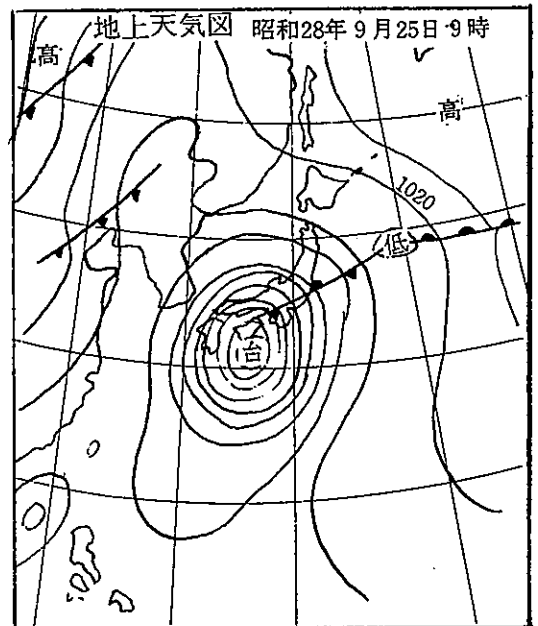
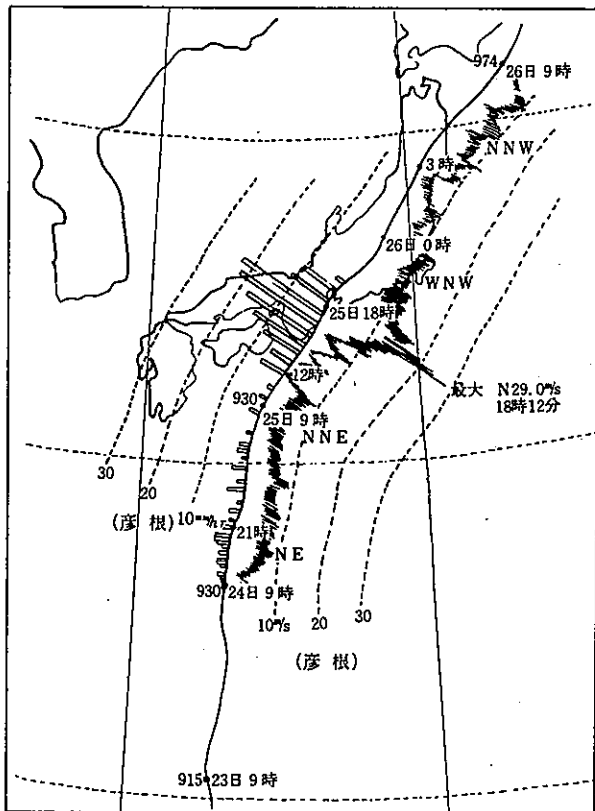
被 害 表 (水害対策本部調)

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
人の被害			冠 水	73,448反	207,352
死 者	45人		畑作被害		29,750
負 傷 者	143 "		そ 菜	1,324反	9,830
建物被害		103,660	甘 藷	1,856 "	12,322
住家全壊	67戸	40,200	茶	378 "	7,430
" 流失	14 "	8,400	た ば こ	16 "	168
" 半壊	159 "	47,700	開拓被害		7,032
" 床上浸水	736 "	7,360	営農資材		5,231
" 床下浸水	2,165 "		建物被害		1,801
土木被害		980,928	畜産被害		8,090
河 川	174カ所	534,727	家 畜		932
砂 防	35 "	63,650	畜 舎		5,566
道 路	227 "	267,557	飼 料		1,592
橋 梁	115 "	114,994	蚕糸被害		2,034
耕地面積		608,063	水産被害		1,388
農 地	5,503反	255,309	商工被害		202,500
農業用施設	161カ所	352,754	窯元被害		30,000
山林被害		850,060	原材料被害		120,000
山地施設		155,660	商品その他		52,500
森 林		694,400	そ の 他		17,300
水稻被害		258,329			
流失埋没	3,386反	50,977	合 計		3,069,134

9月25日 13号台風(5313)

16日トラック島南東方約1500kmの洋上に弱い熱帯低気圧が発生し、18日グアム島の南東方約450kmの洋上に達した。この時の中心気圧は998mbで、南西・南東象限で最大風速30m/sに達し、25m/sの暴風半径は北東・南東象限で70km、北西象限では35kmであった。ここで台風13号になり、Tessと命名された。20日9時ごろからは北西に向きを変えて22日9時ごろまでは平均約20km/hの速さで進んだ。22日午後になって急速に発達し23日13時22分には897mb、最大風速75m/sとなり、この頃から23日3時頃までが最盛期で25m/sの暴風半径は約300kmに及んだ。24日9時には南大東島の東方約150kmの洋上を通り、25日3時には北緯30度線に達した。この辺からやや衰弱しつつ北々東に速さを増しながら進み、同日15時には潮岬の東方20kmを通過した。この時は中心示度、930mb、最大風速40m/s、25m/sの暴風半径180kmとなっている。紀伊半島ぞいに熊野灘を北々東進し17時過ぎに志摩半島に上陸した。22時には長野と軽井沢の間をとおり、26日6時には宮古と八戸の間から三陸沖に出た。本州上陸後は急速に衰弱し、中心示度は25日18時946mb 21時974mb、26日0時976mbと変化している。この台風による被害は全都道府県に及び、中でも愛知・三重・京都・滋賀・大阪・福井の各府県では甚大な損害をうけた。

13号台風経路図
彦根の気象変化図



台風13号の主な特徴

- 北緯20度で急激に発達した。北上した距離が長かった。
- 台風の北西側の暴風区域が広がった。このため大阪では雨を伴った北風の強風が7時間も吹きつづき、建物の北側が被害を蒙った。
- 台風の北乃至西側で広範囲の豪雨域があった。このため水害が各地に起り、とくに淀川

の増水位は記録破りであった。

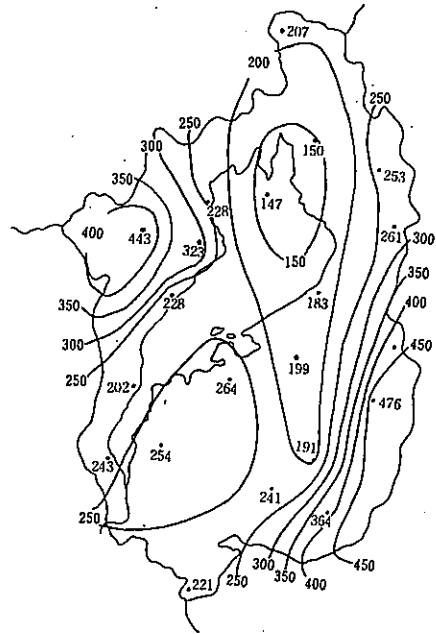
○北寄りの強風としては彦根測候所創立以来第1位であった。

本県での状況

本県は、台風を中心からそれたものの25日午後から夜にかけて暴風雨圏内に入り、最大風速は20～25m/s（彦根N21.0m/s）最大瞬間風速は30m/s内外（彦根N29.0m/s）雨量は平地で100乃至200mm、山間部で300～450mmで、暴風雨となり、各河川は急激に増水し、先の8月15日の水害による補強工事の完成を見る間もなく随所で氾濫、決壊が続出し、その惨状は言語に絶するものがあった。

また琵琶湖の水位は災害発生後上昇の一途をたどり、9月27日は1m（鳥居川）を突破し、湖周辺低地及び干拓地では農作物の被害を一層甚大にに至らしめた。

降水量分布図
昭和28年9月23～25日



	彦 根	春 照
最低気圧	977.3mb	
	25日17時51分	
最大風速	N 21.0m/s	E 18.4m/s
	25日18時10分	25日15時20分
最大瞬間風速	N 29.0m/s	E 23.8m/s
	25日18時12分	25日15時30分
総降水量	183mm	261mm
	23～25日	23～25日

警戒及び救護体制

9月24日夕、台風情報により、本県もその圏内に入り、暴風雨による被害の公算大なることが予想されたので、直ちに事前準備を行ない、25日朝関係部課で今次の災害に処する対策を協議し、同日17時災害対策本部を設置し、警戒体制を強化した。26日刻々と報告される被害情報により、事態の重大であることを知り、17時に総合的な救護事務処理機関として県災害救助隊本部を設置、91市町村に災害救助法を適用して救護活動の強化を図った。

- ◎ 日赤支部に要請し、大津日赤病院から医療班数班の救援を得、青柳村・本庄村・朽木村・兵主村・馬淵村に急派、更に各救助隊支隊においても、その管下の医療機関を動員し罹災者の救護と防疫活動に当たった。
- ◎ 朽木村・信楽町方面の僻地被災地の食糧輸送と、重病人の救護のため米軍西南地区司令部にヘリコプターの出動を要請し、前後3日延16回の派遣をうけた。
- ◎ 湖西地方、野洲川等決壊箇所の応急復旧・架橋作業等のため保安隊の災害派遣を要請し、今津駐とん部隊および伊丹駐とん部隊の派遣をうけた。

主要河川の状況表

河川名	水位		決壊(氾濫)箇所	主な被害市町村
	観測地	危険水位 最高水位		
野洲川	柏木村泉	170 ^{cm} 313 ^{cm}	河西村笠原 150 m	守山町・玉津村・河西村 速野村・中洲村・兵主村
	野洲町	130 317	速野村今浜 100 m 兵主村井口 200 m	
日野川	南比都佐村別所	110 200	馬淵村 2カ所 400 m	八幡町・金田村・西大路村・ 北比都佐村・朝日野村・馬淵村・ 鏡山村・桐原村
	篠原村小南	180 398		
愛知川	永源寺村	170 260	豊国村東円堂 200 m	御園村・稻枝村・愛知川町・ 能登川町
	愛知川町	140 330	能登川町神領・福堂 2カ所 400 m	
安曇川	葛川村	150 400	青柳村二ツ矢 100 m	朽木村・広瀬村・安曇町・青柳村・ 本庄村・新儀村
	朽木村	120 500	本庄村川島 300 m その他 2カ所	
犬上川	多賀町	70 200	河瀬村犬方氾濫 50 m	多賀町・高宮町・河瀬村
大戸川	信楽町長野	280 700	信楽町16カ所・雲井村30カ所・ 小原村47カ所・朝宮村40カ所・ 多羅尾村9カ所・下田上村1カ所	信楽町・雲井村・朝宮村・小原村・ 多羅尾村・上田上村・下田上村
芹川	彦根市 大堀町	70 190	多賀町中河原 6 m 外 1カ所	多賀町・彦根市の一部
姉川	虎姫町	170 220	姉川橋周辺が氾濫	大郷村
石田川	今津町 南新保	80 190	川上村福岡 10 m	川上村
天野川			米原町上多良 1カ所 その他上流で氾濫	柏原村・東黒田村・米原町・ 醒井村

災害救助法適用市町村及び救助費調

郡市別	町村名
滋賀郡	仰木村・伊香立村・和辻村・葛川村・木戸村・小松村
栗太郡	上田上村・志津村・金勝村・山田村・草津町・葉山村
野洲郡	守山町・玉津村・河西村・速野村・中洲村・兵主村・中里村・北里村・ 篠原村・野洲町
甲賀郡	石部町・三雲村・下田村・伴谷村・水口町・大原村・油日村・岩根村・ 甲南町・貴生川町・雲井村・信楽町・朝宮村・小原村・多羅尾村・土山町・ 山内村
蒲生郡	八幡町・金田村・安土村・市辺村・玉緒村・市原村・西大路村・北比都 佐村・朝日野村・馬淵村・鏡山村・桐原村・岡山村・東櫻谷村・鎌掛村
神崎郡	御園村・北五個荘村・能登川町・永源寺村

愛 知 郡	角井村・稲枝村・八木荘村・奏川村・日枝村・愛知川町・東押立村
犬 上 郡	多賀町・高宮町・大滝村・河瀬村・亀山村・豊郷村
坂 田 郡	柏原村・東黒田村・米原町・醒ヶ井村・息郷村・息長村
伊 香 郡	永原村
高 島 郡	百瀬村・川上村・三谷村・朽木村・青柳村・本庄村・新儀村・広瀬村・安曇町・饗庭村・高島町
大 津 市	田上町・大石町
彦 根 市	日夏町・開出今町・鳥居本町

救 助 費

避難所設置費	651,808円	食品給与費	30,576円
仮設住宅設置費	11,181,756 #	飲料水供給費	58,002 #
炊 出 し 費	6,137,940 #	被服生活必需品費	16,429,799 #
医 療 費	246,648 #	住宅応急修理費	6,400,475 #
罹災者救出費	241,790 #	そ の 他	2,791,460 #
		計	44,170,254 #

被害甚大地域の状況

- 安曇川の決壊に伴い青柳村・本庄村は全村泥水に浸り全く孤立状態となり、特に二ツ矢部落にあつては13戸のうち10戸までが濁流とともに押し流され死者13人という多数の犠牲者を出した。
- 安曇川の上流朽木村は、400 mm以上の豪雨に見舞れ、橋梁は殆んど流失し、道路は寸断、通信は杜絶、全く孤立化して一時はその安否が気づかわれたが、警察特別機動隊は、腰まで没する泥水の山間難路を徒歩で乗り切り、不安と恐怖に失心している村民を激励して救助作業にあつた。
- 丘主村は、野洲川の決壊により一面泥水に浸り、道路は水中に没して全く孤立状態となり、舟によって同地方の救助活動が行なわれた。
- 日野川の決壊により馬淵村の大半が泥水に見舞れ、避難に遅れた旅興行者6人が濁水に吞まれて全員死亡した。
- 朽木村派遣の医療班の連絡により米軍大津キャンプにヘリコプターを要請し、重患2人を空輸、大津日赤病院に収容した。
- 米原町入江干拓地では入植者19戸が床上浸水し、82人が避難路を失ない救助を求めているが、地元警察署長以下13人の警察官によって暗黒の中で徒歩誘導により全員無事救出し、同町磯の正業寺に避難収容した。
- ㊦ 愛知川町では、25日19時30分頃愛知川の決壊により首下まで没する浸水状態となったが、愛知川警察署員の誘導により同署の道場に収容した。

被害表 (災害対策本部調)

区分	数量	被害額(千円)	区分	数量	被害額(千円)
人的被害	544人		畜産関係		46,595
死者	43 "		家畜		8,668
行方不明	4 "		畜舎		29,534
重傷者	26 "		飼料		8,243
軽傷者	471 "		その他		150
家屋の被害		3,500,720	蚕糸関係		71,063
全壊	421戸	421,000	桑園		7,560
流失	101 "	101,000	繭	250貫	500
半壊	1,198 "	479,200	桑樹	361反	2,047
床上浸水	9,390 "	1,408,500	緑肥流失	2,255町歩	38,778
床下浸水	29,284 "	878,520	翌期繭減収	1,100貫	22,178
その他家屋風害		212,500	山林関係		1,713,369
什器の損害		1,441,920	林道	路線 226ヵ所	432,209
土木関係		3,746,300	橋梁	405 "	
河川	1,364ヵ所	2,311,595	山林崩壊	5,255 "	1,041,070
砂防	73 "	418,633	木材流失	21,820石	32,730
道路	715 "	692,061	木炭窯	573ヵ所	17,190
橋梁	298 "	279,011	木炭流失	5,590俵	16,770
港湾	13 "	20,000	薪流失	83,270束	33,300
漁港	12 "	25,000	その他(立木等)		140,100
耕地関係		2,168,000	水産関係		101,998
農地		753,800	県有施設	10ヵ所	12,611
農業用施設		1,414,200	漁業	28件	37,887
農作物関係		2,439,376	河川及び養魚		21,500
水稲	52,390町歩	2,280,771	その他		30,000
園芸特産	2,272 "	158,605	商工関係		517,000
農業関係		121,265	繊維関係		280,000
米	10,782石	} 56,720	鉄工関係		45,000
麦	781 "		窯業関係		72,000
その他穀物	93 "		商業関係		120,000
農協関係	施設25及び 在庫品	43,413	公共施設関係等		283,600
肥料		21,132			
開拓関係		16,036	合計		16,167,242

昭和29年 (1954)

6月22~23日 梅雨前線・低気圧

22日梅雨前線が本州に接近し、東支那海の低気圧が南海道・東海道沖を東進した。

このため、県下各地で50~130mmの大雨があり各河水が増水、氾濫して、次の被害があった。

被害状況

建物一部破損	1戸	堤防決壊	1ヵ所
水田流失埋没	288町歩	山崩れ	5 "
橋梁流失	3ヵ所		

6月28～30日 梅雨前線・低気圧

25日から26日にかけて本州南岸地方に100mm以上の雨を降らせた梅雨前線は、その後もますます活発になり、28日には揚子江下流域に低気圧が発生し、発達しながら北東進した。

本県では、28日夕刻から雨となり、29日夜半すぎから強雨になり、北部では日量100mmを越し、30日には大雨警報が発表されたが、午後には止んだ。

被害状況 (厚生課調)

床上浸水	12戸	道路損壊	15カ所
床下浸水	400 "	堤防損壊	14 "
田流失埋没	4町歩	橋梁流失	2 "
田冠水	9,811 "	山崩れ	2 "
畑冠水	371 "		

7月4～6日 梅雨前線

4日から6日にかけて、梅雨前線の活動が活発になったので、県下全般に大雨が降り、湖南地方では100mmを越えた所があった。

被害状況

住家床下浸水	7戸	水田冠水	170町歩
水田流失	1町歩	道路損壊	2カ所

8月19日 台風(5405)

8月15日、東支那海に入った台風5号は、16日15時には北東に向きを変え、18日2時頃鹿児島県西部に上陸、その後は急速に衰え、九州・四国を縦走し、近畿中部から琵琶湖付近を通り、東海地方を東進し、関東中部から鹿島灘に出た。

彦根 最低気圧 981.9mb 19日03時00分

最大風速 SE 14.7m/s

19日00時30分

最大瞬間風速 SE 21.5m/s

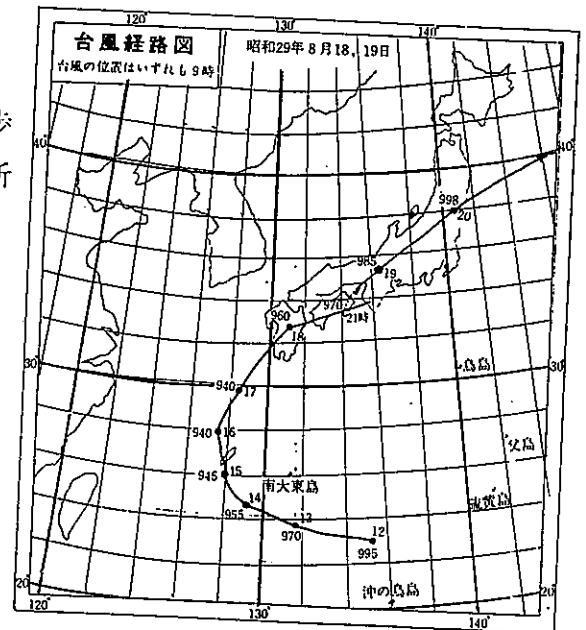
19日00時24分

総降水量 30mm 18, 19日

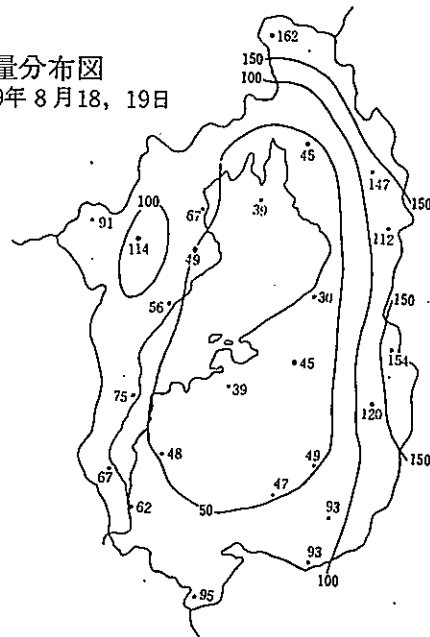
政所 " 120mm 18, 19日

被害状況

住家床下浸水	4戸
堤防損壊	1カ所



降水量分布図
昭和29年8月18, 19日



9月13～14日 台風(5412)

4日マリアナ諸島付近に発生、8日中心気圧は909mb(推算)でこの頃が最盛期であった。11日6時には南大東島に接近、13日15時に鹿児島県薩摩半島南端から九州に上陸、北～北々東進し14日0時ごろ下関付近をとおり日本海に抜け、真直ぐ北上してウラジオストック付近から大陸に入った。

本県では、13日昼ごろから全般に南東の風が強まり、14日昼すぎまでつづき、彦根で最大風速は20m/sを突破したが、雨は少なく被害は割合少なかった。

彦根	最低気圧	992.2mb	14日03時15分
	最大風速	SE 20.5m/s	14日01時30分
	最大瞬間風速	SE 33.0m/s	14日01時30分
	総降水量	17mm	12, 13日
政所	"	153mm	12, 13日
油日	"	220mm	12, 13日

被害状況

住家全壊	1戸	水田冠水	5町歩
" 半壊	6 "	堤防決壊	2カ所
" 一部破損	281棟	通信施設被害	2 "
非住家損害	33棟		

9月17～18日 台風(5414)

10日マリアナ諸島東方洋上に発生、17日南大東島と父島の間を通り、18日6時潮岬南西方200km付近から次第に進路を北に変え、9時頃から北東になり、14時頃紀伊半島の南端をかすめ、弱まりながら21時ごろ御前崎の東方に上陸し駿河湾に抜け、伊豆半島を横切って房総半島に上陸し、銚子から東方洋上に抜け北東進した。

彦根	最低気圧	992.7mb	18日18時14分
	最大風速	NNW 13.9m/s	18日23時10分
	最大瞬間風速	NNW 20.8m/s	19日01時48分
	総降水量	68mm	17, 18日
政所	"	277mm	17, 18日

被害状況

住家床上浸水	7戸	道路損壊	9カ所
" 床下浸水	16 "	橋梁流失	9 "
田畑流埋没	1町歩	堤防決壊	9 "
" 浸冠水	237 "	山崩れ	3 "

9月25～26日 洞爺丸台風(5415)

18日頃カロリン群島付近に発生した熱帯低気圧は、21日台風15号となり、24日バシー海峡に接近、25日15時には沖縄西方を時速60kmに加速して北東に進んだ。26日2時鹿児島湾から大隅半島北部に上陸、時速75kmで九州東部を縦断し、大分県から豊後水道に抜け、時速100kmの超速度で

中国地方を横断し、8時頃から山陰沖を経て日本海に抜け、夜半過ぎ稚内付近を通った。この台風の進路に当たった各地では風雨が強く、とくに当時函館港に仮泊していた洞爺丸をはじめ、青函連絡船5隻が暴風と高い波のために遭難し、死者1,228人、行方不明200人と多数の負傷者を出した。また北海道岩内町では、この強風下に大火があった。

本県では、25日夜から南東の風が強まり、26日早朝から昼頃まで強風が吹きつづき、最大風速は20m/s内外であったが、雨は各地共少なく山間部で20~40mm平野部で10mm内外であった。

彦根 最低気圧 986.1mb 26日08時43分

最大風速 S E 19.9m/s

26日08時40分

最大瞬間風速 S E 30.0m/s 26日08時35分

総降水量 13mm 25, 26日

市場 " 44mm 25, 26日

被害状況

住家一部破損 7戸 非住家被害 5戸

昭和30年(1955)

2月27~28日 融雪洪水・低気圧

27日低気圧が九州南西方海上に発生した。その頃、先に台湾北方海上で発生して北に進み、その後、東北東に向きを変えて進んでいた低気圧が朝鮮海峡にあった。これらの低気圧は、27日から28日にかけて二つ玉となって日本南岸を東北東に進み、房総沖で発達し、3月1日にはオホーツク海に出て消滅した。

本県では、27日朝から雨になり、次第に風雨が強まり、雨量は平地で30~50mm、山地は80mmを越し、比良山系付近では100mmを突破した。高島郡地方では、この雨のため山間部の雪融けで28日安曇川などが一気に増水したので、かなりの被害があった。

被害状況(主要地は安曇川町西万木)

床上浸水 50戸 田畑冠・浸水 5,000反歩

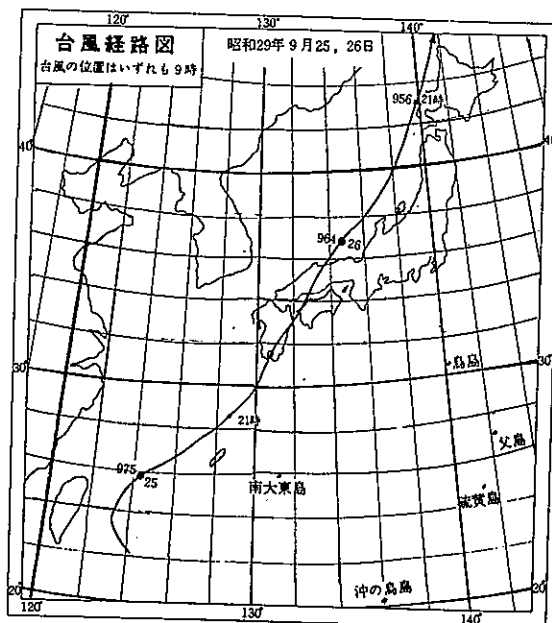
床下浸水 200 " その他橋梁の沈下等

堤防損壊 15m

4月15~17日 前線・低気圧

前線が本邦付近に停滞し、低気圧が相次いで東進した。

本県では、15日昼前頃から雨が降り出し、17日は風・雨ともに強く一時雷雨となり、各地に大雨を降らせたが特に被害はなかった。



彦根 最大風速 NNW 12.9m/s 17日11時10分

総降水量 95mm 15～17日

大津 " 158mm 15～17日

7月4～7日 梅雨前線

梅雨前線の活動により、4日朝から降り出した雨は連日降ったり止んだり、とくに5日と7日は大雨になり被害がでた。

被害状況

床下浸水 9戸 (虎姫町大寺・長浜市宮司)

田畑浸水 190町歩 (虎姫町唐国・長浜市周辺)

道路損壊 2ヵ所 (虎姫町唐国)

9月27～30日 前線・台風(5522)

21日ガム島付近に台風22号が発生、25日硫黄島付近を通り、28日には進行速度が非常におそくなり、進路を北に変え、29日23時頃薩摩半島に上陸、北進して九州を縦断、30日7時には玄海灘を通り、日本海に抜けた。

本県では、台風が潮岬南方洋上に接近した頃、太平洋側に停滞していた前線の活動により27日夕刻から翌朝にかけて大雨が降り、全般に60～100mmの雨量を測った。台風が日本海に入った30日朝方から台風の影響で10m/s以上の強風が吹き、彦根地方では最大風速は15m/s内外、最大瞬間風速は20m/sを突破したが夜にはおさまり、特筆する被害はなかった。

彦根 最低気圧 999.7mb 30日16時47分

最大風速 SSE 14.9m/s 30日12時10分

最大瞬間風速 SSE 21.8m/s 30日10時43分

総降水量 77mm 27～30日

政所 " 190mm 27～30日

10月11日 台風(5525)

10月7日、沖の鳥島南西洋上に発生し、8日から10日にかけて発達しながらジグザグの経路を描いて北～北々東に進んだ。10日21時に鳥島の西方300kmの海上を通過し、速度を増して11日12時ごろ三宅島の南岸沖を通過し、15時過ぎ銚子沖100kmの海上を毎時70kmで北東に進み北千島方面に去った。

本県では、11日北よりの風が強く、彦根では最大風速N17.5m/s、最大瞬間風速N24.0m/sで、降水量は全般に少なく20～30mmで、特に比良地方は比良おろしが起こり稲の倒伏や脱粒などかなりの被害があった。

10月20日 台風(5526)

16日頃バリンタン海峡付近に発生し、19日10時頃沖縄の東方約100kmの海上を北東に進み、20日正午頃和歌山県田辺市付近に上陸、紀伊半島を斜断し14時頃名古屋付近を、18時頃関東東北部を経て太平洋に抜けた。この台風は、19日では10月台風のコースをたどり本邦には影響がないものと考えられていたが、夜中より急に北上し、加速して上陸したものである。

本県では、北～西の強い風雨があり、特に比良山麓・滋賀郡志賀町では北西25m/s内外の比良越

9月27日 台風(5615)

19日にガム島付近に発生し、23日9時に台風15号となった。25日9時には宮古島の南東洋上に達し、26日3時には沖縄西方、26日12時頃奄美大島付近を通過し、27日12時頃御前崎付近から本土に上陸、関東南部をかすめて三陸東方海上に去った。

本県では、寒冷前線の通過により26日15時まで60~80mmの雨量があり、台風が紀伊半島に接近した27日3時頃から台風の直接の影響を受けて風雨が強くなった。

彦根 最低気圧 994.0mb 27日08時12分
最大風速 N 19.3m/s

27日08時10分

最大瞬間風速 N 27.1m/s

27日08時01分

総降水量 158mm 25~27日

政所 " 252mm 25~27日

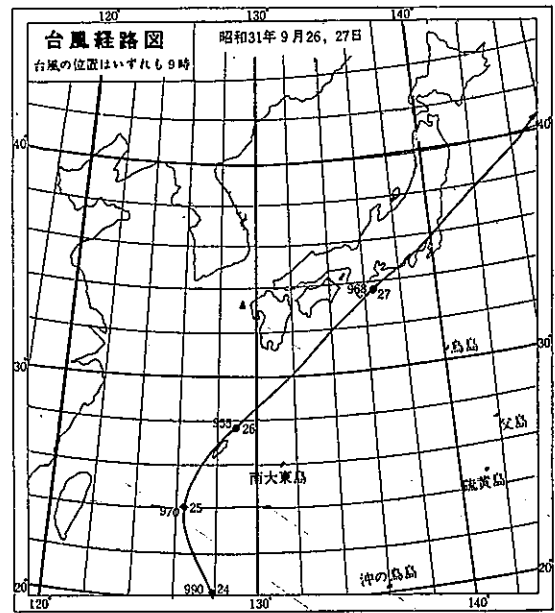
被害状況

死者	1人
行方不明	1 "
住家全壊流失	2戸
" 半壊	3 "
" 床上浸水	23 "
" 床下浸水	1,008 "
" 一部破損	7 "
非住家被害	20 "
田畑流埋没	7町
" 浸冠水	970 "
道路損壊	10ヵ所
橋梁流失	14 "
堤防決壊	14 "

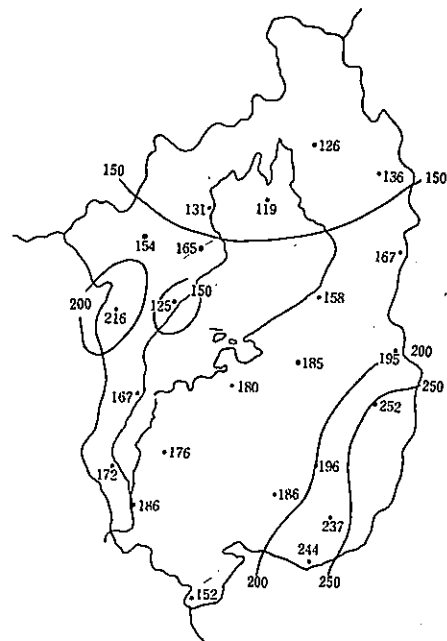
昭和32年 (1957)

6月27~28日 梅雨前線・台風(5705)

18日トラック島付近に熱帯低気圧が発生し次第に発達して19日9時には台風5号となった。台風は台湾に上陸後東支那海に入り、27日3時九州南西方海上に達し、同日9時に長崎西方海上で東支那海を東進した低気圧と合併し、温帯低気圧となって消滅した。



降水量分布図
昭和31年9月25~27日



本県では、台風の接近に伴う梅雨前線の活動により、26日10時頃から雨が降り始め、夜には雷を伴い、28日にかけて各地で100 mmを越える大雨になった。

彦根	最大風速	NW	8.7m/s	28日04時50分
	最大瞬間風速	NNW	12.1m/s	28日04時27分
	総降水量		134mm	26～28日
堅田	"		171mm	26～28日

被害状況

建物被害	50棟	通信施設被害	14ヵ所
水田冠水	363町		

10月17日 寒冷前線・季節風

日本海低気圧が急速に発達しながら北海道方面に進み、顕著な寒冷前線が17日11時過ぎに本県を通った。このため北寄りの風が急に強くなり、彦根では最大風速北19.9m/sで10月としては創立来の新記録を示した。

彦根	最大風速	N	19.9m/s	16時50分
	最大瞬間風速	N	27.1m/s	16時58分
春照	最大風速	NW	17.1m/s	15時30分
	最大瞬間風速	NW	21.5m/s	15時21分

この強風は非常に局地性に富んだものであり、強風による被害は極く僅少であった。

昭和 33 年 (1958)

6月28～30日 梅雨前線

27日朝鮮付近の低気圧より南東に伸びる前線は九州南部から紀伊半島、更に関東地方に伸びていた。

本県では、28日早朝から雨が降り出し、午後には雷雨となり夜に入って一時止んだ。しかし月末にかけて梅雨空がつづき各地で30～50mm、南部では70～100 mm内外の大雨になり水害が発生した。

各地の総降水量 mm (28～30日)

彦根	56	大津	105
木之本	40	土山	89
八幡	85	北小松	74

7月25日～27日 梅雨前線

日本を東西に伸びる前線が停滞し、台風13号が南方洋上から北上してきたので梅雨空がつづき、本県各地では、24日から26日にかけて時々雷雨になり、多い所では100 mmを越す大雨になり、姉川・安曇川水系では各警戒水位を突破する程度の出水があり、護岸の決壊等があった。

各地の総降水量 mm (24～26日)

彦根	121	大津	48
木之本	84	土山	33
今津	109	北小松	105
八幡	163		

8月25日 台風(5817)

18日、グアム島付近で発生し徐々に発達しながら北西進し、21日15時台風17号となった。22日9時、南大東島南々東500kmの海上付近で北に転向し、発達しながら真直ぐ北上、24日9時には四国足摺岬の南方600kmの海上に達し、970mbに深まった。その後全然衰えを見せずに四国沖に接近、北北東に転じて和歌山県白浜に上陸し、近畿地方中部を斜断して北北東に進み、北陸方面へ抜けた。

本県では、25日15時頃より南東の風雨が次第に強まり、18時に台風が白浜に上陸してより奈良県を抜けて夜半本県西部を北北東に進む頃が最も強く、彦根では28.3m/sを観測した。各河川は25日夜半より急激に増水し、各所で堤防の決壊・道路・橋梁の流失が発生した。

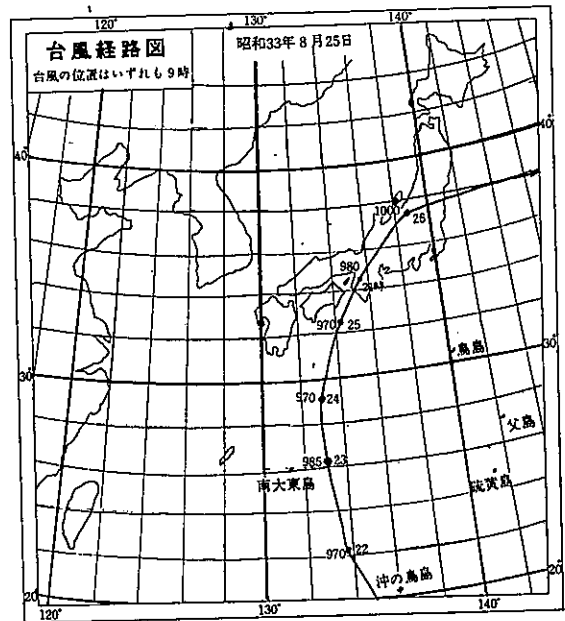
警戒状況

大雨注意報発表	24日 17時 40分
風雨注意報 "	25 06 20
暴風雨警報 "	25 15 00
洪水注意報 "	25 23 00
暴風雨警報解除	26 01 30
風雨注意報発表	26 01 30
風雨注意報・洪水注意報解除	26日 05時 20分

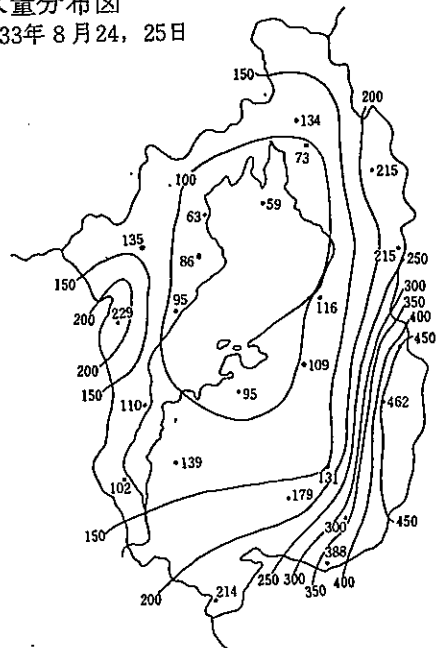
彦根 最低気圧	992.2mb	25日 22時 45分
最大風速	E S E 15.5m/s	25日 19時 50分
最大瞬間風速	E S E 28.3m/s	25日 19時 42分
総降水量	116mm	24, 25日
政所 "	462mm	24, 25日

被害状況

死者	2人	
負傷者	3 "	
住家全壊流失	7戸	
" 半壊	25 "	
" 床上浸水	131 "	
" 床下浸水	1,627 "	田畑流埋没 16.5町
" 一部破損	219 "	" 浸冠水 1,796 "
非住家被害	136棟	道路損壊 104カ所



降水量分布図
昭和33年 8月24, 25日



橋梁流失	46カ所	林地被害	217カ所 62.7 ha
堤防決壊	39 "		(林務課調)
山崩れ	34 "		

(以上警察調)

9月12日 前線

本県南部地方で強い雷雨が発生し、大津付近では浸水家屋もあった。

各地の降水量mm

彦根	4	大津	41
水口	23		

9月18日 台風(5821)

9日ガム島南西約300kmの海上に発生し、13日には南大東島の南方に達し、920mbまで発達した。その後次第に北から北東に転向し、17日15時には四国室戸岬の南方300kmに達した。その頃より漸次加速し、18日7時頃から10時頃にかけて962mbの勢力で関東南部を掠め、鹿島灘から三陸東方海上に抜けた。この台風は比較的暴風半径が大きく、B級に属し、台風そのものによる降雨は少ない方だが地形性降雨は多かった。

本県では、台風の中心からかなり離れていたため直接の風雨は免れた。しかし18日朝、台風が東海道沖から関東方面へ進む頃、15%以上の北西の吹き返しがあり、鈴鹿山系では250mmに達する大雨があり多少被害があった。

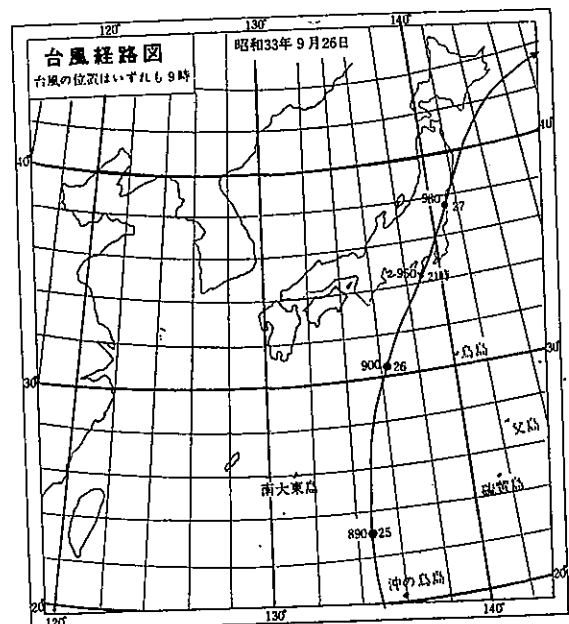
彦根 最低気圧	987.1mb	18日04時29分
最大風速	NNW 15.7%	18日06時50分

被害状況

倒壊家屋	1戸	山崩れ	1カ所
損壊家屋	2 "	板塀損壊	20 "
床下浸水	1 "	通信施設	12 "
道路損壊	4カ所		

9月26日 狩野川台風(5822)

20日15時、グアム島南東海上に熱帯低気圧が発生、21日3時台風22号となる。23日から急速に発達し、24日13時30分に中心気圧877mb、最大風速75%以上を観測し、中心気圧としては戦後では最低の記録を示した。その後次第に日本南岸に接近し、27日0時頃三浦半島に上陸、関東地方を斜断して北海道東方海上に抜けた。この台風は、台風史上稀に見る大型台風で、その暴風半径は実に500kmに及び、日本の半分以上を掩い得る大きさであった。このため、各地に甚大な被害を与え、特に、伊豆湯ヶ島では



580 mm以上の総雨量を測り、狩野川の氾濫によって伊豆地方は、死者・行方不明をあわせて1,000人を上廻る大水害となり、東京地方でも総雨量400 mm以上のため、浸水家屋が30万戸を越えた。

本県では、幸い台風を中心からかなり離れていたため、直接の影響は免れたが、台風が潮岬・南南東800 kmの海上に達した25日朝から雨となり、26日午後には北寄りの風雨が次第に強くなり、夕刻から平均15%の強風と共に、鈴鹿山地では1時間20mm以上の強雨が続き、総雨量は200 mmに達し、各河川は増水し、かなりの被害があった。

とくに、湖東・湖南・湖西方面に多く、野洲川、愛知川、日野川水系に多くの水害が発生した。

彦根 最低気圧 989.6 mb 26日22時07分
 最大風速 N 15.2% 26日18時00分
 最大瞬間風速 N 19.3%
 26日17時55分

総降水量 116mm 25, 26日

土山 " 189mm 25, 26日

被害状況

死者	1人		
住家半壊	4戸		
住家床上浸水	7 "		
" 床下浸水	384 "		
" 一部破損	4 "		
非住家被害	10棟	道路損壊	12カ所
田畑流埋没	21町歩	堤防決壊	5 "
田畑浸・冠水	1,059 "	山崩れ	13 "

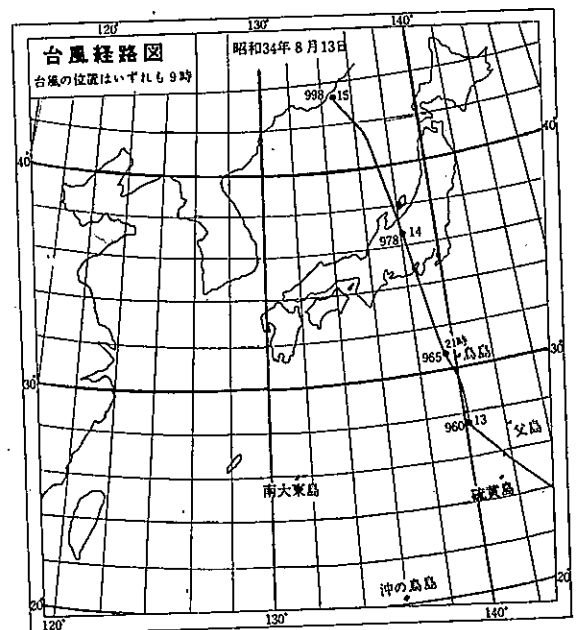
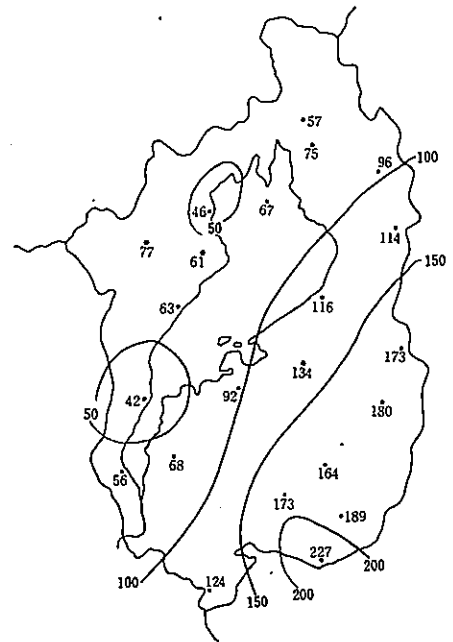
昭和34年(1959)

8月13~14日

7号台風(5907)・土佐沖低気圧

8月12日3時に低気圧が九州南西方及び四国南方海上にあってゆっくり東進し、前線がそれぞれ中心から東西に伸びていた。15時には低気圧は幾分北東に進んだが、東方海上の高気圧にはばまれて東進できず、この高気圧に押されて北~北西に進み、高気圧からの吹き出しは、南方海上からの暖湿な空気の吹き込みとなって伊勢湾に集中し、高気圧の停滞・発達に伴ってこの状態はますます顕著になった。一方台風7号が12日10時には硫黄島南東方450 kmで995 mbを示し、台風7号と命名され、その後急速に北

降水量分布図
 昭和33年9月25, 26日



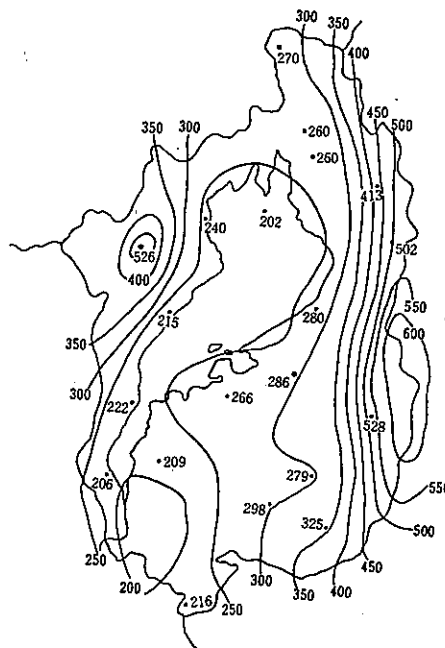
西に進み、更に北に転じて14日早朝、静岡県富士川河口に上陸し、静岡・山梨・長野・新潟の各県を荒して北北西に進み、10時頃直江津付近を通って日本海に入り、11時佐渡の西方海上に達し、衰えながら日本海を北西に進み、沿海洲に上陸した。この台風の影響が加わって暖気の吹き込みを助長し、通路に当たった地域では風雨が強く大きな被害をもたらした。然し規模が小さいため、中心から少し離れた地域では、風の被害はなかった。

本県では、低気圧が四国南方海上にある12日朝から雨が降り出し、次第に悪化して午後には本降りになり、雷を伴った強雨となり、春照では1時間50mm以上を観測した。特にこの雨は天の川上流域の集中豪雨ともいふべきで、同地方の河川は各所で溢水・氾濫し、堤防の決壊が起った。約3時間この強雨が続いて22時頃漸く小止みとなったが、13日3時から5時にかけて、伊吹山系ではまた降り、更に朝方8時過ぎから11時頃まで第3の一層強い集中豪雨があり、1時間最大、春照で61mm、吉槻で67mmという記録破りの豪雨となった。このため、前夜来の各所の被害は一層増大し、土砂崩れ等も続出した。また、13日午後には安曇川上・中流域にも強雨を降らし、夜半には県南部から鈴鹿山系、更に県北東部へと移り、14日9時過ぎに止んだ。

このようにして県下全般に降った雨は、平地で200~300mm、東部山岳では600mmに達した。このため琵琶湖の水位は16日には+100cmを越えた。

彦根	最低気圧	995.4 mb	14日 08時20分
	最大風速	N	12.9 m/s
			14日 02時20分
	最大瞬間風速	WNW	16.2 m/s
			14日 03時28分
	総降水量	280mm	12~14日
政所	"	528mm	12~14日
市場	"	526mm	12~14日

降水量分布図
昭和34年8月12~14日



警戒状況

大雨注意報発表	12日 17時 45分	大雨注意報発表	13日 16時 30分
大雨警報 "	12 20 40	大雨警報発表	14 02 30
同 上解除	13 06 00	洪水警報 "	14 04 30
大雨注意報発表	13 07 00	大雨警報解除	14 09 00
同 上(更新)	10 30	洪水警報 "	14 17 30
大雨警報発表	13 11 20		

応急対策

被害状況の判明に基づき、県は直ちに災害対策本部を設置し、実情調査と併わせて今後の対策を協議し、13日22時、及び14日正12時に山東・米原両町にそれぞれ災害救助法を適用し、15日緊急救護並びに救援物資の放出給与を行なう一方、自衛隊の出動を得て天の川・姉川流域その他決

壊河川の応急復旧に努めた。

被 害 表 (災害対策本部調)

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
人の被害			林産物	15件	10,322
死者	4人		その他		12,232
負傷者	18"		水産被害		21,180
建物被害		193,530	漁業施設	7件	1,477
住家流失	2戸	1,000	水産施設	2"	65
"全壊	16"	8,000	漁船	3隻	300
"半壊	72"	7,200	その他	13件	19,338
"床上浸水	2,434"	73,020	農作物被害		1,028,270
"床下浸水	17,081"	85,400	水陸稲	38,136町	842,020
非住家損壊	1,891"	18,910	その他雑穀	494"	23,520
土木被害		4,207,120	そ 菜	1,209"	147,920
河 川	4,460カ所	3,501,827	桑 園	207"	14,000
砂 防	231"	206,490	果 樹	16"	120
道 路	952"	304,253	そ の 他	2"	690
橋 梁	253"	194,550	畜産被害		11,579
耕地被害		311,760	家 畜		460
田流埋没	955町	92,840	飼 料	6,436町	3,508
畑 "	74"	4,140	施 設	3,706件	7,611
農 道	195カ所	14,620	開拓関係被害		23,040
水 路	171"	43,940	農 地	7町	4,880
堤 塘	93"	20,160	住 家	7戸	120
溜 池	35"	13,610	農 作 物		4,240
橋 梁	120"	43,430	農 業 施 設	14件	13,800
頭 首 工	121"	73,570	学 校 被 害	4校	1,600
揚 水 機	10"	5,450	商 工 被 害		4,150
山林被害		343,554	その他公共施設被害		515
林地崩壊	436カ所	258,000	被		
林 道	350"	43,000			
橋 梁	69"	20,000	合 計		6,146,298

9月17日 台風(5914)

12日頃ガム島付近に発生した低気圧は、台風14号となり、15日宮古島南東洋上に達した。17日早朝から夕刻にかけて、九州西方海上から朝鮮南東端をかすめて日本海に進んだ。

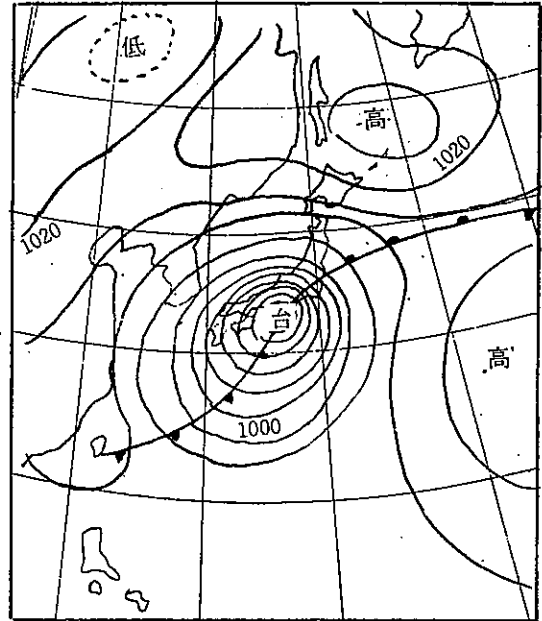
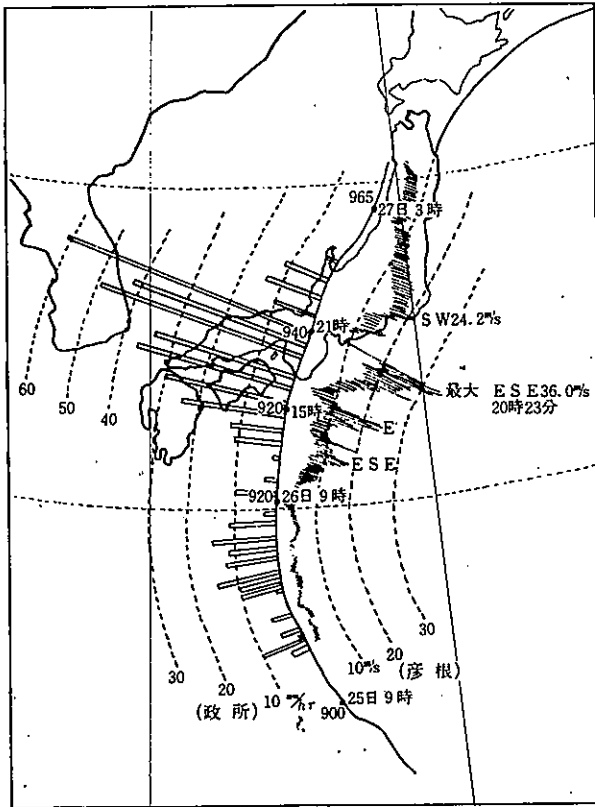
本県では、台風が朝鮮海峡を北東に進む17日午後から夜にかけて南東の風がやや強く、彦根では、最大風速南東15.7m/s、最大瞬間風速南東25.1m/s、また、虎姫駅でも最大瞬間風速27.1m/sが観測された。しかし、珍らしく雨が非常に少なく、比良山系で30mm程度、南部及び東部の山沿いで10mm以下の雨量で(彦根では0.4mm)被害は少なく、強風のため稲の倒伏、果実の落下が僅かに見られる程度であった。

9月26日 伊勢湾台風（5915）

20日9時、エニウエドック島の西方洋上に発生した弱い熱帯低気圧（1008mb）は、次第に発達しながら西から北西方向に進み、21日21時に台風15号になった。22日15時にはサイパン島北東方約150kmの洋上で中心気圧970mb、最大風速33m/sを示し、発達しながら北西進し、23日9時には中心気圧905mbに深まった。このように中心気圧の降下量が1日に91mbという大きな値を示したことや、北緯20度以南で900mb前後に達したことは珍しい。それ以後、台風は最盛期に入り、23日～26日の間で中心気圧は895～910mb、最大風速は60～75m/s、風速25m/s以上の暴風圏の直径は600～800kmに達した。最盛期を過ぎた台風は、その勢力を余り変えることなく、時速35kmとやや加速しながら北上し、26日18時、潮岬付近に上陸、紀伊半島を縦断、奈良県から滋賀県南部に入り、鈴鹿山脈西側を北上し、伊吹山脈を越えて岐阜県北部に入り、富山湾を通過して日本海に出た。その後衰えながら日本海沿いに北上し27日朝秋田の西方海上に達した。その頃から台風の勢力は八戸沖に移り、27日15時には根室の南の海上に達し、21時には温帯低気圧となり、10月2日北緯39.5度、西経150.5度付近の洋上で消滅した。

地上天気図 昭和34年9月26日21時

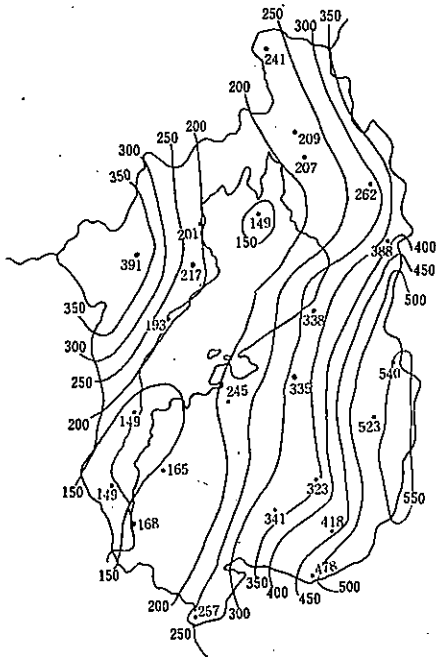
伊勢湾台風経路図
彦根の気象変化図



本県での状況

本県では、前線と低気圧の影響で、24日朝から雨模様の天気になっていたが、25日から26日に入るにつれて台風の影響も加わり、雨勢は次第に激しくなり、26日午後には風も吹き始め、南東の風雨が強くなった。夕刻台風が紀伊半島に上陸した頃より風雨はますます強くなり、台風が奈良

降水量分布図
昭和34年9月24～26日



県から、本県南部に入る19時から21時にかけては、南東から北東寄りの風雨は一段と強く、殆んど全県下にわたって平均風速20 $\%$ 以上、最大瞬間風速30 $\%$ 以上の暴風雨になり、特に、鈴鹿山系では豪雨で君ヶ畑では15時から21時までの6時間に300 mm、政所では260 mmに及び、彦根でも160 mmを越えた。

彦根	最低気圧	949.5 mb	26日21時25分
	総降水量	338 mm	24～26日
政所	"	523 mm	24～26日

各地の風速 $\%$ (26日)

要素	地名	彦根	春照	木之本	虎姫	石姫
最大		ESE 21.9 20時20分	ESE 25.5 21時10分	22.2 20時30分	25.0 20時20分	24.5 19時32分
最大瞬間		ESE 36.0 20時23分	ESE 39.1 21時05分	—	45.0 20時30分	40.0 19時32分

警戒状況

大雨注意報発表	25日16時30分	洪水警報発表	26日18時20分
風雨注意報 "	26 11 30	強風注意報 "	27 01 10
暴風雨警報 "	26 15 10	同上解除	27 07 00
洪水注意報 "	26 16 00	洪水警報 "	27 12 40

台風眼の観測

彦根では、21時10分頃から急速に風は弱まり、雨も殆んど小止みになった。気圧はぐんぐん下り、21時25分遂に最低気圧949.5 mbを示し、当气象台開設以来の記録となった。約40分間弱風状態が続いて21時55分、風は北西に変わって再び強くなり、明らかに眼の通過に伴う気象変化を示した。東部山沿い地方ではこの変化は一層はっきりしていたようで、山東町村居田では一時星空も見られたと云うことである。22時過ぎ、台風眼の通過と共に北西の吹き返しが再び強く、17～18 $\%$ の強風が夜半過ぎまで続いた。

被害の状況

この台風によって、本県でも非常に大きな被害をうけたが、中でも水害は特に目立って大きく、鈴鹿・伊吹の両山系に降った豪雨により、草野川・姉川・天野川・芹川・犬上川・宇曾川・愛知

川・日野川の各河川の支流、及び本流、並びに野洲川の上流地域で特に被害が大きく、上流の山間部では河川の両岸は各所で削り取られ、河川に並行した道路は殆んどずたずたに切断された。また、中・下流域では支流の小河川は短時間の豪雨で忽ち氾濫し、本流の両岸の堤防も到る所で決壊し、広い地域にわたって洪水を起し、浸水、冠水域を出した。これらの地域は台風7号で既に大きな被害を受けているので、決壊箇所も増え、被害は更に大きくなったのであり、また琵琶湖の水位は上昇して28日18時には最高彦根では96cmとなり、沿岸地域の冠水時間は異常に長引き、特に近江八幡の水葦干拓地では日野川の氾濫で3mも冠水し、収穫皆無は勿論、住宅も深く浸水したまま、それが完全に排水されるに40日もかかった。また彦根市松原干拓田も周囲の堤防が決壊し、再度にわたる冠水で収穫皆無になるなど、各地で大きな被害があった。人の被害では木之本町土倉鉦山で27日2時頃山崩れにより社宅3棟が倒壊し、13名が生埋めとなり、10人が死亡したのをはじめ、16人の死者を出した。

応急対策

26日午後、台風が潮岬上陸濃厚となり、最悪の状態が予想されたので、直ちに県災害対策本部を設置して今後の対策を協議した。台風は予想どおり本県を渦中に席卷し、その被害甚大となり、27日朝10時近江八幡市・近江町・山東町・彦根市に、同日15時に米原町・愛知川町・秦荘町・湖東町・愛東町・野洲町に、また、同夕18時に長浜市・中主町・木之本町に、28日10時に豊郷村・稲枝町に、同15時永源寺町・多賀町の合計17市町村に、それぞれ災害救助法を発動し、実質的な救助活動に入った。即ち、緊急援護・応急復旧対策をたてるとともに、自衛隊の出動を要請して応急復旧と救助活動に努めた。

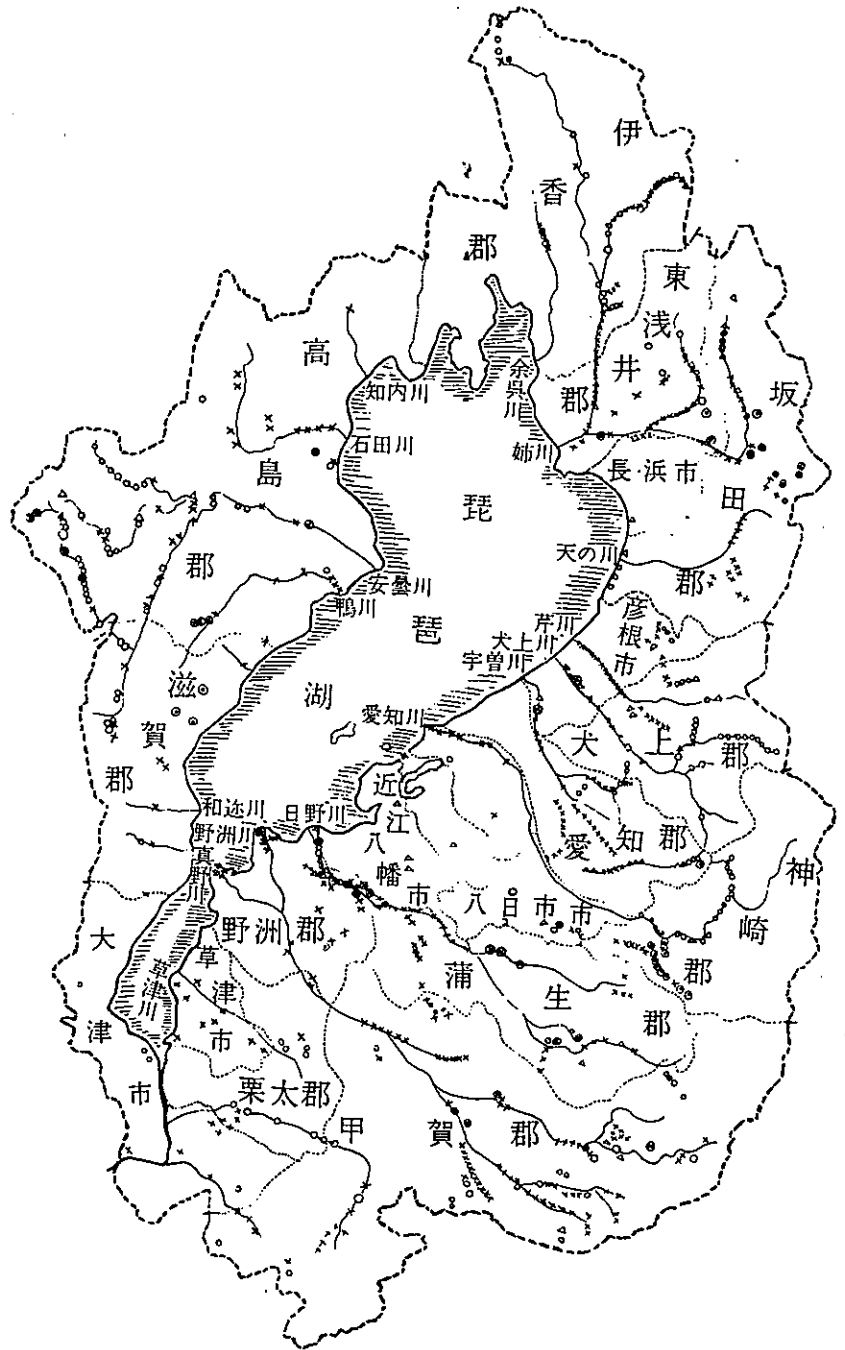
警察・消防の共同活動事例

- 27日、夜中2時頃彦根市清崎地先宇曾川堤防において、消防団員13名が警戒中、前後の堤防が決壊し、中洲に孤立した。警察機動隊・愛知川署員、稲枝町消防団員等13名が協力、危険をおかして現場に接近し、救命索の発射、あるいは濁流に身を投じての泳行によりロープを繫留、ゴムボートを浮上し、ロープを伝って4住復の後、暗黒の堤防上に4時間を不安と寒気にさらされていた全員を救出した。
- 野洲町高木900名、中主町比留田840名の大避難集団を誘導した。避難完了後30分後に両部落は床上浸水1.5mに達している。
- 近江八幡市水葦干拓地で26日夜29戸・130名の避難誘導と、牛豚55頭の家畜避難を指導、27日朝10時頃堤は決壊、干拓地帯は軒下まで浸水したが、更に地元青年団員の協力を得て、浸水の中を多数の家財道具を搬出して流失を防ぎ、罹災者から感謝された。
- ◎ 愛知川御幸橋上流100mの堤防は、先の7号台風で決壊、再度危険寸前となり、地元消防団員は必死の補強作業を実施、警察は発動発電機・投光機により作業の安全化に協力した。
- その他、木之本町土倉鉦山での山崩れによる13人、天野川下流能登瀬橋畔の31人、野洲町小南の31人、中主町比留田での17人の孤立者の救出など、各地で警察・消防による救助活動が行なわれた。また、姉川下流の南大井・野寺・酢での1,650名、馬淵浄土寺での390人の大規模避難を指導した。

愛知	秦	湖	愛	野	中	近	長	彦
川	莊	東	東	洲	主	江	浜	根
町	町	町	町	町	町	市	市	市
多	永	稲	豊	木	近	米	山	
賀	源	枝	郷	之	江	原	東	
町	寺	村	村	本	本	原	東	
				町	町	町	町	

○災害救助法発動十七市町村

凡	例
×	⊗ ⊙ ○ △
河川	(破堤) 砂防 道路 橋梁



被害表 (災害対策本部調)

区分	数量	被害額(千円)	区分	数量	被害額(千円)
人の被害			住家全壊	342戸	116,800
死者	16人		" 半壊	1,309 "	271,800
負傷者	114 "		" 床上浸水	5,920 "	236,800
建物被害		769,730	" 床下浸水	19,816 "	99,080
住家流失	15戸	6,000	非住家損壊	3,970棟	39,250

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
土 木 被 害		2,949,508	漁 業 施 設	15件	1,155
河 川	3,330カ所	2,381,453	水 産 施 設	68 "	2,480
砂 防	202 "	136,932	漁 船	40隻	1,925
道 路	782 "	231,203	そ の 他	13件	4,101
橋 梁	316 "	192,870	農作物被害		2,504,035
港 湾	5 "	3,350	水 陸 稲	38,136町	2,372,200
漁 港	4 "	3,700	そ の 他 雑 穀	494 "	1,050
耕 地 被 害		786,350	そ の 他 菜	1,079 "	34,348
田 流 埋 没	769町	365,191	桑 園	86 "	3,595
畑 "	61 "	22,832	果 樹	434 "	92,108
農 道	360カ所	26,899	そ の 他	13 "	734
水 路	502 "	95,044	畜 産 被 害		59,535
堤 塘	368 "	84,550	家 畜		5,606
溜 池	43 "	12,200	施 設	4,900件	40,385
橋 梁	167 "	74,660	飼 料		13,544
頭 首 工	206 "	79,580	開拓関係被害		84,724
揚 水 機	90 "	25,394	住 宅	218戸	29,432
山 林 被 害		685,090	農 作 物		42,074
林 地 崩 壊	586カ所	427,000	農 業 施 設	283件	13,218
林 道	450 "	42,000	学 校 被 害	128校	29,808
橋 梁	71 "	20,000	商 工 被 害		382,000
林 産 物 他		193,120	そ の 他 の 公 共 施 設 被 害	285件	13,881
そ の 他		2,970			
水 産 被 害		9,661	合 計		8,274,322

昭 和 35 年 (1960)

4月20日 低気圧

大陸から東進してきた低気圧は、19日に東支那海に進み、急速に発達しながら北東に進み、20日朝には九州南西部に達し、1002mbを示した。この低気圧が四国を縦断する頃より2つ玉となり、日本海側と太平洋側を北東進し、21日15時にはオホーツク海南部で一つになり、978mbに発達し、豆台風にも匹敵する勢力になった。4月の候に本州を縦断してこれほどに発達した低気圧は非常に珍しいことである。

本県では、低気圧が九州から四国に進む20日明け方から南東の風が次第に強まり、伊吹山南側の地峡地帯では既に10%を越していた。低気圧が近づくに従い、南部では8時頃から、北部ではやや遅れて9時頃から南東の風雨が強まり、平均最大12~15%、最大瞬間20~30%の突風性の風雨となり、彦根では11時05分に最大瞬間27.7%を観測した。この風雨は昼前を峠として最も強く、午後には次第に弱まり、一時西よりの吹き返しがあって後夕刻にはおさまった。この風雨で、山岳地帯では一部崖崩れや道路の決壊があり、交通関係・通信施設などかなりの被害があった。

各地の風速 m/s (20日)

要素 \ 地名	彦根	春照	石山	近江木戸	虎姫	能登川	堅田
最大	SE 13.9 11時20分	SE 20.5 09時20分	14.0 08時15分	NNW 13.5 17時10分	16.0 10時30分	12.0 09時50分	6.5 07時14分
最大瞬間	SE 27.7 11時05分	SE 31.5 09時21分	22.2 08時15分 08時55分		27.9 10時28分	22.6 09時50分	

被害状況

建物一部損壊 7棟 崖崩れ 3ヵ所
道路損壊 1ヵ所

7月8日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線上を発達した低気圧が華北から東南東に進み、朝鮮中部を経て8日早朝日本海南部に入った。日本海に入ってから996mb以下の強い勢力を示したまま東に進み、東北地方南部を横断して9日朝三陸沖に抜けて更に東に去った。この低気圧の中心より東に伸びる前線は、8日早朝より夕刻にかけて強い雨を伴った活発な温暖前線となって西日本を縦断し、各地に大雨を降らせ、特に山口・広島各県では200mmを超える大雨となり、死者20数人をはじめかなりの被害を出した。

本県では、8日10時頃より正午にかけて強い雨が降り、とくに南部大津・信楽方面では時間雨量40mmを超える強い集中豪雨となり、三田川・伯母川等の小河川は忽ち増水・氾濫し、この方面各所で家屋の浸水、道路の損壊等の被害を出した。しかし南部を除いては雨量は大したことなく、大・中河川に大きな増水はなかった。

被害状況

床上浸水 7戸 (大津) 畑冠水 13 ha
床下浸水 344戸 (大津・草津) 道路損壊 8ヵ所 (大津)
非住家浸水 5棟 (草津) 堤防決壊 2戸 (大津・草津)
水田冠水 58.9 ha

7月27日 雷雨

大津市付近に強い雷雨があり、浜大津で家屋40戸が浸水した。

8月10～11日 台風(6011)

8月8日頃硫黄島南方洋上で発生し、9日15時980mbを示して台風11号となった。その後毎時40kmのかなり速い速度で北北西から北西に進み、11日3時過ぎ、室戸岬西方に上陸し、四国を横断、岡山県西部から鳥取西方を通して日本海に抜けた。

本県では、台風が紀伊半島南方海上を四国に向かって進む10日夕刻から11日早朝にかけて鈴鹿山地で強い雨が降り、150mmを越えたが、1カ月にわたる干天後のことであり、増水するまでに至らず、特記する被害はなかった。

8月12～13日 台風(6012)

台風12号は11号に続いてやや北西に逼って硫黄島の西方400kmの海上で発生し、11号の後を追

って毎時25kmの速さで北西からさらに北に進み、12日18時頃11号とほぼ同じ室戸岬の西方に上陸した。上陸後勢力は急速に衰えながら北北西に進み、13日未明、若狭湾西部に抜け、温帯低気圧の性質を帯びながら能登半島を通り、東北地方南部を横断して三陸東方洋上に進んだ。

本県では、12日夜から13日朝にかけて、平野部で50～100mm、県北東部と南西部の山岳地帯では100～150mmの雨が降った。さきの11号台風の雨で土地が飽水しているところへの大雨であり、各河川はたちまち増水して、中・小河川は危険水位を越えた所が多く、昨年の7号台風、伊勢湾台風で災害を受け、復旧の途にある箇所、或いは仮工事の橋梁等がかなりの被害を被った。

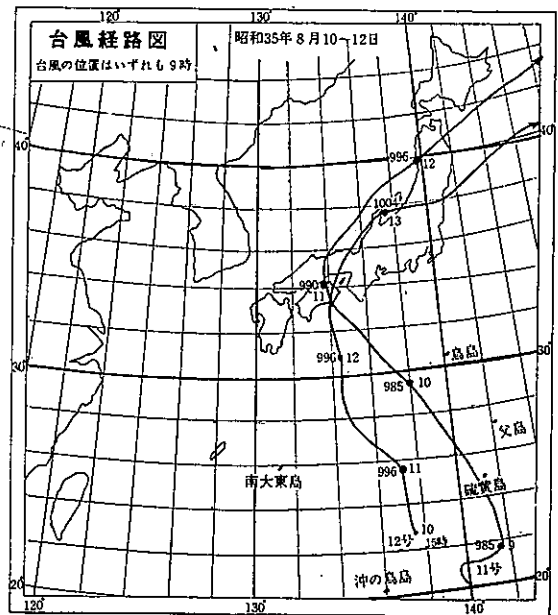
被害状況

行方不明	1人
家屋倒壊	1戸
床上浸水	6 "
床下浸水	353 "
水田埋没	3 ha
" 冠水	24 "
道路損壊	25カ所
橋梁流失	4 "
堤防決壊	4 "
崖崩れ	12 "

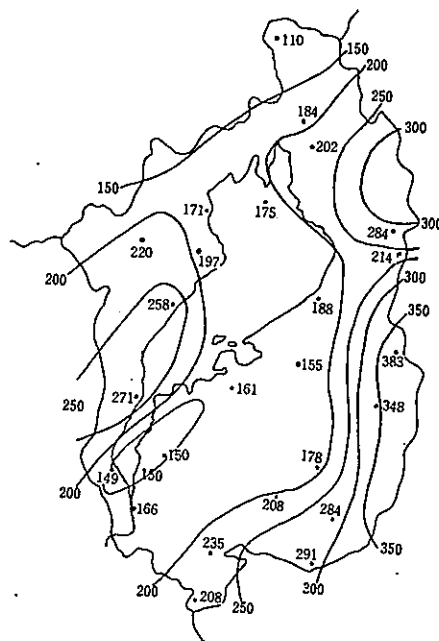
(被害は大津・長浜・虎姫・今津・堅田地方の順に大きい。)

8月29日 台風(6016)

17日グアム島東方洋上に発生し、18日朝までゆっくり北東に進み、その後は向きをかえ北西に進み、23日から25日にかけて殆んど停滞気味で反時計廻りにループを画いた。26日朝から再び北西進し、28日21時には足摺岬南方約300kmの洋上に達した。その後は進路を次第に北～北北東に変え、29日14時頃、高知市の西方に上陸し、四国中央を横断して中国地方中部を経て日本海に抜け、同日21時には隠岐島東方約100kmの海上に達した。その後は日本海を北北東に進み、31日には樺太中部に達した。

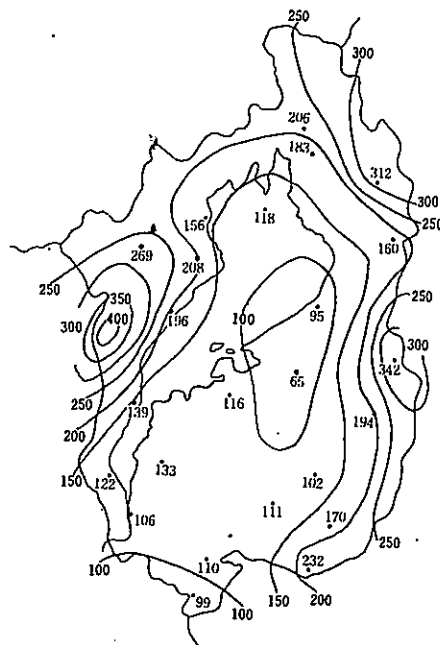


降水量分布図
昭和35年8月9～14日



本県では、28日午後から台風の影響が現われ始め、南東の風が次第に強く、県南東部では時どき強い俄雨を伴った。29日午後になって風雨は一層激しくなり、台風が四国から中国を北上する15時から21時にかけて最大風速15~20m/s、最大瞬間30m/sと最も強く、これに雨が加わって県下全般に激しい風雨となった。

降水量分布図
昭和35年8月27~30日



最大瞬間風速

彦根	SE	30.0m/s	29日 16時33分
能登川		36.0	29 16 50
野洲		31.0	29 17 51
石山		26.0	29 18 30
虎姫		31.0	29 18 30

このため、湖東・湖南の平野部では、早生水稲を始め農作物の倒伏するものも多く、次の被害があった。

被害状況

死者	1人	非住家被害	16棟
負傷者	5 "	田畑浸冠水	363 ha
住家全壊流失	1戸	道路損壊	10ヵ所
" 半壊	13 "	橋梁流失	1 "
" 床上浸水	42 "	堤防決壊	3 "
" 床下浸水	438 "	山崩れ	11 "
" 一部破損	38 "		

被害額調 (災害対策本部調 (千円))

建物関係	2,561	山林	5,130
田畑流失・埋没	9,800	土木河川	144,820
農業施設	18,850	砂防	6,000
農作物 水稻	139,700	道路	34,542
果樹	1,880	橋梁	5,340
野菜	5,040		
その他	1,800	合計	375,463

警戒状況

強風注意報発表	28日 21時30分	大雨注意報発表	30日 02時00分
風雨注意報 "	29 07 30	大雨・洪水注意報発表	30 05 00
暴風雨警報 "	29 15 20	同 上解除	30 10 30
風雨注意報 "	29 22 00	大雨注意報発表	30 18 40